

勤 勞 青 年 の 生 活 意 識

—労働と学習を中心とした構造的はあく—

# 勤 勞 青 年 の 生 活 意 識

—労働と学習を中心とした構造的はあく—

## 目 次

は じ め に .....	1
第1節 調査研究計画の概要 .....	3
1. この研究のねらい .....	3
2. 調 査 の 対 象 .....	3
3. 調査実施と調査内容 .....	4
4. 調査内容の分析—生活類型に即して .....	6
5. 研 究 の 経 過 .....	7
第2節 通勤青年（下宿型青年） .....	7
1. 家から通勤する青年の家庭事情 .....	7
2. 中小企業勤務者が大部分で、継続勤務者が過半をしめる .....	11
3. 勤続3年以上のものの身分や給与は、3年以下のものより相当よい .....	12
4. 労働条件は比較的恵まれている .....	15
5. 就職の動機とてづる .....	18
6. 家計補助—収入増加と生活の安定ねがう小市民意識 .....	23
7. 仕事の興味や関心の度合いと職業能力の向上 .....	27
8. 労働観……中小企業勤務の労働者気質 .....	32
9. 教育の機会と個人的修養 .....	35
10. 職業意識……転職希望者は定時制在学者にもつとも多い .....	41
11. 悩み—生きがい—生活理想 .....	45
12. 労 組 意 識 .....	50
13. 調査結果の要約と教育上の問題点 .....	52
第3節 住込み青年（徒弟小僧型青年） .....	59
1. どんな住込み青年がいるか .....	59
2. 長時間労働で休日も少なく報酬も低い .....	62
3. 仕事の興味や関心は高く、腕をあげることに努力している .....	65
4. 労働観—仕事は腕でこい .....	70
5. 職業意識—職場や仕事の継続意志は高い .....	73

6. 悩み—生きがい—生活理想 .....	75
7. 教育の機会 .....	79
8. 調査結果の要約と教育上の問題点 .....	84

#### 第4節 農業青年（自営型青年，抱え込み型

##### 二・三男および女子青年） .....

1. 農家の実態と青年たちの経営参加状況 .....	90
2. 仕事についての考え方 .....	92
3. 労働観 .....	95
4. 青年たちからみた家の暮らしや収入 .....	97
5. 悩み—生きがい—生活理想 .....	100
6. 教育の機会 .....	104
7. 調査結果の要約と教育上の問題点 .....	109
8. 資料 .....	110

#### あ と が き .....

## は じ め に

全国教育研究所連盟は、昭和32、33年度に勤労青少年の共同研究として、「中学校卒業後における勤労青年の職業生活の推移と職業教育の機会」に関する研究をとりあげ、32年度には、全国的規模にわたる男女約16,000名にのぼる中卒後の勤労生活の推移と、学習生活の機会に関する質問紙調査を実施し、33年度には、第二次の段階として勤労と学習の条件を規定する現場の構造及び転職の要因に関する研究をおこなった。これらの結果については、全国教育研究所連盟編「勤労青年の生活」に集録して、昭和34年12月に発表した。

また34年度には、これらの発展として、「勤労青年の生活意識の形成過程に関する研究」をおこない、生活意識の構造的はあくにつとめたのであるが、全般的にみて、生活意識の中心的問題をとらえる段階までにとどまり、全体的な構造的はあくといふところまでおよび得ない点があった。

県立教育研究所もこれら一連の共同研究に参加し、それらの研究結果を「勤労青年の職業生活の推移と教育の機会」「農村青年の人間形成」（以上いずれも研究紀要第20集に集録）、「青少年の生き方とその指導」（研究紀要第25集）の中の、第3部「中学校卒業後の青年の生き方」にまとめて発表した。

さて、34年度の研究では、勤労青年の生活意識の形成過程について、集団事例的研究としては成果をあげたが、それはあくまで特定集団のものであり、これを一般化することが課題とされていた。そして、これを果たすために計画されたのが、35年度共同研究としての「勤労青年教育調査」であって、全国から層化抽出された約10,000名の19才勤労青年に対し、質問紙による回答を求めたものである。

本県においては、全体設計の中で11市町村が対象となった。ここでは、それら11市町村から抽出された対象者の調査研究について、その結果をまとめることにした。調査人員は534名にのぼっており、ここで取り扱う資料だけから本県を代表しうる結果は期待できないのであるが、調査範囲内で結果をできるだけリアルに記述し、おおかたの参考資料として提示することにした。なお、資料の中へできるだけ前からの研究結果や本年度共同研究結果の集計資料をとり



入れることによって、全国的視野からみたものとの比較もまじえ、しかも構造的に問題を検討するよう心がけた。

(備考)

- (1) これからの記述で、特に資料の中へ「全国集計」「全国勤め人」などとして引用したのは、35年度の共同研究「勤労青年教育調査」の集計をしたものである。
- (2) 「勤労青年の生活」からとあるのは、32, 33年度共同研究の結果を集録した前記著書からの引用を示している。

## 第1節 調査研究計画の概要

### 1. この研究のねらい

この研究は、勤労青年の生活の実態と生活意識を数的にはあくすることによって、生活意識の構造、とくに、問題意識と問題への対応の仕方について各種の検討を加える。とくに、勤労青年が働くこと（労働）と学ぶこと（学習）を全生活領域や意識の中でどのように位置づけているかという点に焦点を合わせ生活意識を構造的にはあくするようつとめるとともに、学校教育とか社会教育という限定されたわくぐみを越えた、真の勤労青年教育の問題解決に役立つ資料を得ようとするものである。

### 2. 調査の対象

#### (1) 満19才の勤労青年を対象とした。

満19才の青年で（昭和16年4月2日から昭和17年4月1日までの間に出生）義務教育終了後就職（就業）した勤労青年（既婚者を除く）を母集団とし、これから全国10,000名の標本を抽出した。これらの青年はいずれも六三制の落し子といわれ、戦後の新教育によって育てられた若者であり、公教育の立場から特に重視されなければならない年代に当たっている。いわば後期中等教育の年令段階を終り、一応人生への前途を見定めなければならない年令に達しているとみられる。

#### (2) 調査地点の抽出と標本青年

全国の市町村を、産業別就業人口を基として層化し、無作為抽出法によって308地点（市区町村）を抽出し、それら調査地点からさらに標本青年を抽出した。

このような基本方針から、本県では次の11市町村が抽出され、標本青年374名が割りあてられた。

第 1 表

本県調査対象市町村と標本青年数

市 町 村 名	地 帯	割り当てられ た標本青年数	仮標本青年	調査実施 標本青年	有効回収 数
刈羽郡刈羽村	農業地帯	35	85	54	14
南蒲原郡下田村	"	35	120	96	42
西蒲原郡中野小屋村	"	—	105	96	45
西蒲原郡巻町	準農地帯	43	128	93	43
栃尾市	"	40	126	105	81
北蒲原郡紫雲寺町	"	33	108	73	46
南魚沼郡塩沢町	"	33	123	84	46
十日町市	農工地帯	43	182	146	56
高田市	農工商地帯	59	517	165	82
新発田市	農商地帯	16	60	30	20
新潟市	商工地帯	37	290	113	54
計		374	1,844	1,055	534

〔注〕西蒲中野小屋村は、刈羽村が最終的に抽出数に満たなかつたため、後から補正抽出を受けた村である。

さて標本青年の抽出であるが、各市町村の住民登録簿台帳から、割り当てられた標本青年の約 4 倍の 19 才青年を選び出し（本県では 1,844 名を抽出したが、これを仮標本青年とよんでいる。）その中からさらに全日制高校在学及び卒業生、無職者、既婚者などを除いた調査実施標本青年を決定した。

### 3. 調査実施と調査内容

標本青年の決定は、調査実施地域の中学校、公民館等の協力をえて、仮標本青年 1,844 名の中から 1,055 名が選ばれた。調査用紙はそれらの標本青年に中学校、あるいは公民館等を通して交付、記入を依頼した。しかし最終的にえた有効回収数は 534 名で、第 1 表のとおりである。

さて、調査の内容であるが、研究のねらいで述べたように、勤労青年の生活意識をとらえるには、生活の全領域を考慮しなければならないが、とくに労働と学習における問題状況や生活意識を究明するために、職業、学習、家庭、余暇などの領域にかぎることが前提となった。また調査項目の数は、それぞれの調査事項の重要度からきめられたが、具体的調査事項は大体次の内容からなっている。

#### (1) 家庭の状況

イ 世帯主の最終学歴、職業、月収

ロ 家族数、有職者数、総月収

(2) 勤務先の状況

イ 産業分類

ロ 規模……資本金、従業員総数

ハ 労働条件……身分、労働内容、労働時間、作業環境、休日、賃金等

(3) 個人の状況

イ 家庭における地位……続柄、家業継承の問題、家計分担

ロ 職場との関係……通勤形態、就職のてづる、労働組合加入の有無

ハ 地域との関係……青年団その他の団体やサークル等

ニ 余暇生活……学習、遊び等

(4) 生活意識

A 労働に関する事項

イ 現職場選択の理由

ロ 技術（技能）の程度と教養

ハ 職場への不平不満と解決方法

ニ 仕事への愛着と嫌悪

ホ 現職（場、種）継続の意志

ヘ 仲間意識や労組意識と職業観

B 家庭に関する事項

イ 家計負担からくる圧迫感

ロ 家族関係に関するなやみ

C 学習（教育）に関する事項

イ 学習した（できなかった、しなかった）動機（理由）

ロ 現在もっている学習意欲

a 労働に直結する学習か

b 一般教養か

aについては、現在の職場に直結するものかどうか

D 悩みや生きがいや生活理想

イ 悩みとそれをうちあけられる人

ロ いちばん生きがいを感じていること

ハ 生活の理想

#### 4. 調査内容の分析——生活類型に即して

調査票は、具体的調査事項を72項目の分析内容をもった質問事項にまとめ、これらを構造的にはあくできるように構成されている。全国抽出約10,000名の調査票は、これを記号化して機械集計に移されたのであるが、本県においてはそれらを手集計によって分析考察をおこなった。

その方法として、まず最初に534名の19才勤労青年を生活類型に分類した。生活のタイプは、本県で予想される常識的なものにまとめてみたが、同じ農業青年であっても、自営者となる青年と二・三男、あるいは女子とでは生活意識に質的な相異が考えられるし、商工青年といっても、家を下宿的存在として職場に通勤している下宿型青年と、勤務先に住み込んでいる住込み型青年とでは物の見方、考え方にかなりの相異があろうと思われる。また現に商工業の家業に従事している長男層は、いわゆる若旦那型とも称すべき青年であり、これらに属さない青年と、商工業青年層を大きく四つの型に分類した。

次に、分析上心要と思われる観点から、農業青年では経営規模別に、商工業青年では職種による分類を加えることにした。しかし細分されていくと、調査人員がきわめて少なくなる部分もあるので、実際にはこれらの要素を多くもりこむことはさけた。

以上の分類にしたがってまとめた調査人員を、第2表および第3表に示すことにする。



第2表

農業青年生活類型別調査人数

生活類型 (男女)別 經營 規模別 市町村名	自 營 型					抱 え 込 み 型										雇 用 者		計		合 計	
						二 ・ 三 男					長 ・ 二 ・ 三 女										
	～1町	1～2	2町 以上	不明	計	～1町	1～2	2町 以上	不明	計	～1町	1～2	2町 以上	不明	計	男	女	男	女		
	市町村名	～1町	1～2	2町 以上	不明	計	～1町	1～2	2町 以上	不明	計	～1町	1～2	2町 以上	不明	計	男	女	男		女
刈 羽 村	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	3	—	—	—	3	3	
下 田 村	3	1	—	—	4	—	2	—	—	2	2	10	1	1	14	—	1	6	15	21	
栃 尾 市	6	4	—	2	12	2	4	—	—	6	4	3	—	1	8	—	—	18	8	26	
巻 町	—	2	1	—	3	—	1	2	—	3	2	6	2	—	10	—	—	6	10	16	
紫 雲 寺 町	—	3	6	—	9	—	2	2	—	4	1	6	8	2	17	1	4	14	21	35	
塩 沢 町	5	4	—	—	9	1	3	—	1	5	6	8	—	1	15	—	1	14	16	30	
十 日 町 市	3	3	—	1	7	2	1	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	10	—	10	
高 田 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
新 発 田 市	—	—	1	—	1	—	1	1	—	2	—	—	1	—	1	—	—	3	1	4	
新 潟 市	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
中野小屋村	—	2	4	—	6	—	1	3	—	4	1	5	15	—	21	—	2	10	23	33	
計	17	19	12	3	51	5	15	8	1	29	17	40	27	5	89	1	8	81	97	178	
百 分 率	51÷81×100=63.0					29÷81×100=35.8										1.2		100.0		100.0	
全国集計百分率	54.7					32.8												1,149名		915名	

- (注) 1. 住民登録簿台帳で、長男、あるいは養子で明らかに家業を継ぐとみなされる男子を自営型とした。  
 2. 二・三男の中でも家業を継がねばならない事情のものがいたかもしれないが全部抱え込み二・三男として取り扱った。  
 3. 全国集計男子百分率のうち、養子0.7%、続柄不明11.9%は除いてある。



第3表

商工青年生活類型別調査人数

生活類型 男・女	職業別 市町村別	若旦那型					下宿型(家から通勤)										下宿型(下宿・寮から通勤)										住込み型										その他										計		合計			
							男					女					男					女					男					女					男															
		工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	工員	事務	サービス	建築	その他	計	男	女	
刈羽村	—	—	—	—	—	5	1	—	2	—	8	—	3	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	3		
下田村	—	—	—	—	—	2	1	—	4	1	8	—	2	—	—	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	7		
栃尾市	—	—	—	1	—	5	—	—	—	—	5	27	3	1	—	2	33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12	43		
巻町	—	—	1	—	1	2	5	2	1	2	—	10	2	4	1	—	3	10	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17	15		
紫雲寺町	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	3	—	1	1	—	—	2	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	4		
塩沢町	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	2	11	—	—	—	1	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	12		
十日町市	—	—	—	—	—	17	1	—	—	2	20	6	5	—	—	3	14	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25	21		
高田市	1	—	—	—	—	7	1	—	2	2	12	15	3	2	—	8	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	30	52		
新発田市	—	—	—	1	—	3	3	—	—	2	8	1	2	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	9		
新潟市	—	—	—	—	—	9	2	1	2	6	20	5	17	7	—	1	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	23	31		
中野小屋村	—	—	—	—	—	5	2	—	1	1	9	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	1		
計	1	—	1	2	1	5	61	13	2	14	105	67	40	12	—	20	139	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	162	194		
百分率	5÷162×100=3.1					105÷162×100=64.8					139÷194×100=71.6					3÷162×100=1.9					14÷194×100=7.2					30÷162×100=18.5					31÷194×100=16.0					19÷162×100=11.7					10÷194×100=5.2					100.0	100.0					
全国集計百分率						65.6					72.5					7.6					7.7					23.8					17.5					0.9					0.6											

(注) 全国集計百分率は、勤め人男子3,726名および女子3,241名の通勤形態からみた割合を引用した。全国集計では重答・無答が男子2.1%、女子1.7%あるが、ここでははぶいてある。

## 5. 研究の経過

35年5月 全国教育研究所連盟大会において、本年度の共同研究の大綱が承認された。

7月 全国共同研究委員総会において種々検討をおこない、その結果にもとづいて実施案を作成した。

8月下旬～10月上旬 11市町村の調査実施、調査票回収

10月中旬 調査項目の付号化と個票への転記

10月下旬 中央へ本県割り当て374名分の個票送付

11～3月 結果の分析、解釈、報告書の作成

## 第2節 通勤青年(下宿型青年)

### 1. 家から通勤する青年の家庭事情

これから分析する通勤青年は、男子105名、女子139名、計244名で、それらの内訳はすでに第3表で示したとおりである。この中には、同じく下宿型とみられる下宿、寮からの通勤者14名を一応除いてある。

さて、これら通勤青年たちは、隣近所に、幼少期からの顔なじみの友人がたくさんいるし、また同じ通勤仲間が幾人もいるという状況にある。このような状況を察するに、通勤途上、あるいは勤務先における彼ら相互間には、特別の親愛感や話合いがあるであろうことは想像に難くない。

お互いに職場を生命としている以上、職場における情報交換によって、不満はもとより、各自の職場の長所や短所、自己の待遇や位置づけ、さては労働条件の優劣、将来性の有無などが話題となることは当然であろう。

彼らは職種のいかに問わず、家から通勤しているという条件において共通の事情にある。それは農村から、いきなり身体一つで大都市の未知の職業社会にとびこむ青少年とは、全く事情を異にしている。毎日家族と同居し、竹馬の友ともつきあいつつ、近くの工場、事業場などに働くのであるから、就職の第一歩からさほどの厳しさは感じられないのである。

(1) 農家出身者が多く二・三男の率が高い。

ではどのような家庭事情にあるものが通勤しているのであろうか。それを父の職業からみたものが第4表である。男女とも農家出身者が約4割近くをしめ、第二次産業従事者の家庭からは男女とも3分の1となっている。全国集計と比較して（ただし、勤め人として大きくまとめているので、純粋に比較するのは無理であるが、日安として大きな狂いはなからう）農家出身の子が多いと

第4表 父の職業別にみた通勤青年の人数とその割合  
(全国集計との比較)

父の職業 男女別	農、 林、 漁、 業	自 商 店、 工場 など	人 夫 や 工 夫	大 工、 左 官 など	工 人	運 手 な ど の 技 術 的 業 者	職 業 人 員	販 売 人、 集 金 人 など	外 交 員 な ど	事 務 員	教 員 や 吏 員	そ の 他 の 職 業	無 職	重 答、 無 答	計
男 子 人 数	41	5	9	16	10	1	2	4	2	6	5	4			105
" "	39.0	4.8	8.6	15.2	9.5	1.0	1.9	3.8	1.9	5.7	4.8	3.8			100.0
"うち長男人数	7	1	2	4	3	—	1	—	2	—	2	1			23
" "	17.1	20.0	22.2	25.0	30.0	—	50.0	—	100.	—	40.0	25.0			21.9
"二・三男人数	34	4	7	12	7	1	1	4	—	6	3	3			82
" "	82.9	80.0	77.8	75.0	70.0	100.	50.0	100.	—	100.	60.0	75.0			78.1
女 子 人 数	51	3	6	7	26	7	3	8	3	12	10	3			139
" "	36.6	2.2	4.3	5.0	18.7	5.0	2.2	5.8	2.2	8.6	7.2	2.2			100.0
全国勤め人男子%	31.4	8.1	3.9	8.2	14.1	4.3	2.7	4.1	3.2	12.0	5.6	2.3			100.0
" " 女子%	30.5	8.4	3.1	8.1	12.6	4.3	3.1	5.3	3.9	12.6	5.2	2.9			100.0

- (注) (1) 長男・二・三男の百分率は、職業別の男子人数に対するものである。  
 (2) 父の死亡している者については、生前の職業を記入してもらった。  
 (3) 全国勤め人は男子 3,726名、女子 3,241名についての反応百分率であつて勤め人の中に 第一・二・三次産業及び分類不能も含め、通勤・住込み等合計してある。

第5表 両親の健康否 (全国集計との比較)

男女別	応 答	両親あり	父なし	母なし	両親なし	無 答	計
本県男子	人数	79	15	6	4	1	105
" "	%	75.2	14.3	5.7	3.8	1.0	100.0
" 女子	人数	102	32	2	1	2	139
" "	%	73.5	23.0	1.4	0.7	1.4	100.0
全国勤め人男子%		68.0	24.0	4.6	2.7	0.6	99.9
" " 女子%		71.0	22.2	3.6	2.6	0.6	100.0

とは、やはり本県の中小企業勤務者の実態を示すものであるまいか。なお、男子の続柄のうち、長男が約22%、二・三男が78%となって、後者が4倍近くも多くなっているが、全国集計では長男が36%、二・三男が50%、続柄不明14%で、本県とは様相を異にしている。数年前まで、農家の抱え込み二・三男が多いことで代表された本県であるが、第2表でみられるように、農家二・三男の在家率も全国なみに変ってきており、(本県は長男63%、二・三男36%、全国長男55%、二・三男33%)、抱え込み青年の減少が商工業に就職転化してきているとみられる。

次に第5表によると、両親とも健在の家庭は男子75%、女子73%で、欠損家庭は男子24%、女子25%といづれも約4分の1をしめている。全国的にも大体似たような傾向にあるが、本県の率がやや低くなっている。このように欠損青年が多いということは、戦争による直接の被害が影響しているのであろう。

## (2) 家の収入の実態……楽じやない。

家庭における働き手は本人をふくめてきいたところ、第6表のように、3人が3分の1、4人がこれにつき、5人、2人、6人とその割合が減少していく。3人というのは、両親が健在ならば本人と両親ということになるであろう。大体3人あるいは4人が標準的とみてよいようである。全国集計でも男女とも3人が約33%、4人が23%となっている。

第6表 家族のうち働いている人数別の割合

男女別	家族数								備考
	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	
男子(%)	1	14	33	27	16	8	—	1	105 家族に対する割合
女子(%)	3	13	34	28	14	7	—	1	139 家族に対する割合

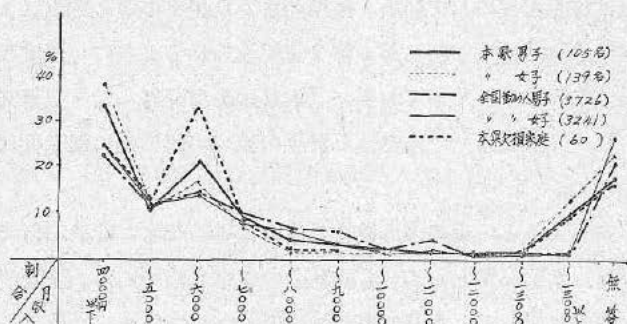
このような働き手から構成されているこれら家庭の収入が、どうなっているかをみたのが次の第1図である。これは、家族の月総収入を、その家の家族総数で割った家族1人当り月收入を算出し、その段階別の割合を示しているが、1人当り4,000円以下が、男女とも3分の1以上をしめ、6,000円以下をふくめると、男女とも65%もの家庭がその中に入る。

これは、5人家族で20,000円～30,000円の収入ということであり、3人家族



で 18,000 円以下となって、一般的にいて、生活が安定しているとは受取れない状態であるまいか。特に 月 4,000 円以下の収入では、生活がやっとできるそ

第 1 図 家族 1 人当り月收入別の割合 (全国集計との比較)



の日暮的なものでないかと想像されるし、極貧といった家庭もあるかもしれない。(注 参照)

(注) 私たち働く人間が、人間らしい生活をするために最低どのくらい必要かを、労働科学研究所が昭和 27 年 (8~10 月) 調査した結果では、東京都で 1 消費単位当り

・月 4,000 円以下の生活

肉体的にも精神的にも労働力の再生産は危機線上におかれ、疾病が多く健康保持上きわめて危い状態で、衛生上からも非文化的。住宅は極端に低劣で過密居住。フロにもろくに入れず、主婦の大部分はオーバーも和服コートもなく、雑誌もほとんど読まず、寝巻をもつものは半分前後という生活状態。

・4,000 円をこえる生活

危機線は一応通りすぎるが、健康保持の点は不十分。だが鍋釜などは所要量をととのえフロにも十分入れる。

・5,000 円以上の生活

ラジオももち、被服寝具、住居の状態も良好化する。

・6,000 円以上の生活

最低生活費に近い水準をみたしてゆく。雑誌を読む冊数もふえ、文化的生活の香りも高まる。しかし全体的にみると 7,000 円以上になってミニマムの水準に達する。

・7,000 円以上の生活

被服状態もよく体裁は一応維持できるし、文化的生活の面でもミニマムをみたすことができる。蛋白質、ビタミン類の摂取量も十分で健康状態もよく身体の欠陥は少ない。これは「最低健康体裁愉快水準」と名付けられるが、これでも住宅の点では不十分で過密居住が若干みられる。

これによると 1 消費単位当り (1 人当り) 7,000 円は最低生活費用 (税金、社会保障

料を除く)である(ただし東京都の場合)。現在では当時より消費者物価指数は約20%上昇しているから、当時の4,000円以下は4,800円以下、7,000円以上は8,400円以上ということになる。この基準によれば現在の低所得水準世帯の大部分は最低生活費水準にも達せず、保護世帯や日雇などは、標準世帯(家族5人)に換算すれば当時の4,000円以下の層がほとんどである。

以上は、1958年10月発行の森 吉一著「都市の貧困」の中から引用したものである。(51～52ページ)。

では欠損家庭はどうであろうか。4,000円以下が4分の1(25%)をしめ、5,000円～6,000円が3分の1(33%)で、男女別でみた全体的傾向よりは、収入が高いことを示している。これら欠損家庭のうち、父のない家庭が80%もあるのも、一家の支柱を失っているという常識的判断からは、収入の不安定を予想していたのであるが、事実は予期以上のものであることがわかった。全国的にみると、総体的に本県よりはいくぶん高い収入を得ているといえるが、大きな差は認められない。

## 2. 中小企業勤務者が大部分で、継続勤務者が過半をしめる

以上のような家庭事情にある青年たちは、一体どのような職業についているのであろうか。第7表によると、通勤者全体では工員が53%で半数強、事務販

第 7 表 通勤青年の職業別人数およびその割合(全国集計との比較)

職業別		工	員	事務販売	サービス	建築運輸	その他	計
男女別								
本県男子	人数	61	13	2	14	15		105
" "	%	58.1	12.4	1.9	13.3	14.3		100.0
本県女子	人数	67	40	12	—	20		139
" "	%	48.2	28.8	8.6	—	14.4		100.0
本県計	人数	128	53	14	14	35		244
" "	%	52.6	21.7	5.7	5.7	14.3		100.0
全国勤め人男子%		49.0	12.2	2.9	12.5	12.8		—
" " 女子%		36.8	27.7	10.8	1.5	16.8		—

(注) 全国集計は百分率で示したが、勤め人の中には農業、漁労水産も若干入るので、計は記入しないことにした。

売従事者が22%、サービス業従事者、及び建築運輸関係従事者がそれぞれ6%となっている。これを男女別にみると、男子は工員と建築運輸の割合が増し、女子は事務販売及びサービス業が増して工員が減じ建築運輸従事者はいない。いづれにしても工員のしめる割合が大きく、全国の勤め人の中でしめる工員の



割合よりも高率であることは、通勤青年の位置づき方が、本県における社会的要請の現実として、こうした形をとらせたものと思われる。

これらを勤務先の企業規模でみると、第8表のようである。すなわち、男女とも10人以上99人以下従業員数の小さな企業（第三次産業では9人以下）に勤めるものが40%前後をしめ、100人以上499人以下の中位の企業（第三次産業では10人以上49人以下）勤務者が約4分の1おり、9人以下や家族従業者のみのいわゆる零細企業に勤めるものは、男子20%、女子12%となっている。これらをあわせると、男子の82%、女子の76%が中小企業や零細企業に就職している

第 8 表 勤務先の企業規模別割合（全国集計との比較）

二次産業→ 三次産業→ 資本金→	～9人 家族従業員 者のみ	～99	～499	～999	1,000人 以上	官公 庁舎	無答	計
		～9 万円	～1,000 万円	～1億円	～99 100人以上 10億円 以上			
本県男子 人数	21	40	26	7	7	—	4	105
" " %	20.0	38.0	24.8	6.7	6.7	—	3.8	100.0
" 女子 人数	16	60	30	13	4	—	16	139
" " %	11.5	43.1	21.6	9.4	2.9	—	11.5	100.0
全国勤め人男子%	23.8	30.4	16.7	7.8	12.8	2.3	6.1	99.9
" " 女子%	16.2	28.9	20.6	9.2	12.2	4.5	8.4	100.0

（注）資本金で回答した者は少なく、従業員数での回答が多かった。

ことになる。

次に500人以上の（第三次産業50人以上）大きな企業に属する会社事業所へ通勤している青年は、男子14%、女子12%に過ぎない。

これらを全国集計の勤め人と比較すると、大体似かよっているが、10人以上99人以下の小さな企業が男女とも本県より減り（男8%、女14%減）、それにとまって大きな企業への就職が増加している（男6%、女9%増）。また本県では官公庁社の勤務者がみられなかったが、全国集計では男女に若干みられる。

### 3. 勤続3年以上のものの身分や給与は、3年以下のものより相当よい

これら通勤者が、現在の職場に継続してどれくらい勤務したかをみたのが、第9表である。

第 9 表

勤続期間別人数とその割合（全国集計との比較）

	半年未満	半年以上	一年以上	二年以上	三年以上	無答	計
本県男子 人数	8	6	11	16	61	3	105
" " %	7.6	5.7	10.4	15.2	58.2	2.9	100.0
本県女子 人数	10	7	13	24	81	4	139
" " %	7.2	5.0	9.4	17.3	58.2	2.9	100.0
全国勤め人男子%	8.9	8.9	13.4	14.1	52.3	2.3	99.9
" " 女子%	11.3	11.7	16.7	14.4	43.4	2.4	99.9

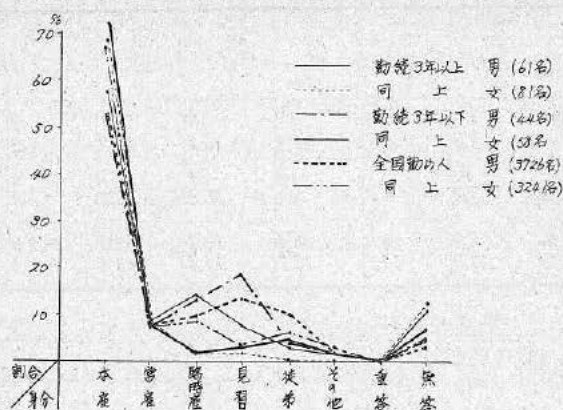
男女とも3年以上勤続者がそれぞれ58%と過半をしめている。これらの通勤者は中学校卒業後、定着して継続勤務しているとみられるが、全国の勤め人では、この点において男女とも本県より下まわっており、特に2年以下の転職したことがあると思われる勤務者の増加がめだたて多い。

では、こうした勤続期間をもつこれら通勤者の、勤務先における身分はどうなっているのだろうか。中学校卒業後すぐに就職するものにとって、大企業への安定した身分はあこがれのまゝであるのにちがいない。たとえ中小企業に入っても、臨時雇や見習の地位に甘んずることは、同じ通勤仲間に対するプライドが許さないはずである。全般的にみて、男女とも65%前後が本雇として勤務し、常雇を加えると70%強が、それぞれの職場において望みうる地位を得ているとみられる。

これを勤続3年以上のものと3年以下のものとの比較し、全国勤め人の集計をも加えたものが第2図である。男女とも3年以上勤続者に本雇が多く（男74%、女69%）、3年以下勤続者の本雇の率とくらべるとその差は、男子22%、女子12%にもなり、それが逆に3年以下の臨時雇、見習の高い割合を示す要因となっている。このように、3年以上勤続者に本雇が多いということは、勤務先での安定した地位を得ているものとみなされるであろう。全国集計では、男子に臨時雇、見習、徒弟が多く、本県の3年以下の傾向とやや似ている。しかし女子は男子よりも本雇が増加し、見習、徒弟が減少している。

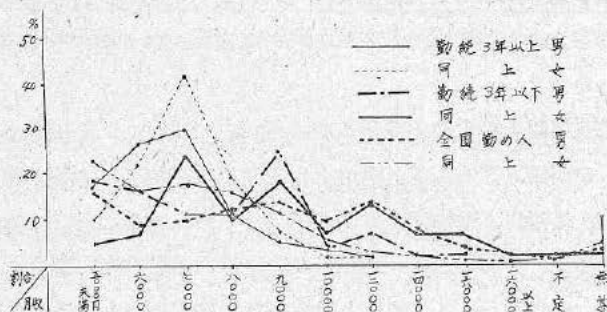
次に、このような身分と表裏一体に考えられる給与の実態を分析してみる。第3図は、勤続3年以上の定着してきた者と、3年以下の者の月平均手取収入の割合を示したものである。この手取の中には残業手当もふくまれているが、

第 2 図 勤続3年以上（以下）の者の身分別割合（全国集計との比較）



まず男子では勤続3年以上の者に山が三つある。一番高い山は6,000円から7,000円までで23%，次が8,000円から9,000円までの18%，さらに10,000円から12,000円の14%である。3年以下の男子では、5,000円未満の最低に属する給与者が18%，5,000円～6,000円が16%と高く、8,000円～9,000円が25%と最も多い。しか

第 3 図 勤続3年以上以下の者の月平均手取収入別の割合



し全体として給与の低い方へ傾いている。

女子では、3年以上で6,000円～7,000円の42%がきわめて高く、5,000円～6,000円が21%，7,000円～8,000円の19%が両翼をなしている。しかし、3年以下が低い方に傾いていることは男子同様である。

このように3年以上勤続者の給与が平均してよいのは、一応注目しなければならない。中学校卒業後3年半を同一事業場や会社等で努力し続けた者と、そ

の間転職して廻り道をたどった者や、就職が1年なり2年おくれた者との差がそれなりに反映したものとみられる。これが長い将来どのように影響していくものかは、興味ある問題である。

全国集計では、男子に5,000円未満が多く、6,000円～7,000円が少なく、他は本県の定着型と大体同じ程度である。女子は6,000円以下が多くなっている。

では、職種別にみた場合どんな傾向があるだろうか。第10表によると、男子では工具ならびに建築運輸関係（主として大工、左官、運転手）に給与の高い

第10表 職種別にみた男女別月平均手取収入別の割合（％）

	5000 円未満	～6000	～7000	～8000	～9000	～10000	～12000	～14000	～16000	～16000 以上	無答	算定の 基礎人 数
男子 全員	10	10	18	10	22	6	11	5	5	1	2	105
" 工 員	8	10	24	7	20	8	11	7	3	—	2	61
" 建築運輸	22	—	7	7	22	7	7	7	14	7	—	14
" 事務販売	15	31	8	8	23	—	15	—	—	—	—	13
女子 全員	13	23	37	14	6	1	1	—	—	—	5	139
" 工 員	4	16	47	21	8	—	—	—	—	—	1	67
" 事務販売	18	32	35	8	5	—	—	—	—	—	2	40
" サービス	17	8	17	8	17	8	17	—	—	—	8	12

者がみられ、女子ではサービス関係が比較的高い。

#### 4. 労働条件は比較的恵まれている

これまでみてきたような給与の現状において、通勤青年の労働条件はどうなっているのだろうか。

第11表によると、7時間から8時間以内の基準的な労働時間のベース（注1）にある者が男子33％、女子44％と最も多く、次いで8～9時間が（注2）男子32％、女子34％と近接している。9時間以上10時間以内は、残業が1時間以上含まれているものと想像されるが、男子が21％、女子12％で男子が多くなっている。10時間以上働いている者は、表では男子工具に6名、女子の事務販売及びサービスにあわせて8名みられる。この限りでは、男子の約70％、女子の80％が9時間以内の労働時間ということになり、残業もほとんどしていないと判断できるのであるまいか。これにくらべ、全国集計では、10時間以上の勤



第 11 表 職種別，男女別，1 日の平均勤務時間別の人数と割合

……全国集計との比較

	5時間 以下	5～ 6	6～ 7	7～ 8	8～ 9	9～ 10	10～ 11	11～ 12	12 以上	不定	無答	計
本県男子全員（人数）	2	1	1	35	34	22	5	2	2	1	—	105
“（%）	1.9	1.0	1.0	33.2	32.3	21.0	4.8	1.9	1.9	1.0	—	100.0
内 { “工 員（人数）	—	1	—	24	21	9	3	2	1	—	—	61
“ 建築運輸（“）	—	—	—	3	5	6	—	—	—	—	—	14
“ 事務販売（“）	—	—	—	4	5	4	—	—	—	—	—	13
本県女子全員（人数）	—	—	2	61	48	17	2	5	3	—	1	139
“（%）	—	—	1.4	44.0	34.5	12.2	1.4	3.6	2.2	—	0.7	100.0
内 { “工 員（人数）	—	—	—	26	36	5	—	—	—	—	—	67
“ 事務販売（“）	—	—	—	20	9	6	1	2	1	—	1	40
“ サービス（“）	—	—	—	3	3	2	—	3	1	—	—	12
全国勤め人男子（%）	0.3	0.4	2.8	30.4	22.0	23.0	6.3	6.3	6.9	0.2	1.4	100.0
“ “ 女子（“）	0.3	0.6	2.6	40.6	21.4	16.0	4.6	3.9	8.1	0.4	1.5	100.0

務者が男子21%，女子約19%と断然多いのは，大都市中小企業労働者の実態を反映しているものと考えられる。

（注1）労働基準法第4章労働時間の項に，第32条一使用者は，労働者に，休憩時間を除き1日につき8時間，1週間について48時間を超えて労働させてはならないとある。

（注2）また第36条では，使用者が労働者側と協定を結べば，時間外と休日労働をさせられることが認められ，施行規則では従業員30人未満の商店では，1日9時間労働が認められている。今日ではこの時間外労働が平常労働化している傾向がみられる。

ところで，このような労働時間と休日とがどのような関連にあるのかをみたものが，次の第12表である。最近週1日休日をとる週休制は，第三次産業（特に商店）の中小企業にもとり入れられ，企業の合理化体制がこうした使用人の人権尊重といった形で進められているが，一方，会社や事業所に労働組合が結成されているところでは，比較的早くこのような体制に入っている。この表では，そうした関係もみるようにした。

まず，勤続3年以上の定着型と思われるグループと，3年以下の比較的勤続期間が短く，転職経験者も多いグループとに分類し，男子では定時制在学中のグループをもうけて検討の資料とした。定時制在学者は37名いるが，そのうち

第 12 表 勤労時間別勤続年数別にみた週休制と労組加入の実態

……全国集計との比較

		勤労時間		9時間以下	9時間以上	その他 答	計
性別	勤続 年数	区 分					
男	3年以上	時間別人数	24 (66.7)	12 (33.3)	—	36 (100.0)	
		週休制あり	10 (27.8)	7 (19.4)	—	17 (47.2)	
		労組加入	14 (38.9)	5 (13.9)	—	19 (52.8)	
	3年以下	時間別人数	19 (59.4)	13 (40.6)	—	32 (100.0)	
		週休制あり	11 (34.4)	4 (12.5)	—	15 (46.9)	
		労組加入	5 (15.6)	5 (15.6)	—	10 (31.3)	
子	定時制 在学	時間別人数	29 (78.4)	5 (13.5)	3 (8.1)	37 (100.0)	
		週休制あり	24 (64.9)	2 (5.4)	2 (5.4)	28 (75.7)	
		労組加入	14 (37.8)	1 (2.7)	1 (2.7)	16 (43.2)	
	計	時間別人数	72 (68.5)	30 (28.6)	3 (2.9)	105 (100.0)	
		週休制あり	45 (42.9)	13 (12.4)	2 (1.9)	60 (57.1)	
		労組加入	33 (31.4)	11 (10.5)	1 (1.0)	45 (42.9)	
女	3年以上	時間別人数	65 (80.2)	16 (19.8)	—	81 (100.0)	
		週休制あり	56 (69.1)	9 (11.1)	—	65 (80.2)	
		労組加入	35 (43.2)	8 (9.9)	—	43 (53.1)	
	3年以下	時間別人数	44 (75.8)	11 (19.0)	3 (5.2)	58 (100.0)	
		週休制あり	33 (56.9)	5 (8.6)	1 (1.7)	39 (67.2)	
		労組加入	14 (24.1)	1 (1.7)	—	15 (25.9)	
子	計	時間別人数	109 (78.4)	27 (19.4)	3 (2.2)	139 (100.0)	
		週休制あり	89 (64.0)	14 (10.1)	1 (0.7)	104 (74.8)	
		労組加入	49 (35.3)	9 (6.5)	—	58 (41.7)	
全国	勤め人	男子 (3,726人)	週休制あり 51.1%		労組加入 29.4%		
		女子 (3,241人)	" 67.6%		" 33.5%		

(注) 本県男女の百分率は、すべて計の人数を基礎として算出してある。

3 年以上勤続者が 25 名 (71.4%) ふくまれている。

男女とも 3 年以上勤続者の率が、3 年以下よりも高く、特に定時制在学者の週休制は、他の男子よりはるかに高率を示している。男子全体では、週休制が 57%，女子は 75% である。女子の率が高いのは、企業の種類や規模に関係なく男性と異なって弱い肉体の所有者であり、しかも母性であるという点などから



労働基準法では次の規定を特に女性のために定めているからである。

第61条 満18才以上の女子については、1日について2時間、1週間について6時間、1年について150時間以上の時間外労働をさせ、又は休日に労働させてはならない。

第62条 女子を午後10時から午前5時までの間において、使用してはならない。

次に週休制と労働組合の関係であるが、これは相関度がきわめて高く、労働組合に加入しているところは、大部分週休制を実施しているといつてもよい。第12表をみると、男子では定時制在学者の週休制実施率が約4分の3（76％）で、他の従業員グループより約30％近くも高くなっているが、労働組合加入率は43％で高いとはいえない。週休制を職種別で調べたところ、工員が72％、建築運輸が7％、事務販売が53％で、工員の率が高い結果がでた。一方女子は、定着型に週休制が多く（80.2％）労働組合加入も相当高い（53.1％）。このうち職種別では工員の85％、事務販売85％、サービス42％が週休制を実施している。女子は平均して75％が週休制をとっているが、労組加入は約42％である。昭和26年6月の調査によると、働く婦人のうち、組合に組織されている率は男子44％に対し、女子37％となっており（山川菊栄編 婦人 123ページ）、それからみればこの率はいくぶん高いといえる。

いづれにしても本県通勤者の労働条件は、満足すべき状態とはいえないが、全国勤め人よりは比較的恵まれた状況にあるといえる。ただし、ここでみられる労働組合は、その組織や活動状況が不明なので何ともいえないが、企業内組織からみて問題を多くはらんでいるであろうと想像される。

## 5. 就職の動機とてづる

通勤青年がどのような理由から現職を選んだかを第13表によって大観してみよう。男子では「自分にむいている」（28％）、「将来性がある」（19％）と考えて、意図的、積極的に職場を選択した者は47％と約半数に近くなっており、「親やまわりの人の意見」（19％）とか、「たまたま人にすすめられた」（5％）といった他律的、消極的な選択が24％で約4分の1である。さらに「適当な職がなかった」（13％）、「職場が近かった」（7％）ために入った者も

第13表

選 職 の 理 由 (全国集計との比較)

応 答		自分に むいて いる	将来性 がある	収入が よい	人にす められ た	親やま わりの 人の意 見	家業で しかなか った	ほかに 適職が なかった	職場が 近い	その他	重・ 無答	計
本県男子	人数	29	20	—	5	20	1	14	7	8	1	105
"	%	27.6	19.0	—	4.8	19.0	1.0	13.3	6.7	7.6	1.0	100.0
" 女子	人数	30	9	5	18	24	3	34	13	2	1	139
"	%	21.6	6.5	3.6	12.9	17.3	2.2	24.4	9.4	1.4	0.7	100.0
全国勤め人男	%	26.3	26.4	1.9	6.4	14.9	1.7	12.5	4.6	3.2	2.1	100.0
" 女	%	24.8	14.9	1.6	9.9	16.6	1.3	15.0	9.6	4.2	2.1	100.0

20%ある。

ところが女子は、「自分にむいている」(22%)とか、「将来性がある」(7%)と、意図的に職場を考えた者は29%にすぎない。そして「親や他からすすめられた者」が30%、「ほかに適職がなかった」(25%)、「職場が近い」(9%)といった便宜的とも思われる選択をした者が34%と、男子よりも14%も多くなっている。このように男女を比較すると、男子に職業選択の積極性がみられるのは、女子が結婚という条件によって事実上一生の進路が決定するのに対し、男子は就職そのものが、一生を支配する重要な問題である、との自覚の現われがこのような差を生んだとみてよいであろう。

全国集計による勤め人をみると、男子で、「自分にむいている」、「将来性がある」として希望的、積極的な意図を示した者は53%あるのに対し、女子では40%と、いずれも本県の場合より高い率を示している。特に女子についてみると、「ほかに適職がなく」(15%)やむを得ず現在の職についた者や、「職場が家の近くにあるため」(10%)他の条件は二次的に考えたと思われる便宜主義的な者が、あわせて21%と本県の女子よりも減少している。

このように職場選択の理由はいろいろあるが、これを入職のてづるにつけてたしかめてみると第14表のようになる。

ごくおおまかにみると、学校や職業安定所を経た公開ルートが男子で40%、女子で37%あって、他はいわゆる縁故というべきものに属している。その他とあるのは、友人知人はもちろん、募集広告等も入るわけであるが、男子の56%女子の55%がそれらに該当している。全国集計では、公開の公共機関を通じての入職者が男子35%、女子41%と、男子は本県の男子よりも低く、女子は逆に

第 14 表

通勤者の就職・てづる別人数とその割合

……全国集計との比較

てづる 区 分			学 校	職 安	縁 故	その他	無 答	計
実 数	本県	男子	28	13	38	22	4	105
	"	女子	33	19	40	36	11	139
	全国勤め人	男子	応 答 別 人 数 不 明					3,726
	"	女子	同					3,241
百 分 率	本県	男子	26.7	12.4	36.1	21.0	3.8	100.0
	"	女子	23.7	13.7	28.8	25.9	7.9	100.0
	全国勤め人	男子	23.9	10.8	39.3	23.3	2.7	100.0
	"	女子	30.2	11.0	34.4	21.6	2.6	99.8

高くなっている。

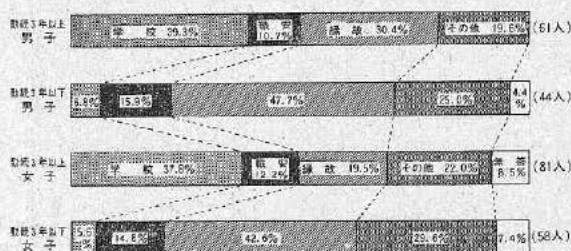
ここで注目しなければならないことは、就職のてづると転職の関係である。この調査では転職についてふれていない。しかし、32、33年度の共同研究結果からは、本県においても全国的にみても、男女ともに最初の転職を行なった時期は1年～2年の間がもっとも多くなっている。(注 昭和34年3月発行 研究紀要 第20集「勤労青年の職業生活の推移と教育の機会」13ページ参照)したがって、この調査でも、中学校卒業後3年半を経過している19才勤労青年を対象としたものであるから、勤続期間3年以下という中には、転職者が相当あるであろうと想像されるし、よしんば就職時期がいろいろの事情でおくれたとしても、その入職経路は縁故によるものが多いと考えられるのである。そして次のような共同研究結果は見逃すことができない。(注「勤労青年の生活」307ページより) すなわち

- ① 中卒当時の入職経路は、男女とも職安経由公開ルートの方が多いが、五年間の転職率は男子の方は公開ルートのものに、女子の方は縁故就職の方に転職者が多い。こんなところから転職内容の男女差が考えられる。
- ② 男女とも転職を重ねる度に縁故就職が増加する傾向にあるが、大企業ではけい返し、中・小企業に重視されがちな縁故就職が、卒業後年数のたった就職ほど多くなるのは、転職によって労働市場がせばめられ、将来の職業生活にも悪影響を及ぼすのでないかと考えられる。

と述べている。試みに、この調査における3年以上勤続者と3年以下勤続者

の入職てづるを男女別に比較してみる。第4図は以上の結論を有力に裏づけている。すなわち、勤続3年以上の定着グループは、中卒当時の入職てづるを示

第4図 勤続年数別にみた就職てづるの割合



しており、明らかに学校、職安による公開ルートが男女とも50%で半数に達している。しかし3年以下は縁故ルートが激増し、その他を含めて72%をこえ、多くは封鎖的な関係で行なわれる非公開ルートである。家族や知人の紹介による場合、身許保証に確実性があるとのことで一部事業所では歓迎するむきもあるし、雇用者と経路者との間に何らかの人間関係もできて、容易に転職しがたい関係にあるのだが、このような事業所は零細または中・小企業に多い。

また共同研究で入職てづると賃金ならびに企業規模との関係について、賃金関係では縁故→低賃金という傾向が男女ともに認められ（「勤労青年の生活」128、170ページ）、企業規模関係では男子縁故就職者は1人～5人、6人～29人という小規模企業に極度にかたよりをもっていることがみられ、職安・学校からの就職者は縁故就職より小規模企業への集約度ははるかに少なく、そして比較的、中規模、大規模への就職機会をもっていることを指摘している。（「勤労青年の生活」131ページ）。

第15、16表はそれらの関係が、本県通勤青年の場合どのような事情にあるものかをみたものである。「てづると賃金」の関係では男女とも全国でみられたような、縁故→低賃金は顕著にみられないばかりか、男子ではむしろ高賃金所得者が縁故に多くみられる。女子は男子ほど賃金のバリエーションが少なく、大体公開非公開とも6,000円～7,000円に山をもつ似た傾向がみられる。

次に規模別の関係であるが、男子はかたや公開ルートをとった者に、規模の大きい企業への位置づきがみられるが、女子は非公開が10人以上100人以



第 15 表

就職のてづると賃金の関係

賃 金		5,000	~6,000	~7,000	~8,000	~9,000	~10,000	~12,000	~14,000	~16,000	16,000	無答	計
てづる		円未満	円	円	円	円	円	円	円	円	円以上		
男	学 校 実 職 安 故 縁 故 他 を 答 数 無	— 1 8 — 1	3 3 3 1	8 1 6 4	4 — 3 —	6 6 7 3	5 — 1 —	2 6 3 1	— 1 2 3	— — 2 3	— — — 1	— 1 — 2	28 13 38 22 4
	計	10	10	19	10	23	6	12	6	5	1	3	105
子	学 校 百 職 安 分 縁 故 率 を 答 無	— 7.7 21.0 — 25.0	10.7 23.1 7.9 4.5	28.6 7.7 15.8 18.4	14.3 — 7.9 13.6	21.4 46.1 18.4 13.6	17.9 — 2.6 —	7.1 — 15.8 13.6	— 7.7 5.3 13.6	— — 5.3 13.6	— — — 25.0	— 7.7 — 9.1	100 100 100 100 100
	計	9.5	9.5	18.1	9.5	21.9	5.7	11.4	5.7	4.8	1.0	2.9	100
女	学 校 実 職 安 故 縁 故 他 を 答 数 無	2 4 7 4 1	8 4 10 8 2	14 8 13 14 2	4 2 5 6 2	4 1 2 1 —	1 — — 1 —	— — — — 2	— — — — —	— — — — —	— — — — —	— — 3 2 2	33 19 40 36 11
	計	18	32	51	19	8	2	2	—	—	—	7	139
子	学 校 百 職 安 分 縁 故 率 を 答 無	6.1 21.1 17.5 11.1 9.0	24.2 21.1 25.0 22.2 18.2	42.5 42.0 32.5 38.8 18.2	12.1 10.5 12.5 16.7 18.2	12.1 5.3 5.0 2.8 —	3.0 — — 2.8 —	— — — — 18.2	— — — — —	— — — — —	— — — 5.6 18.2	— — 7.5 5.6 —	100 100 100 100 100
	計	12.9	23.0	36.8	13.7	5.8	1.4	1.4	—	—	—	5.0	100

第 16 表

就職のてづると職場規模の関係

規 模		9人以下	10人以上	100人 以上	500人 以上	1,000人 以上	無 答	計
てづる								
男	学 校 実 職 安 故 縁 故 他 を 答 数 無	3 2 11 6 —	9 5 13 12 2	9 4 7 2 2	3 1 3 1 —	3 1 2 — —	1 — 2 1 —	28 13 38 22 4
	計	22	41	24	8	6	4	105
子	学 校 百 職 安 分 縁 故 率 を 答 無	10.7 15.4 28.9 27.3 —	32.1 38.4 34.2 54.6 50.0	32.2 30.8 18.4 9.1 50.0	10.7 7.7 7.9 4.5 —	10.7 7.7 5.3 — —	3.6 — 5.3 4.5 —	100 100 100 100 100
	計	21.0	39.0	22.9	7.6	5.7	3.8	100

女	学職縁の無	校安故他答	実数	74511	7818204	841091	73111	11111	31543	3319403611
	計			18	57	32	13	4	15	139
	学職縁の無	校安故他答	百分率	21.2	21.2	24.3	21.2	3.0	9.1	100
				21.1	42.0	21.1	15.8	—	—	100
				12.5	45.0	25.0	2.5	2.5	12.5	100
子	学職縁の無	校安故他答	百分率	2.8	55.5	25.0	2.8	2.8	11.1	100
				9.1	36.3	9.1	9.1	9.1	27.3	100
	計			12.9	41.0	23.0	9.4	2.9	10.8	100

内に半数が集中しているが、公開ルートでは各規模平均している。このように就職のてつと賃金、職場規模ともに前の共同研究の結果と異なる事情にあるといえる。

## 6. 家計補助—収入増加と生活の安定ねがう小市民意識

家庭の収入状況については、家族1人当り月收入についてすでにふれてきたが、(第1図参照) 1人当り 4,000 円以下という貧しい家庭が、男女とも3分の1を数える状態であった。こうした経済状態を青年たちはどうみているのであろうか。「家の暮らしについてどう考えるか」ときいた結果が第5図の1である。

家の暮らしがらく、あるいははらかなほうと答えているのは、まず人なみ、あ

第5図 家の暮らしや収入など……全国集計との比較



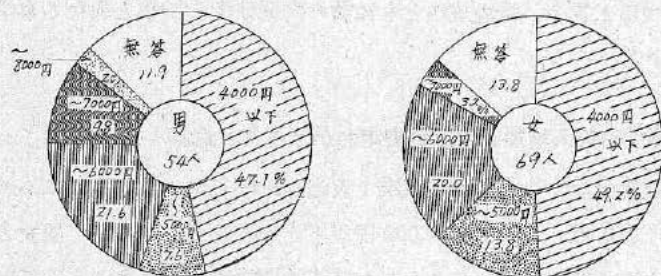
(注) この図は、まん中の5項目について賛意を表した者の割合をまとめて示したものである。



るいはそれ以上の生活を送っている家庭と考えてよからう。しかし、1で示された以外の苦しい、あるいは苦しいほうと答えた男子54人（51%）、女子69人（50%）は、全国集計で同じ答をした男子47%、女子45%の割合よりは高くなっているが、大休本県通勤商工青年の家庭は、全国勤め人の平均レベルをやや下まわるものとみられる。（第1図を参照のこと）

そこでそれらの男女について、さらに家族の収入との関係を検討してみる。第6図によると、男女とも約半数に近い家庭が、4,000円以下の食しい階層に属していることがわかる。暮らしが苦しいとか、苦しほうだということからすれ

第6図 生活が苦しい（苦しいほう）と答えた者の  
家族1人当り月收入別の割合



ば、当然予想される割合かもしれないが、6,000円以下の階層をあわせて、男子76%、女子83%はどこからみても生活がらくとはいえないようである。

このような食しい家庭の多い通勤青年たち—今や大人の世界にふみ入ろうとしている17才青年—は、困難な家計に直面して無関心でいられるはずがない。彼らは彼らなりに何等かの寄与をし家計の一翼をになっているにちがいない。それを「家計に対する補助」できいてみた。第17表は金額別に家計補助の割合を示したものであるが、男女ともに、全国集計よりは高額補助をしている者が多いことに気がつく。男子の場合、4,000円から5,000円まで補助している者の割合が16%、6,000円まで16%、7,000円まで10%、8,000円までが15%、9,000円までが11%で、これらを合計して68%が4,000円から9,000円までのかなりの額の（給与にくらべて）補助をしているわけである。女子の場合も4,000円から5,000円までが19%、6,000円まで14%、7,000円まで13%、8,000円まで6%、8,000円以上3%で、合計55%となって、男子には及ばないが、半数以上の者が4,000

第 17 表

家計補助の全額別割合（全国集計との比較）

応 答		1,000 円以下	～2,000	～3,000	～4,000	～5,000	～6,000	～7,000	～8,000	8,000 円以上	金額不 定・不 明	入れ てい ない	無答	計
本県男子	人数	4	5	6	5	17	17	11	15	12	1	10	2	105
"	%	3.8	4.8	5.7	4.8	16.2	16.2	10.5	14.3	11.3	1.0	9.5	1.9	100.0
" 女子	人数	3	10	17	14	26	19	18	9	4	—	11	8	139
"	%	2.2	7.2	12.2	10.1	18.6	13.7	12.9	6.5	2.9	—	7.9	5.8	100.0
全国勤め人男	%	1.1	5.7	8.0	11.1	9.1	12.5	6.7	4.6	8.2	2.0	27.7	3.2	100.0
" " 女	%	1.1	8.9	15.8	13.9	8.9	8.3	3.1	2.0	1.8	0.5	32.2	3.5	100.0

0円以上の補助をしている。

全国集計をみると、4,000円以上の補助は男子42%、女子24%と、本県の男女よりはるかに低い割合を示している。これは「家計補助をしていない」と答えたものの率が、男女とも30%前後あるので、本県の場合やはり家計補助をせざるを得ないような要因がひそんでいるものと解される。

こうした事情にあれば、青年たちが少しでもよい給与を望むことは当然である。第5図の2は青年たちが、現在従事している仕事からの収入について「よい」あるいは「まあよいほう」と答えた者の割合である。図には示していないが男女とも「わるい」、「あまりよくない」と答えたものはあわせて53%あって半数以上の者が現在の給与に不満をもっていることがわかる。この不満はどう解決されたらよいのであろうか。青年たちには希望を失ってはいはしないか。まず収入をふやすことについての努力をしているかどうかにたち入ってみると、第5図の3のように、努力している者が男女とも62%で、青年たちの積極的、建設的方向を示すとともに、その意気込みがうかがわれる。

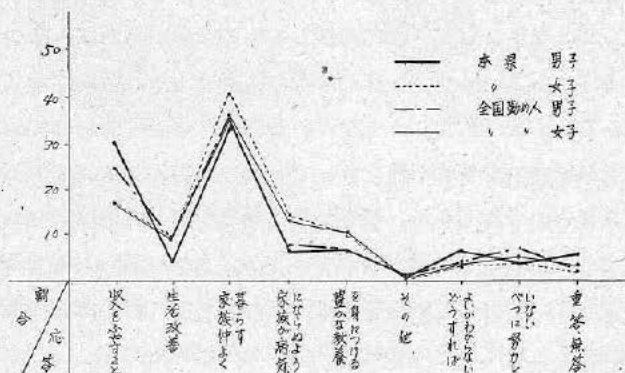
このような努力の方向に対し、今後努力がむくわれると考えているのであろうか。第5図の4をみると、「努力すればかならずできる」と確信しているとみられる者及び「努力すればたぶんできる」と希望を托している者があわせて男子に81%、女子に69%みられ、「努力してもまずできない」や「努力してもできない」と悲観的あるいは絶望的に考えている者の男子14%、女子26%よりは、はるかに高い割合を示している。全国集計をみても大体似たような傾向がみられ、男子は80%以上、女子は70%以上が楽観的希望的である。ここで注意したいのは女子に悲観的見解をもつものが多いということであって、男子の職

業に対する執着と開拓の気持が、女子より強く支配していることを物語っているようである。しかしそのことがただちに家庭の暮らしをよくする努力につながってくるかどうかは不明である。

第5図の5では、「家の暮らしをよくすることについて」大いに努力している、あるいは努力していると答えたものは男子72%，女子80%と女子が高い割合を示している。（全国集計男子60%，女子73%）

では、家の暮らしをよくするための努力は、具体的にはどのような内容なのであろうか。「あなたが家の暮らしをよくするためにいちばん力をいれているものを一つだけえらんで、その番号を○でかこんでください」ときいたところ第7図のような答がでた。これは質問事項が8項目の中から一つだけ選択するので迷った者が多かったことも想像されるが、結果的にはまず本県、全国の傾

第7図 家の暮らしをよくするために力をいれていること  
……全国集計との比較



向が一致していることと、男女の傾向もほとんど一致したことが注目される。その中で一番多く反応した項目が「家族が仲よく暮らせるように努力している」ということであって、男子の34%，女子41%がめだつ。次いで「収入を多くするよう努力している」が男子30%，女子17%で、これら二つの反応で男女とも60%前後をしめていることは、この二つの問題が通勤青年（全国勤め人）の勤労生活を支配する原動力となっているからではあるまいか。家族が仲よく暮らせるようにねがうことは、家庭における情緒的雰囲気安定や心の憩いを求め

家の安泰をねがう小市民的感情につらなっているようであり、農村家庭においてとかく封建的なおいをかもしだす「家庭の平和」感情もはらんでいるようである。貧しければ貧しいなりに、また富んでいればそれなりに家内和合の笑をあげることは、たとえ家庭が下宿的なねぐらの存在であっても、生活の根拠である以上はそうねがわずにはおられないであろう。また収入をふやすよう努めていることは、家族の収入状況からみてよくない家庭の多いことからすれば当然考えられることでもある。「家族が病気にならないように努力している」は（男子7%，女子14%）、家族の誰かが病気になった場合どんな影響があるかを真剣に心配している青年たちにちがいない。収入が急減でもすればそれなりに生活の脅威ともなるであろうし、それがひいては家庭生活破たんの原因ともなりかねない。

「豊かな教養を身につけるために努力している」者が男子7%，女子10%あることは本を読んだり話し合いをしたりして、自己を高める意欲に興味と関心が向いている青年であって、勤労のあいまにも心のゆとりを感じさせる。また、「生活改善」については男子の5%と女子の10%が取り上げているが、これが単なる生活合理化のみでなく、より積極的な文化生活的建設にも向いているものと思われる。

## 7. 仕事の興味や関心の度合いと職業能力の向上

職場における悩みや不満にはいろいろあると思われるが、それは就職直後（半年以内くらい）と、職場にじゅうぶん慣れたころとで異なった現われ方をするといわれている。すなわち職場はにいて慣れてくると、上役や同僚との関係および仕事そのものの問題は減少して、労働条件や作業環境に関する問題は逆に増加してくるとの報告がある（藤本喜八著「職場」21～22ページ）。

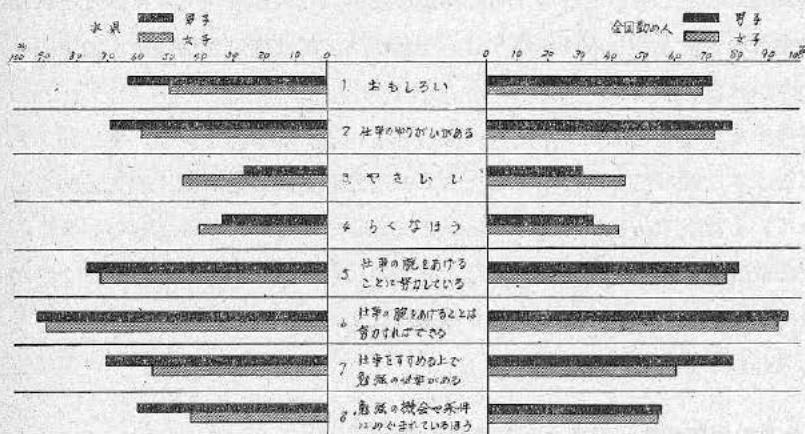
ここで調査した244名の通勤青年は第9表でみられたように3年以上の勤続者が男女とも約60%、1年以上の勤続者を加えると80%をこえている。これらの青年たちは職場に慣れてきていることは事実であって、仕事に対する興味や関心もそれぞれの方向をもっていることと想像されるし、前記の報告からすれば仕事への不適応は減少してきていることになる。以上のようなことを念頭において、これから仕事を主としたいろいろの問題について通勤青年の考え方を



確かめてみたい。

まず仕事に対する興味の度あいであるが、第8図の1によると「たいへんおもしろい」とか「ややおもしろい」といって仕事に興味をひかれているものが男女とも50%以上あるが、反面「まったくおもしろくない」者が男子3%，女子10%（工員にこの不適應者が多い），「あまりおもしろくない」者は男子30%（工員にいちばん多い），女子38%となって，女子の方に仕事の興味をもたない者が多い。

第8図 仕事について……全国集計との比較



（注）この図は第5図同様，まん中の問題に関し賛意を表した者の割合を示している

仕事の興味と直接関連をもつものは感情的な面を含む畜養され，伸展する心理的能力であろうと思われる。能力のあるところ興味を生み，興味あるところまたしばしば能力を推進してゆく。いわゆる「好きこそものの上手なれ」のたてのようなものであるまいか。しかし，好きということとはかならずしも能力があることを約束するものではなく，「下手の横好き」ということもあるように興味と能力は多くの場合相互依存しあうが，また不均衡な場合もあるといえる。

第8図の2は「いまの仕事のやりがい」は」と質問したのに対しての応答結果であるが，「大いにある」とした者男子30%，女子12%，「あるほう」が男子39%，女子47%，あわせて男子69%，女子59%が仕事のやりがいがあることを

感じている。「ないほう」「まったくない」と答えた者は男子26%、女子35%で、前の仕事の興味で「あまりおもしろくない」「まったくおもしろくない」と答えた者の率より低くなっている。

第8図の1と2の傾向は、本県、全国とも大きくいちはないが、本県女子が消極的な方への傾りをみせている。また仕事の興味と仕事のやりがいがあるかないかの相関についてみると、第18表のように、仕事は「まったくおもしろくない」と答えた者が72%まで「仕事のやりがいがあったくない」といって大きな相関をみせている。「あまりおもしろくない」者については、「仕事のやりがいのないほう」が48%、「まったくない」が8%、「あるほう」37%となって大きな相関はみられないが、ともかく仕事の興味とそれにうちこむ態度とは大体つながっているといえる。

第 18 表 仕事の興味とやりがいがあるかないかの関係

仕事の興味	仕事のやりがい					計
	大いに あ る	ある ほう	ない ほう	まった く ない	回答 無答	
あまりおもしろくないと答えた人数 %	3 3.6	31 36.9	40 47.6	7 8.3	3 3.6	84 100.0
まったくおもしろくないと答えた人数 %	—	1 5.6	3 16.7	13 72.1	1 5.6	18 100.0

ではこのような関連した考えをもっている青年たちは、仕事の難易についてどう考えているのであろうか。第8図の3によると、本県、全国とも女子に「大へんやさしい」や「やややさしい」が男子より多く（本県女子は両者あわせて46%）、「ややむずかしい」の率は男子がもっとも高くなっている。ここでみられることは、男子の方が仕事について「ややむずかしい」（本県男子50%）、あるいは「たいへんむずかしい」（本県17%）と答えた者が多いことであって、これは女子に織物工具がかなりいたことにもよるようであるが、全国集計ともほとんど一致している点から考察すると、女子が比較的単純な作業に従事している結果からきているのではないかと想像される。

また仕事の疲労度についても男女に差がみられる。第8図の4のように「らかなほう」に女子が多く、逆に「つかれるほう」に男子が多くなっている。ここでは「つかれるほう」が本県男子49%、女子41%、「たいへんつかれる」に

男子10%、女子13%で、仕事に疲労を感じている者は男子約60%、女子約55%で、男女の半数以上がつかれを意識しているわけである。「たいへんらく」というのは男女とも3~4%に過ぎない。

さて仕事の能力という場合、普通には仕事の腕ともいわれている。その個人的な程度については職場の評価にまつほかないが、ここでは仕事の腕をあげることに對して本人が努力しているかどうかをきいてみた。第8図の5によると「大いに努力している」と積極さを示した者が男子に30%、女子に24%あり、「努力している」と答えた者は男子47%、女子49%ともっとも多く、両者をあわせて男子の77%、女子73%が仕事に対する能力を高め、職場でよりよく生きるために努力していることになる。「まあ努力している」という青年も消極的ではあるが努力を認めているので（男子14%、女子19%）、この事に関しては大部分の者が努力しているとみてよからう。そして、それらの努力に對し将来むくわれるかと思っているかどうかを、さらに問うてみた。第8図の6では男女それぞれの約60%が「努力すればかならずできる」と確信を表明し、また約30%の者が「努力すればたぶんできるだろう」と希望的な意見を示している。これらの応答は男子で93%、女子90%に達し全国集計でみてもその傾向に変わりはない。このように職業能力に對する努力の裏づけをもっていることは、職業となれば衣食住などの目的に對する直接的経済的手段として、かけがいのないものであることの自覚がそうさせているのであろう。

ではそうした職業的能力を高める上で、青年たちは勉強の必要性をどの程度に感じているのであろうか。第8図の7によると勉強の必要が「大いにある」としている者が男子46%（全国50%）、女子27%（全国34%）、「ややある」が男子25%、女子29%これら両方をあわせて男子71%（全国74%）、女子56%（全国60%）が勉強の必要を認めている。反面、「あまりない」と消極的な者が男子21%、女子34%と後者に多く、「まったくない」との否定論者を加えて男子の3割、女子の約5割が勉強の必要性に消極的である。ここでは男子の積極的、向上的なものの率が女子よりはるかに多い。これを職種別にみると第19表のようであるが、男子では工員に勉強の必要性をあまり認めない者が多く、女子も工員にそうした消極的の見解をもつ者が63%もあるところからみて、同じ工員でも勉強の必要性を大いに認めている者と認めない者との差が、どこから

でてくるのかは、それぞれの個人的事情によるものではあろうが興味ある問題である。

第 19 表 職種による勉強の必要性

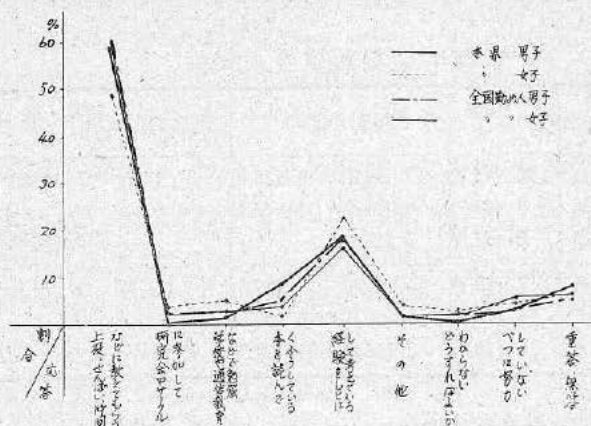
応 答	大いにある	ややある	あまりない	まったく ない	無答・重 答	計
男子 工 員	28 (45.9)	13 (21.3)	14 (23.0)	3 (4.9)	3 (4.9)	61 (100.0)
" 建築運輸	9 (64.3)	4 (28.6)	1 (7.1)	—	—	14 (100.0)
" 事務販売	8 (61.5)	3 (23.1)	—	—	2 (15.4)	13 (100.0)
女子 工 員	7 (10.4)	14 (20.9)	33 (49.3)	10 (14.9)	3 (4.5)	67 (100.0)
" 事務販売	16 (40.0)	16 (40.0)	8 (20.0)	—	—	40 (100.0)
" サービス	6 (50.0)	2 (16.7)	4 (33.3)	—	—	12 (100.0)

それでは現実に勉強の必要を満たしてくれる機会や条件をもっているのだろうか。現に通勤青年のうち男子の41%，女子の12%が高校関係教育の機会をつかんでおり、各種学校や他の教育機関、団体等にもかなりの関係がみられるが、ここでは第8図の8のようにまとめてみた。男子では「めぐまれている」14%、「めぐまれているほう」48%をあわせて62%の青年は勉強する機会や条件をもちあわせていることになる。一方女子は両方あわせて45%であり、これらの主観的評価の結果は女子が男子よりめぐまれていないと判断していることがわかる。女子は勤務時間からすれば9時間以内の者が8割をしめており、この点男子より恵まれているのであるが、男女とも職場内において教育の機会に恵まれていないとすれば、いきおい職場外に学習の機会を求めなければならない。それには経済的、時間的余裕が伴わなければならないが、女子の場合職場の疲労に加えて、通勤に要する時間があり、加えて家庭へ帰っての家事手伝いその他女性特有の雑事も多く、気分的に勉強の機会や条件を認めがたい事情もあると思われる。実際の学習の機会については後でまとめてふれることにする。

次に、学習とも関連して青年たちの課題となってくる職業能力の向上について、その機会をどこに求めているかを、8項目の選択肢から一つだけえらんでもらった。第9図のように、「上役や、せんぱい、仲間などに教えてもらっている」と答えた者が圧倒的に多く、男子59%、女子49%に及んでいる。仕事の



……全国集計との比較



腕を上げるための直接的方法として当然あるべき姿であり、「経験をもとにして考えている」(男子19%, 女子23%)とともに男子の約80%, 女子の70%強をしめている。ただし質問のしかたが「仕事の腕を上げるためにいちばん力をいれているもの」を一つだけえらんだために、一般教養的なものは除外されている。したがって学校や通信教育、研究会、サークル等でも職場に直結するような内容のもの以外は取り上げられなかったものと思われる。それにもかかわらず、女子に9%もの参加者があり、本を読んでくふうしている男子の8%を加えると、青年たちの意欲の一端を知ることができよう。

## 8. 労働観……中小企業勤務の労働者気質

244名の通勤青年の職種については第7表でみてきたが、男女とも工員がその大半をしめ、その他男子では大工、販売関係、女子では事務、販売、サービス関係者が多く、これら通勤者に共通の労働観といったものがあるのではないかと想像される。あるいは職種によって相違があるかもしれないが、その底に流れているものはどのようなものであろう。

まず、「仕事をしていくには、本を読むより、実際の経験できたえあげるのがいちばんだ」との提案をして、これについて同感か反対かの意見を求めたところ、第10図の1のように男女の半数以上が「ほんとうにそう思う」として、

前項で仕事の腕を上げるために「経験をもとにして考えている」と答えた者がかなりいたことと考えあわせてうなづかせるものがある。また「そんな気がする」とやや消極的ではあるが賛意を表した者を加えると、男女とも8割以上

第10図 労働観……全国集計との比較



(注) この図は、まん中の6項目の問題について賛意を表した者の割合を示したものである。

が実際の経験を重視していることになる。近代産業の下積みとなっている中小零細企業勤務者が多いとはいいいながら、何か職人気質めいた雰囲気を感じさせるものがある。全国勤め人の傾向も本県男女の方向と全く一致している。

次に、「きれいな事務の仕事より、汗や油にまみれて働く仕事のほうがねうちがある」との提示に対し、「ほんとうにそう思う」「そんな気がする」と同意を表わした者は男女とも約6割近くに達している(第8図の2)。これらを職種別にみると第20表のようであるが、ここで注目したいのは、男女の事務販売従事者や、女子のサービス従事者に案外同意者が多く、男女工員に反対者が多いということである。これは一体何を意味しているのであろうか。工員の反対については彼らの意識の中にホワイトカラーへのあこがれが潜在しているとみられないだろうか。また逆に事務従事者の多い女子に賛成者が多いのは客観的ないろいろの考察から、自分のおかれている立場をみなおしてそうした判断を下したのか、あるいは観念的なものなのかはたしかでない。

さらに「どんなに実力があっても、学歴や縁故のないものは下積みで一生を終るだけだ」という提示については、「ほんとうにそう思う」「そんな気がする

第 20 表 「事務よりも油まみれの仕事がい」の応答別、  
職種別人数と割合

			ほんとうに そう思う	そんな気 がする	あまり思 わない	ぜんぜん 思わない	重答・無 答	計
実 数	男 子	工 員	12	18	24	6	1	61
		建築運輸	6	4	2	1	1	14
		事務販売	5	5	1	—	2	13
	女 子	工 員	18	22	21	5	1	67
		事務販売	9	10	15	2	4	40
		サービス	3	5	2	2	—	12
百 分 率	男 子	工 員	19.7	29.5	39.4	9.8	1.6	100.0
		建築運輸	42.9	28.6	14.3	7.1	7.1	100.0
		事務販売	38.5	38.4	7.7	—	15.4	100.0
	女 子	工 員	26.9	32.8	31.3	7.5	1.5	100.0
		事務販売	22.5	25.0	37.5	5.0	10.0	100.0
		サービス	25.0	41.6	16.7	16.7	—	100.0

る」と同意を表わした者が男子約40%，女子は57%にも及んで、女子に下積み意識の強いことがわかる（第8図の3）。これは中学校卒業後工員に、あるいは事務にとそれぞれの職につきながらも、高校、あるいは大学卒業者の動向や、縁故によってよい職場へ就職したと思われる仲間をまのあたりにして、一種の劣等感をもっているためではないかと推察される。しかも男子よりも女子にそうした感情が強いことを示している。むしろ男子は、「あまり思わない」「ぜんぜん思わない」が60%近くいて、仕事の胸でこいといった労働者気質めいたものを感じさせる。

では、労働に値する賃金についてどんな考えをもっているのでしょうか。「仕事がつらくても、収入の多い職業につくのがよい」について、「あまり思わない」と消極的な見解を示した者がもっとも多く、男子の47%，女子の63%をしめている。「ぜんぜん思わない」と積極的の反対を表明した者が次に多く、両者をあわせて男子の70%，女子の75%は収入第一で職業を選択すべきでないと考えているようである。本県でも全国集計でも傾向は同じで、賛成者は男女とも2割強にすぎない（第8図の4）。

それでは収入第一でない職業とは具体的にどんな職業を意味しているのでしょうか。「収入が少なくても、自分の個性や趣味を生かせる職業につくのがよい」という、ある方向をもった提示をしたところ、「ほんとうにそう思う」や

「そんな気がする」と賛意を表した者が男子72%、女子84%となって、前の問題で反対を表明した割合よりも多くなっている（第8図の5）。この事実は真をかえせば通勤青年たちの現に従事している職業が、個性に適していなかったり、興味を生かせるような事情にないともいえるし、あるいは個性や興味を生かせる職場であっても、さらにより高いものを望んでいるともうけとられる。女子にこうした考えをもつ者が多いのは、二度とない若い時代を、楽しい職業生活を送ることによって、より有意義たらしめたいと願っているのであるまいか。

次に、「せっかくの休みには、コツコツ勉強するより、レクリエーションで楽しくすごすのがよい」と休日のあり方を質したのに対し、第10図の6のような結果をえた。男女を比較すると男子に同感者が多く、「ほんとうにそう思う」「そんな気がする」をあわせて83%にも及んでおり、女子の71%より休日のレクリエーションを望んでいる。要するに青年たちは8～12時間の労働で身心ともに疲労しているのであるから、休日くらい娯楽中心のあり方を求めるのも当然といえる。しかし、男子の中でも「あまり思わない」や「ぜんぜん思わない」者もあり、女子は4分の1以上がそれに属している。

（注） いままで行なわれた青少年の生活時間の調査によると、欧米のいわゆる先進諸国家に比べると、わが国の余暇時間はきわめて限られており、余暇をどのようなレクリエーションで埋めるかという前に、まずどうして余暇を生み出すかということがしばしば論ぜられている。

## 9. 教育の機会と個人的修養

通勤青年の生活の事実、特に労働を、彼らの全生活領域や意識の中でどのように位置づけているかをいろいろの観点から分析し、全国集計でみられた勤め人と比較してきた。その結果は本県と全国の傾向に大体似かよったものがあることを概観できた。

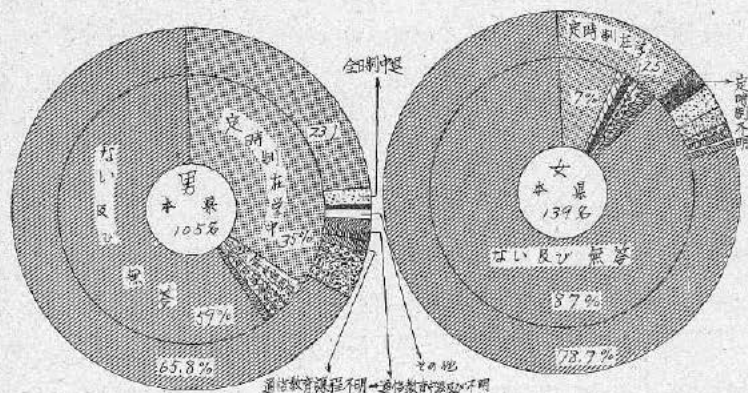
さて、働くこととならんで勤労青年に重要な関係をもつ教育の機会はどうなっているのだろうか。まず過去および現在において関係したことのある、あるいは関係している教育機関や団体、サークル等についてその実態をみることにする。

高校関係では第11図のように、男女とも定時制在学中の者がもっとも高い率



を示し、別科、通信教育などみるべきものがない。特に男子の3分の1以上に及ぶ定時制進学率は、全国勤め人の率（23%）よりはるかに高く、さすがに定

第 11 図 高校に関係したかどうか……全国集計との比較



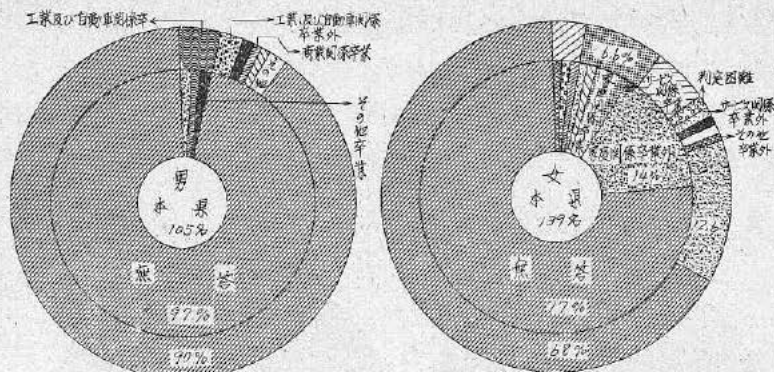
(注) 内円は本県通勤者の割合を表わし、外円は全国集計勤め人の割合を示している。

時制進学率において全国第一位をしめている本県の実態を、如実に反映したものといえよう。ただし女子は7%にすぎず、全国集計の2分の1にすぎないのは、これまた本県定時制女子進学率の低い反映とみられる。なお男子37名の定時制在学者のうち、22名は工員、7名が事務販売従事者であり、女子10名の在学者中8名は事務従事者でしめられている。

各種学校については、男子の97%までが無関係とみられ、女子は家庭関係（和洋裁、家政食物等）卒業4%、卒業以外の者14%が目をはくが、全国集計よりは関係者が少ないことがわかる。ただ各種学校といえば女子の和洋裁関係が第一にあげられるのは、女子の花嫁修養の一つとして社会的要請に応じうる手近な教育機関という性格がそうさせているのであろう。

では他の教育機関についてはどうであろうか。まず男子では技能者養成所の10%、職業訓練所（職業補導所）ならびに青年学級の各7%、社会通信教育（ラジオ講座等）の4%、その他の9%と全国勤め人以上あるいは同程度の関係がみられる。一方女子は、青年学級の24%を筆頭に、各種の技術教習所5%、社会通信教育3%、その他5%で、青年学級関係者が全国集計10%の2倍以上

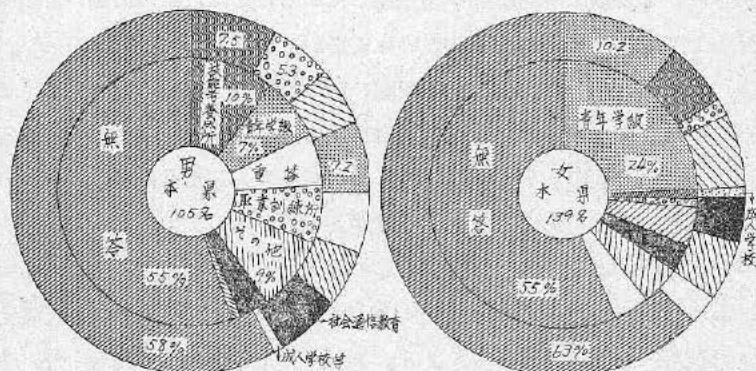
第 12 図 各種学校に関係したかどうか……全国集計との比較



(注) 内円は本県通勤者の割合、外円は全国勤め人の割合である。

に及んでいるのは注目してよい。もともと青年学級は農村を母胎として誕生し、現在も農村を中心として運営されており、本県における青年学級生の職業別割合は、男女とも農業が4分の3以上をしめている現状で（昭和35年度）、名実ともに農村青年のものといえることができる。しかし、商工青年の参加も20%近くに達しており、ここで示された青年学級関係の割合もそうした事情を物語るものといえよう。ただその教育が、内容として商工青年にむいているかどうかは不明である。

第 13 図 他の教育機関に関係したかどうか……全国集計との比較

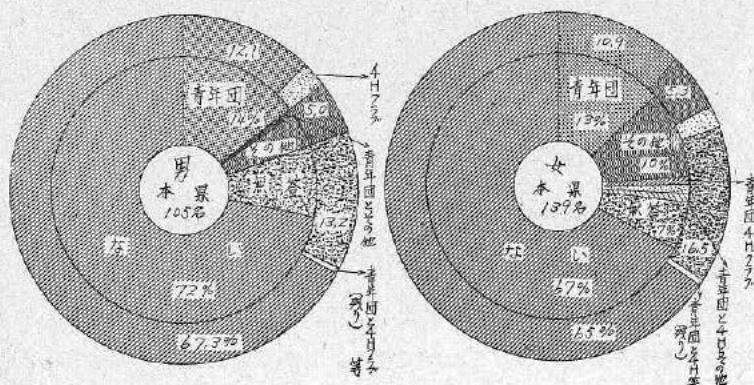


(注) 内円は本県通勤者の割合、外円は全国勤め人の割合である。

次に団体関係を第14図でみてみよう。まず目をひくのは青年団関係である。

男子の14%，女子の13%が青年団と関係をもっているか、もったことのある人達であり、全国集計でもややこれに近い率を示している。もともと青年団は農業生活の中から生まれてきたものであり、農村の地縁団体といわれているが、地縁が同時に職能者の結合を意味していた。したがって村の農村青年が主体となって組織したとき、地域団体として青年団が存在してきた。この傾向は現在

第 14 図 団体に関係したかどうか……全国集計との比較



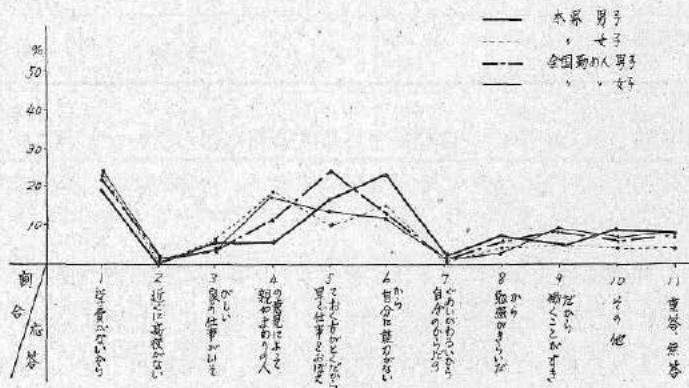
(注) 内円は本県通勤者の割合、外円は全国勤め人の割合である。

でも変わりなく、商工青年にとっては伝統的な青年団の存在の意義が失われつつあり、いろいろな意味で曲りかどに立っているのが、実情といってよい。その中であって、10%以上の商工青年を包括していることは、その活動内容の吟味を論外として、やはり伝統の強味といってよいであろう。

以上、高校、各種学校、他の教育機関、団体等について概観したが、ここで彼らが全日制高校に進学しなかった理由を明らかにしてみたい。第15図は、10項目の中から主なものを一つだけえらんだ結果を表わしたものである。これによると、「早く仕事をおぼえておくほうがとくだから」とか、「自分に能力がない」など意図的に自分自身の問題として取上げている者と、「学費がないから」とか、「親やまわりの人の意見によって」といった、他律的要因で答えたものとの色分けをすることができよう。それによると、男子では5, 6, 7, 8, 9の自律的要因をあげた者が54%と過半をしめているのに対し、女子は1, 3, 4の他律的要因に58%が集中し、男子と対照的なあり方を示している。全

国集計にはこれほどの差はみられないが、やはり男女の傾向に似たものが認められる。この事実は、男女の性格の相異やその家庭内におかれている地位等によってかなり規制されているのであるまいか。特に「親やまわりの人の意見によって」ということは、高校不進学だけでなく、それとひきかえに就職につい

第 15 図 全日制高校不進学理由……全国集計との比較



でもそれらの人達の意見が有力に働いているのではないかと想像される。

さてここで通勤青年たちの勉強に対する個人的見解を明らかにしてみたい。

「勉強についてどう思うか」と問うたのに対し、「自分ひとりコツコツ勉強する」とした者は男女とも3分の1に及んでおり、「仲間をつくっていっしょに勉強する」の男子42%、女子51%を加えると、積極的に勉強したいとの意志表示をした者は8割以上に達している。しかもそのあり方は仲間意識が強く出て

第 21 表 勉強について(全国集計との比較)

応 答		勉強についてどう思うか					重・無答	計
		自分ひとり コツコツ勉強する	勉強する ものとは つきあい にくい	今さら勉強 するならぬ	仲間をつ くつてい つしよに 勉強する			
本県男子	人数	40	5	12	44	4	105	
"	%	38.1	4.8	11.4	41.9	3.8	100.0	
" 女子	人数	44	5	9	71	10	139	
"	%	31.7	3.6	6.5	51.0	7.2	100.1	
全国勤め人男	%	42.2	3.1	14.2	37.2	3.1	99.8	
" 女	%	39.4	2.2	10.3	44.3	3.7	99.9	



応 答		勉強は金もうけになつてこそねうちがある					計
		ほんとに そう思う	そんな気 がする	あまり思 わない	ぜんぜん 思わない	重・無答	
本県男子	人数	7	12	44	37	5	105
"	%	6.7	11.4	41.9	33.2	4.8	100.0
" 女子	人数	12	19	50	52	6	139
"	%	8.6	13.7	36.0	37.4	4.3	100.0
全国勤め人男	%	8.8	16.8	44.2	27.2	3.1	100.1
" 女	%	6.4	14.1	45.2	31.3	3.1	100.1

いる点が注目される。また「自分は今さらする気にならない」と全くあきらめている者は男子に11%，女子に6%と男子に多い。全体的にみて全国集計もやや似たような傾向がある。

次に、「勉強は金もうけになつてこそねうちがあるのだ」との提示に対し、「ほんとにそう思う」「そんな気がする」と賛意を表した者は男女とも2割前後で、「あまり思わない」「ぜんぜん思わない」が8割近くをしめ、勉強を功利的に考えている者は案外少ないことを物語っている。

以上のごとく、比較的向学心に燃え勉強そのものを教養的に考えている通勤青年たちは、公教育や職場、あるいは社会教育等のほかに、個人的にどのような勉強をしているのであろうか。第22表によると個人的に勉強している者は男女とも14%に過ぎない。その内容からみると、男子の工業、女子の家庭、文学、商業関係が目立つ程度で全国的な傾向とも一致している。

第 22 表 個人で勉強していること……全国集計との比較

応 答		宗教・修 養	文学 関係	社会 関係	理数 関係	農業	工業	商業	家庭	芸能 その他	判定困 して いた	無答	計
本県男子	人数	1	1	—	—	—	11	1	—	1	3	70	105
"	%	1.0	1.0	—	—	—	10.5	1.0	—	1.0	2.9	66.4	100.0
" 女子	人数	1	4	1	—	—	1	3	9	1	—	94	139
"	%	0.7	2.9	0.7	—	—	0.7	2.2	6.5	0.7	—	67.6	100.0
全国勤め人男	%	0.8	2.4	0.7	0.7	0.2	5.8	1.3	0.6	1.4	5.3	65.1	100.0
" 女	%	0.7	1.8	0.2	0.2	—	0.2	1.1	7.2	2.4	3.3	65.7	100.0

さらに、「社会や政治の勉強について」どれ程の関心があるかをきいてみると、「大いに努力している」「努力している」者は3割前後で、男子の64%，

女子の58%が「まあ努力している」と消極的であったり、「べつに考えたことがない」と評定している。この限りでは、男女とも社会や政治について深い関

第 23 表 社会や政治の勉強について（全国集計との比較）

応 答		大いに努力している	努力している	まあ努力している	べつに考えたことがない	重・無答	計
本県男子	人数	10	22	44	24	5	105
"	%	9.5	21.0	41.8	22.9	4.8	100.0
" 女子	人数	10	37	42	39	11	139
"	%	7.2	26.6	30.2	28.1	7.9	100.0
全国勤め人男%		9.4	25.1	34.7	28.3	2.4	99.9
" 女%		6.0	23.2	34.5	32.2	4.0	99.9

心をよせ、そのあり方や理想等に関して勉強している者、あるいは身近かな生活や労働の中に社会問題が根をはり政治の力が大きくはたらいっていることに関心をもち、それを勉強しようと努力している者が案外、少ないことを意味している。こうした傾向と関連して新聞の読み方をみると、第24表のごとく男女によって異なる面がある。すなわち「ひととおりすべて」にわたって読む者が男女とも4割近くあるが、男子の3割近くはスポーツ面を愛好し、社会面や

第 24 表 新 聞 の 読 み 方……全国集計との比較

応 答		ひととおりすべて	おもに小説を	政治や経済の記事	家庭らん面	社会面	スポーツ面	娯楽	その他	あまり読んでいない	重・無答	計
本県男子	人数	39	1	8	1	18	29	3	—	4	2	105
"	%	37.1	1.0	7.6	1.0	17.1	27.6	2.9	—	3.8	1.9	100.0
" 女子	人数	55	3	—	18	34	6	7	1	10	5	139
"	%	39.6	2.2	—	12.9	24.5	4.3	5.0	0.7	7.2	3.6	100.0
全国勤め人男%		33.2	2.4	6.1	0.9	21.3	23.0	3.4	0.9	5.0	3.7	99.9
" 女%		35.9	3.4	2.4	12.2	24.2	3.5	5.6	0.9	8.6	3.5	100.2

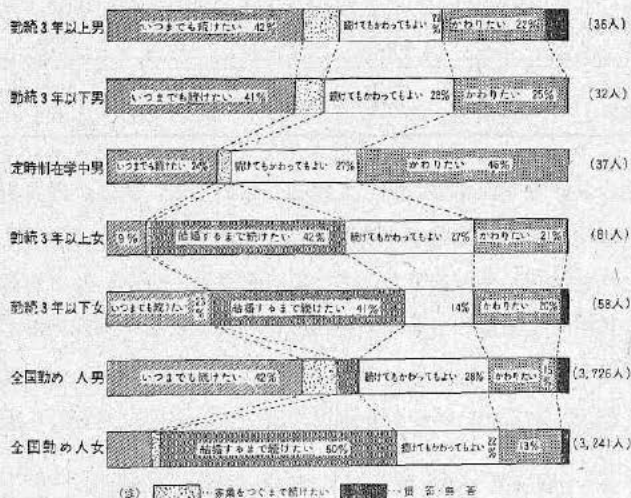
政治経済面に興味と関心をよせている者が次いでいる。これに反し女子は、社会面、家庭らんと続き、スポーツ面、娯楽関係はみるべきものがない。

#### 10. 職業意識……転職希望者は定時制在学者にもっとも多い

前にもふれたように職場への不適応はいろいろあり、それが年とともに変わってくるとすると、19才通勤青年が現に勤めている職場に対して継続勤務したい

か否かを知ること、端的に職場不道徳の何等かの症状をもっているかどうかを知る鍵となる。第16図は勤続年数別、男女別に、さらに定時制在学中の男子を別にして、職場継続意志を問うた結果を表わしている。「かわりたい」とする率で一番多いのは定時制在学者で、彼等はこしかけの就職をする場合もあり約半数近くをしめている。よく中小企業経営者から、「定時制進学者は高校卒

第 16 図 今の勤め先をつづけたいかどうか

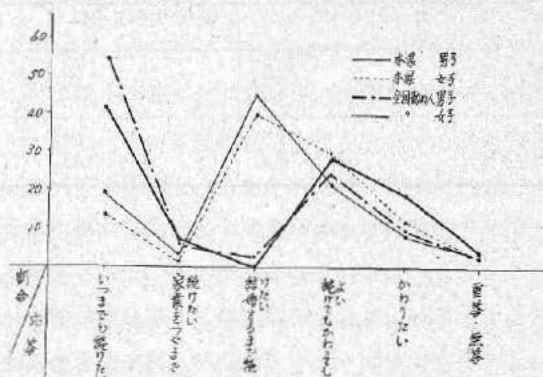


業資格取得と同時に転職したがるので、定時制進学には好意がもてない。ということをしきり、現実にもこのように積極的に転職を希望する者があることは、ある程度経営者の悩みを裏がきしているといえよう。一方定時制在学者からみれば転職したいというそれ相当の理由があると思われる。その根本は、彼等が定時制を卒業しても、職場を変えない限り中学校卒業就職という基礎的条件は変わらず、依然として低い給与と、これまでの作業内容を繰り返すだけに終ることが予想されるし、そこには上級学校卒業という学歴は通用しないのが普通の状態だからである。この図を総括的にみると、定時制在学者を除いて男子と女子の間に、意識の高低差がはっきりしていることである。すなわち、「いつまでも続けたい」とする者が男子に多く、「結婚するまで続けたい」者が男子の「いつまでも続けたい」と同じ割合で女子に多く、この限りでは女子の多数は職業を一生の仕事と考えるよりも、結婚準備の手段として考えているよう

女子の方が職業に対する意識の低さを如実に示しているのであるまいか。これは結婚後の職業生活に多くの困難を伴う日本の現実を端的に反映しているとみられるであろう。

さて、職場と現に従事している仕事とは一体のものであるが、これを続けたいかどうかを確かめてみると、職場の継続意志とやや似ているが、「かわりたい」とする者が男女とも減少し、「続けてもかわってもよい」者が増加してくる。すなわち「かわりたい」者は男子19%、女子12%であり、「続けてもかわってもよい」者は男子28%、女子30%となっている。そこで「職場をかわりたい

第 17 図 今の仕事は続けたいかどうか……全国集計との比較



い者」だけについて、仕事の継続意志との関係をみたのが第25表である。勤続3年以上の男女と3年以下の男女に分けて比較すると、自分の現に従事している「仕事もかわりたい」とする者は3年以下の男子に多い。おそらく3年以上

第 25 表 職場をかわりたい者と仕事の継続意志

応 答	仕事もかわりたい	かわつてもかわらなくてもよい	そ の 他
勤続3年以上男子(%)	45.0	35.0	20.0
〃 3年以下男子(%)	69.2	23.1	7.7
〃 3年以上女子(%)	53.0	23.5	23.5
〃 3年以下女子(%)	66.6	25.0	8.4

の勤続者には、中学校卒業後ずっと続けてきた仕事を今さらかわりたくない、職場はかえても職業はそのまま継続したいとの願望が強いものと思われる。仕



事に対する愛着が強いといってもよいであろう。

次に職場をかわりたい者が、自分の将来についてどんな考え方をしているかを第26表でみることにする。ここでは、「いまの仕事を続けていけば、自分の将来はまったくみこみがない」ときわめて一方的に悲観的なみかたの者が3年以上の男女に2割前後ある。おそらく3年以上も努力を続けた仕事ではあるがいろいろの条件から判断してこのような結論を下したものと思われる。また消極的に「あまりみこみはない」と判断した者は3年以下の者に多い。「あまり

第 26 表 職場をかわりたい者が自己の将来をどう考えているか  
—いまの仕事を続けていった場合—

応 答	まったくみこみがない	あまりみこみはない	そ の 他
勤続3年以上男子(%)	20.0	60.0	20.0
" 3年以下男子(%)	0	77.1	23.0
" 3年以上女子(%)	23.5	64.7	11.7
" 3年以下女子(%)	8.3	83.3	8.4

みこみはない」が「かわりたい」というのは、やはり仕事への未練が3年以上勤続者より弱いことを表わしている。第27表の1はこれらを全体的な立場から全国集計と比較しているが、これを第27表の2と重ねたら何がわかるであろうか。後者は勤め先の将来性を問うたのであるが、将来性を悲観的にみている者は、自己の将来を悲観的に考えている者よりもはるかに少なくなっている。勤め先の将来性はあるほうだが、そこでいまの仕事を続けていっても光明を見出せないと感じている者が多いということである。

第 27 表 自分の将来と勤め先の将来（全国集計との比較）

応 答	1 今の仕事を続けていけばあなたの将来は					
	きつと明るくなる	まあ明るくなるだろう	あまりみこみはない	まったくみこみはない	重・無答	計
本県男子 人数	11	43	44	3	4	105
" 女子 人数	10.5	41.8	41.8	2.9	3.8	100.0
" 男子 %	9	42	70	12	6	139
" 女子 %	6.6	30.2	50.4	8.6	4.3	100.0
全国勤め人男 %	23.3	46.9	25.1	3.3	1.5	100.1
" 女 %	15.5	42.0	33.0	6.1	3.4	100.0

応 答	2 あなたの勤め先の将来性は					
	大いにある	あるほう	ないほう	まったく ない	重・無答	計
本県男子 人数	20	54	22	4	5	105
" " 割合	19.0	51.4	21.0	3.8	4.8	100.0
" 女子 人数	25	60	43	6	5	139
" " 割合	18.0	43.2	30.9	4.3	3.6	100.0
全国勤め人男%	30.0	50.6	16.3	1.9	1.3	100.1
" 女%	26.6	46.9	20.9	3.4	2.3	100.1

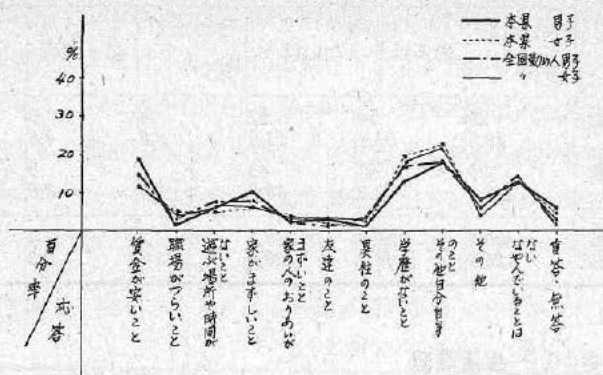
## 11. 悩み—生きがい—生活理想

われわれは前年度に共同研究「勤労青年の生活意識の形成過程に関する研究」の一環として、中小企業に働く満19才の青年について、事例的に青年たちの生き方を明らかにし、その意識構造の中核を究明するべく努めた。その結果は研究紀要第25集「青少年の生き方とその指導」の中に集録したが、19才勤労青年の悩みや生きがい、自己形成への理想や現実の相刻の姿を克明に書き出すことができた。一はじめに一でもふれたようにそれはあくまでも集団事例的なものであり、一般化には及びえなかった。これからみてゆくことがらは、前の研究に足場をおいて数量的概観的处理によって、実証的な深まりを求めていきたいと考える。

第一に悩みの問題を提起してみたい。悩みはそれ自身ただ一つの原因から生ずるものはほとんどなく、たいていの場合、複合的な状況にもとづいている。それは本人自身の問題、職場内外における問題等多様にわたっている。そこで「あなたが、いまいちばん悩んでいることはつぎのどれですか。主なものを一つだけえらんでその番号を○でかこんでください」という提示をし、11の選択肢から一つだけえらんでもらった結果が第18図である。概観して気づくことは本県、全国勤め人の男女をとわず大体同じ傾向にあるということである。そして山は4か所みられる。男子では「賃金が安いこと」が19%で一番率が高く、次いで「その他自分自身のこと」が18%、「学歴がないこと」と「なやんでいないことはない」がそれぞれ13%である。女子は「自分自身のこと」が23%、「学歴がないこと」20%が続ぎ、「悩んでいることはない」が13%、次いで、

第 18 図

いちばん悩んでいること……全国集計との比較



「賃金が安いこと」が12%となっている。

さて男子の場合、「賃金が安い」ことの悩みは、6,000円以下の月手取収入者が20%もあり、「仕事がつらくとも収入の多い職業につくのがよい」に同意したものが23%もあったことから推して、19%の青年がいちばんの悩みとして取りあげたのもそうした事情が伏在しているのであろう。それも工員が高い割合をしめている。また男子の10%が「家がまずい」ことを悩んでいるが、これも工員に多く、賃金問題と関連して経済的に苦境にたたされている悩みの反映が大きいものと想像される。これらの青年たちの欲求はまず経済的な安定をうちたてることであるまいか。

次に「自分自身のこと」での悩みであるが、それがいかなる内容のものであるかはここでは不明である。そして男女とも事務販売従事者に、女子ではサービス業従事者にこの割合が高い。

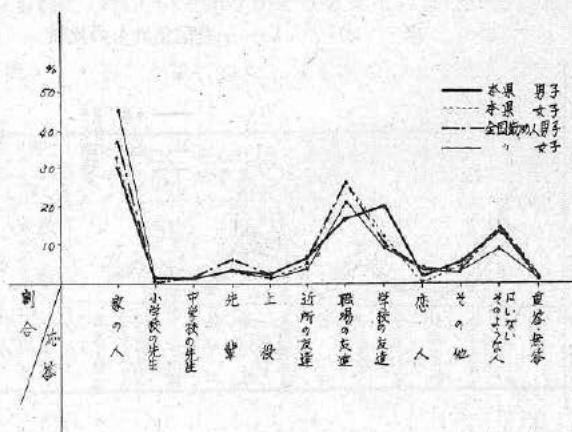
「学歴がないこと」の悩みは、「どんなに実力があっても、学歴や縁故のないものは下積みで一生を終るだけだ」といった悩みと共通するものがあるように思われる。女子にこの率が高いのは、第10図の3の結果と符合している点がある。女子に学歴に対するコンプレックスが高いことに思い及ぶべきであろう。

「悩みはない」者は、男子では運輸通信事務販売に、女子ではサービス業に高くなっている。悩みがないのは心の苦しみ、もたえ、生活等に対し安定感があるとみられるし、反面自身の問題意識をもたないためともみられる。

ではそうした悩みなどをなんでもうちあけられる人はどんな人なのであろうか。11項目の中から一つだけえらんだ結果が第19図である。「家の人」を最高に「友だち」が断然多くなっている。「職場の友だち」「学校の友だち」「近所の友だち」とちがいはあっても、男女とも43%がこれらをえらんでいる。

「家の人」をえらんだ男子の30%、女子33%より多いわけであって、これは19才青年たちが家族、とくに両親との依存的関係や体制から離れて、独立的な生

第 19 図 なんでもうちあけられる人……全国集計との比較



活をもととするようになる心理的離乳の時期を経過してきて、家族のような生活的な関係ではなしに、もっと精神的な関係において交際できる人々を求めているのである。青年期という共通の時期における仲間や同僚に特別の親しみを覚え、男子は学校、職場の友だちに、女子は多くは職場の友だちによりどこを求めている現われとみられる。しかし成人期に近づいているとはいえ、異性への関心や社会認識の発達が比較的あらわれにくいのは、性に対する抑圧や彼等自身の問題意識に関する態度に関係するためと思われる。上役、先輩、あるいは恋人にうちあける者がほとんどないことである。さらに小・中学校の恩師に相談をもちかける者はごく少ない。

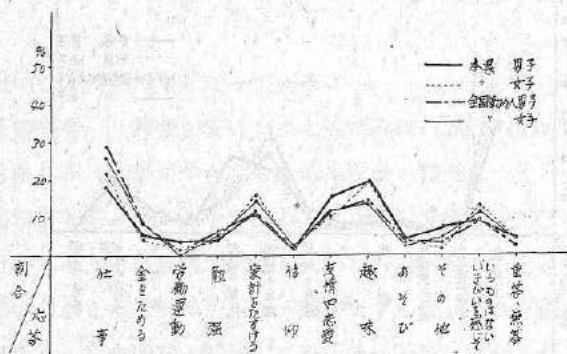
さて前年度のわれわれの研究「中学校卒業後の青年の生き方」の中には、19才青年が理想と現実の相刻にあって苦悶している姿を数々とらえてあるが、彼らの人格形成の核心がしだいに確立されつつあると同時に、それは個々のケー



スによってそれぞれの具体性をもち個性的傾向を帯びることを明らかにした。そこでここでは、「あなたは、いま何にいちばん生きがいを感じているか」と問うて、11項目の中から主なものを一つだけえらんでもらった結果を検討してみたい。

仕事、趣味、友情や恋愛、家計をたすけることが本県、全国勤め人の男女を通じてみられる大多数の青年の生きがいである。「仕事」に生きがいを感じている青年は、仕事に興味と関心をもちはじめ、困難さや疲労を克服して仕事の

第 20 図 い き が い……全国集計との比較



腕を上げることに努力しているにちがいない。これを職種別にみると、男子では建築運輸 (36%) と事務販売 (23%) が高く、女子ではサービス業 (25%) と事務販売 (25%) が高い割合を示している。

これと対照されるのは「趣味」に生きがいを求めている青年たちである。「勤労青年の生活」の中にも (同書 595 ページ参照) 大企業勤務の青年たちで、さい、入社当時から21・2才ころまでに、あこがれと期待→とまどい→疑問、期待はずれ→反撥→抵抗→あきらめ→逃避という過程をたどる者が多いと報告している。趣味に生きることは職場へのあきらめや逃避の変形とまではいかなくとも、職業のつらさ苦しさから逃れようとする気持や償いの気持のよりどころとして、自分を生かす道として、心の糧を求めるためにとりあげているのであろう。

また「友情や恋愛」をあげた青年は、社会意識の発達や、身体的成長による自己の姿をみつめることにより、成人としての自覚にもとづいて、より新たな

友人関係や異性との関係などの人間関係が愛情の発達とあいまって展開されてくるのであって、ここでは友情的色彩が強くなるものと思われる。それは前にも述べた心理的離乳の時期からみて発達段階の特徴として理解される。

「家計を助ける」ことに生きがいを感じている者は女子16%，男子11%であるが、男女とも事務販売従事者が多い。「家計を助ける」ことは、青年たちの比較的乏しい給料の中からのことであり、それをもし望ましいこととしているのは、そうすることによって自分が家計の大切な分担者であると自負し、家の人たちからも認められている誇りがそうさせているのであるまいか。彼らは同

第 28 表 自分が犠牲になっても家のことを考えるべきだ  
〔全国集計との比較〕

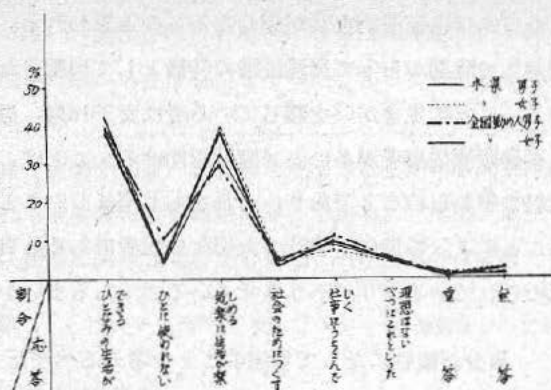
応 答		ほんとに そう思う	そんな気 がする	あまり思 わない	ぜんぜん 思わない	重・無答	計
本県男子	人数	21	34	36	11	3	105
"	%	20.1	32.3	34.3	10.5	2.9	100.0
" 女子	人数	29	34	60	9	7	139
"	%	20.9	24.5	43.1	6.5	5.0	100.0
全国勤め人男%		25.3	36.0	31.3	4.2	3.3	100.1
" 女%		22.8	33.3	36.1	4.4	3.4	100.0

じ基礎の上で成人（ここでは両親その他の家人）との関係を求めているのである。そのことが青年たちの下宿的生活を安定したものにしていても解される。第28表のように「自分がぎせいになっても、家のことをまず考えなければいけない」とする者が男女を通じ40%以上あるのは、青年たちの家計補助などの具体的事実からおしてうなずかれるものがある。

さて現実の問題として「儲け」や「生きがい」をみてきたが、次に将来の問題として「生活理想」を明らかにしてみたい。これは6項目の選択肢を示しその中の一つをえらんだもので、第21図がそれらの割合を表わしている。男女の8割近くが、二つの現実的に割りきった考え方に集中している。すなわち「ひとなみの生活ができる」ことであり、「気楽に生活が楽しめる」ということである。ここへくると「仕事にうちこんでいく」といった理想や、「社会のためにつくす」というような抽象的な理想は影をひそめて、きわめて現実的な、しかも切実なねがいが表明されている。こうした考えが出てくる背景にはそれ相

第 21 図

生 活 理 想……全国集計との比較



当の理由がなければならない。第一は青年たちの育ちである。中卒後直ちに就職しなければならなかった事情、しかもその中には貧しい生活に迫られている家庭が多いであろうが、将来ともそうした生活を続けたくない、何とかきりぬけたい、「せめてひとなみの生活を送りたい」とねがうのであるまいか。第二は現代の職業からくるつらさ苦しさからの逃避であろう。毎日が機械的なくりかえしの連続であったり、人間関係のいとおしさや職場における諸条件の不満等々、じつとがまんしあきらめかかっている者も多いであろう。現実からは、「気楽に生活が楽しめる」ことを欲するにちがいない。しかし人に雇われて、苦しみをなめているよりは「ひとに雇われない」独立した生活設計をしてみたいと第一にねがう者はほとんどいなかった。

## 12. 労 組 意 識

労働組合については、男女とも42%が加入しており、全国勤め人の男子30%女子34%を上まわって加入率のよいことがわかったが(第12表参照)、青年たちの労組に対する考え方の一端をのぞいてみたい。

第29表は、労組に対する五つの考え方を提示してその中から、一つだけをえらんでもらった結果を割合で示している。ここでは山が三つみられる。女子の37%、男子の27%が労組の活動などについて「考えたことがない」としている。もっとも「労働組合がない」者が男子に37%(全国勤め人も37%)女子に24%(全国33%)あり、労働組合があるのかないのかは不明であるが「労組に

は「いってない」者が男子16%（全国22%），女子21%（全国21%）もあるのだから，その活動に無関心な者が多くとも当然ともいえよう。もっとも通勤途

第 29 表 労働組合についてどう思うか（全国集計との比較）

応 答	組合運動は賃上げ だけでなく政治 斗争もつとす べきだ	組合運 動は賃 上げだ けでよ い	現状では 賃上げ斗 争だけで なく政治 斗争もや むをえな い	政治斗争 も賃上げ 斗争もと もにえん りよすべ きだ	そんな ことは 考えた ことが ない	重・無 答	計
本県男子 人数	26	5	32	4	29	9	105
" 女子 人数	24.8	4.8	30.4	3.8	27.6	8.6	100.0
" 女子 人数	26	6	36	6	51	14	139
" 女子 人数	18.7	4.3	25.9	4.3	36.7	10.1	100.0
全国勤め人男%	17.7	6.6	25.8	4.6	40.4	4.9	100.0
" 女%	18.9	4.2	19.7	3.6	44.9	8.8	100.1

上や職場内でそうした問題が話合われるであろうし，新聞やラジオ，テレビなどに注意していれば，何らかの印象は受けているはずである。それにもかかわらず「考えたことがない」というのは，やはり直接的に関係が及ばないためであろう。そしてそれは女子に多い。ところが関心を持ち，あるいは直接労組に関与している青年たちにとっては，「現状では賃上げ斗争だけでなく，政治斗争もやむをえない」という考え方を支持する者が男女とも4分の1以上あって政治斗争の行き方を消極的に是認している。そしてさらに「政治斗争をもっとすべきだ」と積極的見解に賛成した者は男子に多く，その25%が，また女子は19%がみられる。「賃上げだけでよい」と労組運動にわくを認めたり，「政治斗争，賃上げ斗争ともにえんりよすべきだ」との労組運動に否定的な者はあわせて10%以下である。

このように労組活動積極支持者が男女とも半数以上あるのに，「収入をふやすことについてどう思うか」と問うてみると，「労働組合や農民組合の力で」と答えた者は男女の20%に過ぎなくなる。この事実には，青年たちにとって労組活動が信頼のおける，そして労働者の基本的人権をまもる活動として，心の内部にくだりこんでいるのではなく，観念として，希望的存在としてあるといえるのであるまいか。第30表によるとそうしたみかたが成立するようである。3分の



第 30 表 収入ふやす方法について（全国集計との比較）

応 答	労働組合 や農民組 合の力で	もっと長 時間働い たり内職 したりな どして	収入少な いのは自 分だけで ないから 時節がく るまで待 つ	もっと勉 強したり 資格をつ けたりし て	重・無答	計
本県男子 人数	23	5	37	39	1	105
" 女子 人数	21.9	4.8	35.2	37.1	1.0	100.0
" 男子 人数	31	13	46	43	6	139
" 女子 人数	22.3	9.4	33.1	30.9	4.3	100.0
全国勤め人男%	18.8	7.3	30.8	40.1	3.0	100.0
" 女%	21.8	7.8	32.3	34.7	3.5	100.1

1の青年たちは、「収入が少ないのは自分だけでないから時節がくるまで待つ」と諦観的でありさえする。反面「もっと勉強したり資格をつけたりして」自分の職業的能力を高め、自力でもっとよい地位を得て、収入増をはかろうとする努力型が3分の1近くあるのも頼もしい限りである。こうみえてくと労組本来の活動に信をおくよりも、努力でかちとろうとする者が多いし、半ばあきらめている者も同じくらいあって、現在以上の労働強化によって収入増を実現するはかないと思っている者は、男女とも10%以下に過ぎない。

### 13. 調査結果の要約と教育上の問題点

#### (1) 低い生活基盤と職場事情

男子105名、女子139名の通勤青年のうち、農家出身者は男女とも3分の1以上をしめ、家庭的にも恵まれない者が多く、家族1人当月収入が4,000円以下の貧困家庭が男女それぞれ33～38%に及んで、全国勤め人の22～24%より10%以上も低い事情にあることが理解された。

また勤務先を企業規模ごとにみると、いわゆる小、零細企業通勤者が男女とも57～54%をしめ、その中には身分的に安定していると思われる本雇が大体全国勤め人なみにみられたが、それは3年以上勤続者と3年以下勤続者でかなりの開きがあり、3年以下には臨時雇、見習などの不安定の者の多いこともわかった。またそれら通勤者の労働時間については9時間以内の基準に近いペースの青年たちが男子65%、女子78%で全国勤め人なみに近く、9～10時間の男子

21%，女子12%を加えれば、10時間以上の勤務時間で残業あるいは時間外労働を1時間以上している者はごくわずかであり、週休制の実施も男子57%，女子75%と小、零細企業通勤者の多い割合には比較的恵まれているものと解される。

このような職場に勤める青年たちが男女とも半数の者は「生活が苦しい」あるいは「苦しいほうだ」と答え、例外なしに相当の家計補助をしているし、勤務先における給与についても「悪い」「悪いほう」だと判断した者は男女とも53%に達している。そして6割強の男女が「収入増加に努力している」と答えているが、その具体的方策は「時節がくるまで待つ」という諦観者が3分の1に達し、「労働組合の力で収入増加をはかる」とした者は男女とも20%強しかなかった。こうしたところに、中小企業における労働組合活動の限界が示されているように思われる。また男女の約3分の1は「もっと勉強したり、資格をつけたりして収入の増加をはかる」と努力によってかちとる決意を示したものもあるが、青年たちの生き方が成人式あたりを境に分かれていくのではあるまいか。それはすでに職場の事情や労働に対する意欲にぬきさしならぬものを感じとり、なるようにしかならないとあきらめかかる者と、自分の仕事に興味を持ち、積極的に意欲をもやしていこうとしている者のどちらかのように感じられる。

#### (9) 労働に対する通勤者の意識

仕事そのものについて男女の半数以上は興味をもっているが、女子に不適應者が多くみられる。これらは男女とも全国勤め人の割合よりも低く、興味と関連をもつ仕事のやりがいについても低い結果がみられた。

仕事の進め方については男女の8割以上が経験の大切なことを第一にあげているが、反面、勉強の必要が大いにあると認めた者が男子に46%，女子に27%あって、自覚された学習意欲の要求をもっているものとみられる。しかし工具の中の男子は半数、女子は80%以上は勉強の必要を認めていない。単純な機械的くり返し作業に従事している工具たちの味気ない毎日の生活が、勉強をしても今さらどうなるものでもないといった反発を示しているようにうけとれる。

また肉体労働の意義を強調した提示に対しては、「汗や油にまみれて働く仕事のほうがねうちがある」とした者は男女とも6割近くに達し、労働に誇りを

もととして意識の反映とみられるが、反面工員に反対が多かったのはホワイトカラーへのあとがれと判断される。こうした労働への誇りをもとうとする傾向は、学歴や縁故に対する考え方にも通じ、「学歴や縁故のないものは下積みで一生を終るだけだ」という問に対し、「そうは思わない」という者が男子に6割近く、女子に4割みられ、とくに男子にそうした下積み意識の低いことが理解される。むしろ下積み感情をはね返して、「俺たちには俺たちの世界がある。仕事は腕なんだ」といった職人気質めいたものを感じさせる。そして「仕事がつらくとも収入第一の職業」を選ぶべきかどうかについては、男女の7割以上が「そうは思わない」とし、個性や興味を生かせる職業に賛意を表している。ここにも現代の職業がもつつらさ、苦しさから逃れ償う道として、自分を生かすための職業がいかにあるべきかに回答しているものと思われる。また休日のあり方については、勉強の機会として過ごすよりは「レクリエーションで楽しく過ごしたい」と大部分の者が考えており、強制的他律的な労働からの疲労と刺激の強い職場から離れて自分の適度の休養——それも楽しいレクリエーションでとの希望を表明したのであろう。

以上のような労働意識はこれを全国勤め人の反応と比較しても大差なく、むしろ大部分の項目に同じような傾向が認められる。

### (3) 職 業 意 識

現在の職業に入った理由についてはすでに明らかにしたが、「自分にむいている」とか「将来性がある」という積極的な動機を示した者は男子46%、女子32%となっており、就職に際し一応安定した意識をもっていたのでないと思われる。これらの青年たちを除けば他はほとんど他律的要因が主となって就職したとみられる。中でも女子に「道職なし」というのが25%に達している。女子の場合、結婚までの間何か適当な職があったら働きたいという程度の意識が強いと思われる。したがって道職というのも仕事が楽で給料がよいとか、あるいは一見体裁よく思われる仕事といった程度のもので、真に自分の個性や能力に適した一生これに打込みうる仕事という意味はもたないであろう。これは男子との差のある点であって、就職に対する真剣な自覚が少ない結果とみてよいのであるまいか。また「親やまわりの人の意見」によるとか、「たまたま人にすすめられた」といった理由をあげた者が30%もあるのも、女子の消極的態度

を物語っている。要するに中小企業に就職した青年たちの中には、ただ何となくずるずると入った者が多いということであって、教師や親たちの善意のほかに、中学校における職業指導などに欠けるものがあるのではないかと想像される。しかし、そうした入職をしたとしても、大部分が何年かの職場経験をへた現在、19才青年たちが思索と煩悶の洗練をうけてどのような職業意識をもつに至ったかは興味ある問題である。

まず将来の見通しを考慮に入れて、現在の職場の継続意志をきいてみると、男子の42%、女子の55%が継続意志ありと答えている。女子の55%のうち40%は「結婚するまで」という条件つきであるから、女子青年の便宜主義的な考え方がでており、一方「かわりたい」とする者は男子31%、女子21%であり、「続けてもかわってもよい」者が25~22%あることから察すれば、これらの青年たちは現在の職場に安定した気持をもつまでにいたっていないといえるであろう。

ところでこれが、現在の仕事を継続するかどうかになると、「かわりたい」とする者は男子19%、女子12%に減じ、仕事についての未練と執着が増してくるのである。しかしそれは一生を打込みうる仕事としての意味をもっているのかというと、かなりの青年たちは疑問視し確信をもってはいないが、これまで続けてきた仕事であり、これからそれをかえても同じような、むしろ悪い結果がくるのではないかと不安が現在の仕事にふみとどまらせているといつてよいのではあるまいか。それは「現在の仕事を続けていけばあなたの将来は」という問に対し、男子の42%、女子の51%が「あまり見込みはない」と答えていることから推察できる。

#### (4) 夢と現実

運動青年の職場における仕事への興味や関心、それに対する努力など半数以上の者に前向きの姿勢が感じられたが、そうした職場やねぐらである家庭においてさえ、「人間疎外」の要因が数多くひそんでおり、青年たちの苦悩もそれなりに複雑である。男子では賃金が安いことと自分自身の問題についての悩みがそれぞれ20%近くでもっとも多く、さらに学歴がないこと、家が貧しいことなどがあげられていた。女子は自分自身の悩みを最高に、学歴がないことが続いており、ともに20%をこしている。「自分自身」の悩みとは、今まで外に向



けられていた眼が内に向けられることによって、新しく自己を発見しようとする苦悩の姿にはかならないであろうし、諸事にわたって自分を評価し客観化しようとしている現われと解される。それが自己の能力や職場における地位、さては将来性等に及ぶとき、「学歴がない」劣等感として意識され、ひいては「賃金が安い」という現実の欲求不満ともなり、「家が貧しい」ことへの悩みともなって現われるのである。悩みは、個人的要求と社会的な制約との間のへだたりや、現実生活における要求の拒否的な面からの苦痛を自覚することにはかならない。自分で考えるこうありたい姿、あるいはこうしたいという行為と今現にある実態の姿、行為との間の「距離」に気付くことにかならない。その「距離」を何とかして埋めて、そして悩むことは、こうありたい姿、より価値ある行為にすこしでも近づこうとする努力である。ところがそうした悩みがないと答えた青年も男女13%づつみかけられ、それらの青年は何か無気力であり、主体制を失っているのではないかと想像される。その反面反省的な態度も少なく、事あるごとに望ましくないプラグマティズム的な生活をしていると考えられる。悩みがないということは、社会への働きかけを忘れ、社会に消極的に順応し現状でこと足りるとしているあいまいな自己の姿ではあるまいか。理想と現実の葛藤がなくこれでよいのだと自覚しているとしたら、あまりにも老人化した青年の姿というべきであろう。

ところでこうした悩みをうち明けられる者は、第一に「友人」なのである。男女の43%が「学校の友だち」「職場の友だち」「近所の友だち」をあげたのは、彼らの生活領域が空間的にも時間的にも拡大、延長され、そして家族のような生活的な関係ではなしに、もっと精神的な関係において交際できる友人を求めている現われとみられる。彼等の最大の理解者が友人に移りつつあることは理解されるが、一面「家の人」も彼らから離れることのできない存在であって、男女の30%余りがそれをあげていることが雄弁に物語っている。しかし、悩みをうちあける人の中に小・中学校教師がほとんどなく、また先輩や上役といった関係者もあげられていないのは、19才という年齢からくる対人関係の背景を察知させるとともに、社会認識の発達はまだ低度であることを理解させる手がかりともなるであろう。

さて人間の生活は、社会と個人との相互作用によって形作られるものであり

人間は一定の社会的・歴史的現実内で個性的・創作的に何らかの社会的役割を演ずることによって生きがいを経験していくのであるが、通勤青年たちの生きがいは大きく自己の利益的生活、自分のためになる生活に傾いていると解される。「仕事」に生きがいを求めている者は男子18%、女子22%であるが、職業における社会的使命観に徹しているために生きがいを感じているという意識は薄く、むしろ自己の生計を保障する道として、興味や関心の高い仕事にやりがいを感じているといってもよいであろう。さらに「趣味」に生きがいを感じている者は男女とも19%であり、「友情や恋愛」が男子15%、女子10%と、これらはいずれも青年中心といわざるを得ない。わずかに男子の11%、女子の16%が「家計をたすける」こととしている。しかし「家計をたすける」という生きがいを支えるものは、「自分が犠牲になっても家のことを考えるべきだ」との発想ではあるまいか。それは、そうした考え方を支持した者が、現に男子に52%、女子に45%あったことでも察しられる。

以上のごとき現実をふまえて生きるということは、それ自体絶えざる価値の追求でもある。それならば彼らの生活に対する「夢」は那边にあるのであろうか。ここで「ひとなみの生活ができる」ことであり、「気楽に生活が楽しめる」という二つに集中した意味を考察せざるを得ない。それは青年たちの職場生活、より広い社会生活、そして家庭生活の現実体験から割り出された観念的な理想ではなく、きわめてリアルな「夢」といってよいであろう。しかし、その現実主義的な内容のよってくるところは、失意や不満の状態から発し、空虚感の上に形作られたものもあろうし、現実社会の検討の上になって生活を探求し、希望と光を認めてそうありたいと念じた者もあると思われる。しかしその根源がより多く職業上の問題、家庭生活の事情からくることはすでに述べたところである。ここにも青年たちの対象的な逆の意味づけをもつ傾向が強くみられ、自己における二重構造的心情がにじみ出ているし、その核心は「暮らしだけは人なみであり困らないこと」といってよい。青年たちの個性的、人間的な価値基準や意識がこうした点に集中したことは注目すべきであるまいか。

#### (5) 教育の機会とその問題

通勤青年がきびしい環境条件を克服して、定時制や種々の教育機関、団体またはサークル等に教育の機会をもち努力していることは、すでに明らかにした

ところである。中・小企業通勤者が職場内あるいは企業連合による教育、または職業訓練を組織的に受けることができるならば、ある程度基準的な教育訓練が可能となる（労働省令で、教科、訓練期間、設備その他に関する基準が定められている）。そうでなければ余暇と金が問題であり、それらの条件を克服し得ても、通いとおせる強固な意志が要求されるのである。

だが通勤青年たちは勉強の必要を認めている。しかも「仲間をつくっていっしょに勉強したい」という者は、男子42%、女子51%に及び、「自分ひとりコツコツ勉強したい」者を加えると男子の90%、女子の83%は勉強したいと意願しているのである。ここに未組織な中・小企業勤務勤労青年を、教育的に編成しうる可能性があると判断されるゆえんである。現に定時制在学者が男子には35%、女子に7%みられたし、各種学校や他の教育機関、さては団体、サークル等にも相当の参加経験者をみているのである。しかしいずれにしても「勤労」と「学習」の両立は彼らにとって最大の問題であって、彼等の意志だけでは解決し得ない面が多分に存在していることは疑う余地がない。この調査でも男子105名中の32名（31%）、女子139名中の41名（30%）は、中学校卒業後どのような教育機関や、団体、サークルにも関係した経験のない青年たちであって、勤労と学習を両立し得ない見本といってよい。文部省が義務教育後の教育を受けていない青少年（15～17才）について、昭和34年度全国総数で示したものによると、37%、216万人の者が中学校を終えただけで社会にでて、なんら組織的な教育を受けず放置されている、としている。（文部省発行 進みゆく社会の青少年教育 87ページ参照）こうした実情から、少なくとも後期中等教育年令段階青少年の教育をどう策定するかは、国家的見地からも重要な課題となっているわけである。それが勤労青年の場合には、彼らを職能社会にある具体的青年としておさえる必要があろう。たとえば通勤青年という一群の青年たちをとらえたとしても、彼らの職場や職種は多種多様であり、彼らの望む教養なり技能なりも、それぞれの職場や職種、そして仕事の内容によって異なるものがあると思像される。したがって彼らに対する教育は、個人の特性、能力、および進路に応じ、青少年の生活と勤労の環境に即して行なわれるべきであり、この意味では職能集団への働きかけが鍵をにぎるものと思われる。一方、そうした個人的な教育のルールと同時に、青少年の現在の立場や将来の進路にかかわりな

く進みゆく国家、社会の成員として必要な広い視野に立った見識と教養を授けるものでなければならない。

ところが現実はどうであろうか。全日制高校に進学できぬものが定時制へ、定時制へいけぬものが青年学級へとといった考え方が横行し、世間もそうした教育のレベルを容認し何等の疑義を持ちあわせていないようである。勤労青少年の生活実態を考えると、これでよいのかと反問せざるを得ない。文部省もこのことに関し次のように述べている。すなわち『後期中等教育を完全に普及するためには種々の困難があることはいうまでもない。これらの青少年に教育の機会を与えるには、これら青少年が個人的な事情、または社会環境などの事情で、すべてが高等学校へ進学することは期待しえないことなので、やはり、高等学校以外の各教育、訓練機関に、その道を期待するほかはないのでなかろうか。……しかしながら15～17才という青少年期の教育という点では、これらの機関にはなお欠けるところがある。したがって、「すべての者に後期中等教育を」という理念から、高等学校に進学しないこれら数多くの青少年の教育を託し、社会の発展に即応する人材の育成を、これらの教育機関に期待するためには、伸びゆく社会の青少年の教育という基本的な考えのもとに、総合的観点から新しい教育制度の確立がはかられなければならない』と述べている。（進みゆく社会の青少年教育 134ページ）。しかし、新しい教育制度の確立をいかにすべきかについては何もふれていない。

### 第3節 住込み青年（徒弟小僧型青年）

#### 1. どんな住込み青年がいるか

これからみていく住込み青年は男子30名、女子31名、計61名で全調査人員に対して男子は18.5%、女子は16.0%をしめ、全国集計の勤め人の中の住込み青年男子23.8%、女子17.5%の割合よりはやや低くなっている。（第3表参照）

これらの青年たちは主として小・零細企業に住込んでいる。住込むという形態は昔から徒弟の勤務形態として伝統的にとられてきた雇用形式であり、そこには近代感覚からずれた何か暗いかげを連想させるものがある。戦後の民主的



教育で育った青年たちが、現に住込んでいるという事実の中から、果してどのような実態がみられるであろうか。もし暗いかげがあるとすれば、青年たちの意識の中にしらずしらずの間に浸透しているであろうし、労働や学習にも及んでいることと思われる。ここでは同じ勤め人仲間である通勤青年と比較したりして、彼らの意識構造をうきぼりにしていくことにする。

- (1) 男子はいわゆる職人が約3分の2、女子はサービス従事者と工員が4分の3近くいる。

第31表は住込み青年の職業を具体的にまとめたものであるが、男子では職人

第 31 表 職 業 別 人 数 と そ の 割 合

男 子				女 子			
職 業		人 数	%	職 業		人 数	%
職人的	大工 建築 左 具 製 工 官 造 造 工 工 立	8 1 3 2 1 1 1 1	18 60.0	サ-ビス的	理 容 美 容 君 女 議 婦 食 堂 給 中 芸 芸 仕 妓	4 4 2 1 1 1	12 38.6
	洋服 車 切 修 工 立	1 1 1 1		工 員	織 物 職 工 農 器 具 製 造	9 1	
工 員	洋 食 器 ガ ラ ス 製 工 造 所 農 機 具 製 造 所	2 1 1 1 1	5 16.7	店 員	食 料 品 販 売	6	19.4
				事務員	金 物 屋 飲 食 店	1 1	2 6.5
店 員	書 籍 販 売 集 金 靴 油 販 売 集 金 石 服 販 売 集 金	1 1 1 1 1	4 13.3	職人的	洋 服 仕 立	1	3.2
				計		31	100.0
その他	運 転 手 ク リ ー ニ ン グ 店 役 食 料 品 店 雑 役	1 1 1 1	3 10.0				
計		30	100.0				

的な仕事に従事している者が60%をしめ、工員、店員がこれに次いでいる。女子はサービス関係者が39%でもっとも多く、工員の32%がこれに次ぎ、店員、事務員などがみられる。これ等青年たちの住込み先を企業規模別にみると、男女とも小・零細企業が圧倒的に多く、特に男子の職人的企業は、個人経営が大部分であり、女子にもそうした家庭住込み者が半数以上あることがわかる。

第 32 表

住込み先の企業規模別人数とその割合

規模 二次産業 (三次…)	9人以下 (家族従業員のみ)	10~99 (1~9)	100~499 (10~49)	500~1,000 (50~100)	無 答	計
男 子 人 数	21	5	—	—	4	30
" %	70.0	16.7	—	—	13.3	100.0
女 子 人 数	17	9	3	1	1	31
" %	54.9	29.0	9.7	3.2	3.2	100.0

## (2) 農家出身者の割合が多い。

住込み青年の出身家庭を父の職業からみると第33表のとおりである。農家出身者が男子43%、女子58%、男女あわせて50%が農家の子弟であって、通勤青年でみられた男子38%、女子37%よりは多くなっている。このうち父がなかったり、両親もない欠損青年が男子に37%、女子に16%ある。

次にこれらの家庭の収入にふれてみたい、第22図は家族1人当りの月収入を算出し、これを男女別段階別に示したもので、通勤青年の第1図と対照してみ

第 33 表

父の職業別人数とその割合

父の職業	農・林・漁業 ・漁業 ・自営	商店・工場など ・自営	人夫 や工 夫	大工 左官 などの職 人	大工 左官 などの職 人	運輸手 汽かん 手などの 技術的 職業	事務員	その 他の無職 職業	重・ 無職 無答	計
男 子 人 数	13	2	1	4	4	2	1	1	1	30
" %	43.5	6.7	3.3	13.3	13.3	6.7	3.3	3.3	3.3	100.0
女 子 人 数	18	2	1	1	1	1	1	2	2	31
" %	58.0	6.5	3.2	3.2	3.2	3.2	3.2	6.5	6.5	99.7

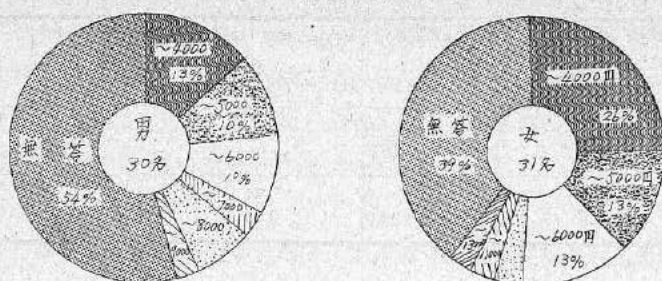
(註) 1 (販売人、集金人、外交員など)と(教員や吏員)に該当する者がいないので除外してある。

2 通勤青年の出身家庭は第4表参照のこと。

ると、まず住込み青年に無答者が目だって多いことがわかる。おそらく彼らは他家に住み込んでいるため家計の機微にふれることが少なく、無関心の者が多いためこのような結果が表われたものと思われる。応答者だけから判断すると通勤青年以上に、4,000円以下の家庭が多く、貧困家庭も多いのでないかと想像される。

第 22 図

総 収 入 / 家 族 総 数



## 2. 長時間労働で休日も少なく報酬も低い

住込み青年，特に徒弟として住み込んでいる青年に連想されるのは，昼夜の別なく働かされた昔のあり方である。そのような苦しい修行を経てはじめて一人前になるとされた。ではここでみる青年たちはどうであろうか。第34表によると，10時間以上働いている者は男子70%，女子42%で断然多く，通勤青年で男女とも10%に満たなかったのとは比較にならない。男子では12時間以上が7名あるし，女子にも6名を数えて，額面通りに受けとれば睡眠時間以外余暇が

第 34 表 1 日平均勤労時間別人数とその割合

勤労時間	8~9	9~10	10~11	11~12	12~13	13~14	14~15	15~16	16~17	無答	計
男子人数	3	6	10	4	2	2	1	—	2	—	30
" 割合 %	10.0	20.0	33.3	13.3	6.7	6.7	3.3	—	6.7	—	100.0
女子人数	8	9	6	1	1	5	—	—	—	1	31
" 割合 %	25.8	29.1	19.4	3.2	3.2	16.1	—	—	—	3.2	100.0

持てないのでないかと思われる。そこで長時間労働の職種をみると，男子では大工，左官，建具，量製造工などは10時間程度にとどまっており，店員，運転手などが長い。女子は理容美容従事者，店員が長く，工具は10時間以内にとどまっている。このように筋肉労働で体力を消耗するところでは比較的基準的な労働時間に近く（この調査では後始末や残業もふくんでいる），接客を商売とすることが長い。

では休日や有給休暇はどんな状態にあるのであろうか。通勤青年の場合，男子57%，女子75%が週休をもち（第12表参照），全国集計の勤め人の週休制は

男子51%，女子68%に及んでいたが、ここでの住込み青年の男子16.7%，女子48.4%ははるかに少ない。また有給休暇についてはある者が男子の37%，女子

第 35 表 休日と有給休暇

休日・ 休暇	休 日					有 給 休 暇			
	週休	2月 3日	不定	無答	計	ある	ない	無答	計
男 子 人 数	5	15	9	—	30	11	17	2	30
" %	16.7	53.3	30.0	—	100.0	36.7	56.6	6.7	100.0
女 子 人 数	15	11	5	—	31	15	16	—	31
" %	48.4	35.5	16.1	—	100.0	48.4	51.6	—	100.0

の48%で、これも全国の勤め人男子46%，女子53%より低くなっている。総体的にみて住込み青年は休日に恵まれていないことになる。

長時間働いて休日も少ない事情にある青年たちの報酬はどうなっているかをみると、第36表のとおりである。この金額は食費などを差引いた手取収入であるから、実質的には額面よりは相当高いと考えてよい。まず 5,000 円以下が男子で57%，女子に52%ある。月 5,000 円ならば年間6万円であって、これは農家の年雇以下といえる。したがって男女の半数以上はその程度以下のわけである。もっとも手職を身につけることが目的であってみれば、報酬といっても当座の小遣とも考えることができる。しかし前にみたように、貧しい家庭の出身

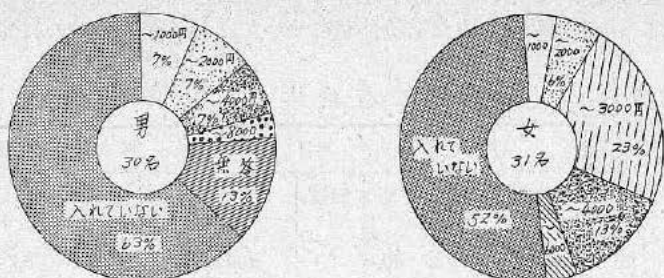
第 36 表 月平均手取収入別人数とその割合

月 取	～4,000円	～5,000	～6,000	～7,000	～8,000	～9,000	～10,000	～12,000	無答	計
男 子 人 数	13	4	1	3	4	—	1	2	2	30
" %	43.4	13.3	3.3	10.0	13.3	—	3.3	6.7	6.7	100.0
女 子 人 数	8	8	3	4	1	2	—	—	5	31
" %	25.8	25.8	9.7	12.9	3.2	6.5	—	—	16.1	100.0

者が多いとすれば、早く一人前になることと同時に、家計を助けうる収入が欲しいであろう。試みに家計補助をどの程度しているかを第23図でみてみると、「入っていない」者が男子に63%，女子に52%いる。通勤青年の場合その割合は男女とも10%以下で、4,000 円以上の補助者は男子68%，女子55%で、ちょうどどこで「入っていない」と答えた者の率に相当している。（第17表参照）



第 23 図 家 計 補 助



4・5千円は食費に相当するかもしれないが、ともかく全体的には通勤青年より低いとみられる。これら住込み青年のうち、男子の53%、女子45%は中卒以来3年半の継続住込み者であり、2年以上を加えると男子の87%、女子の75%が該当するし、身分的には第37表のようにになっている。徒弟や見習工は男子に多く、女子は本雇が半数いる。女子に6,000円以上の月収をえている者が3分

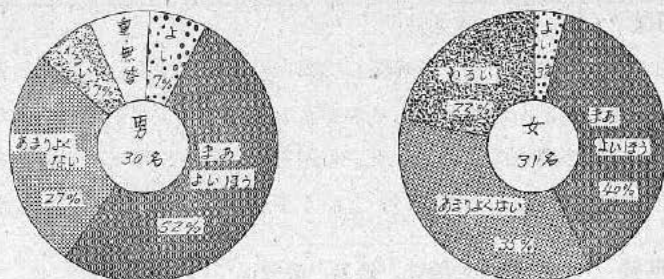
第 37 表 身 分 別 人 数 と そ の 割 合

	本 雇	常 雇	臨時雇	見習工	徒 弟 (見習)	その他	無 答	計
男 子 人 数	10	—	—	6	14	—	—	30
" %	33.3	—	—	20.0	46.7	—	—	100.0
女 子 人 数	16	4	—	1	3	2	5	31
" %	51.6	12.9	—	3.2	9.7	6.5	16.1	100.0

の1あるのはこのような関係からである。

それでは青年たちは現在の報酬についてどう評価しているであろうか。第24図をみると、「よい」「まあよいほう」と楽観的に考えている者が男子に多く約60%、女子は43%である。女子の57%は月収に不満を持っていることになる。通勤青年は男女とも53%が不満をもらしていたが、住込み男子青年はこの点不満に思っている者が少ないといえる。

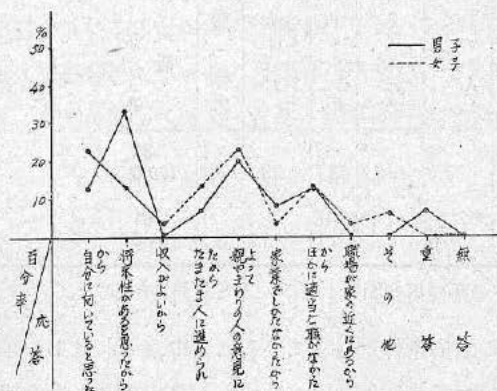
第 24 図 今の仕事での収入は



### 3. 仕事の興味や関心は高く、腕をあげることに努力している

青年たちの労働意欲を左右するものは、職場の物理的環境や物質的諸条件、あるいは住込み先における人間的なつながりなどの、総合的な関係が原因すると思われる。未知の職業社会にしかも住込みという形で入るということは、家から通勤する青年たちとはおのずから異なるものと想像される。そこでまず最初に現在の住込み先を選んだ理由から明らかにしてみたい。男子でもっ

第 25 図 選 職 の 理 由



とも多いのは「将来性があると思ったから」が33%、「親やまわりの人の意見によった」者が20%、次が「自分に向いていると思った」と「ほかに適当な職がなかった」がそれぞれ13%ある。将来性を認め意図的に考えた者は職人に6人ある。他律的な職業選択は約半数みられる。一方女子は「自分に向いている」「将来性がある」「収入がよい」と自律的、意図的に職場を考えた者は約

40%ある。通勤青年でもそうであったが、男子に職業選択の積極性がみられることは同様である。(第13表参照)

自律的にせよ他律的にせよ、選職して現在の職場に住み込んでいる青年たちが、仕事に関してどんな状態にあるかをみてみると、まず第38表で三つの応答がわかる。仕事の興味については男子の90%，女子の77%までが興味をもっており、「まったくおもしろくない」という不適應者は見られない。これは通勤

第 38 表 仕事の興味、難易、疲労について

応 答	興 味						難 易					
	た も い し へ ん い お	や ろ や い お も し	あ し ろ く お な い	ま も い た ろ く お な	重 ・ 無 答	計	た さ い し へ ん や	や い や い や さ し	や い や い む ず か	た ず い か し へ ん い む	重 ・ 無 答	計
男 子 人 数	6	21	3	—	—	30	1	4	17	8	—	30
" %	20.0	70.0	10.0	—	—	100.0	3.3	13.3	56.7	26.7	—	100.0
女 子 人 数	7	17	5	—	2	31	5	9	9	6	2	31
" %	22.6	54.9	16.1	—	6.4	100.0	16.1	29.1	29.0	19.4	6.4	100.0
応 答	疲 勞											
	た い へ ん ら	ら く な ほ う	つ か れ る ほ	た い れ る へ ん つ	重 ・ 無 答	計						
男 子 人 数	1	5	17	6	1	30						
" %	3.3	16.7	56.7	20.0	3.3	100.0						
女 子 人 数	—	13	16	1	1	31						
" %	—	41.9	51.7	3.2	3.2	100.0						

(注) 通勤青年の部の第8図の1, 3, 4と対照される。

者以上に仕事への適応条件をもっていることになる。仕事の難易に関しては、男子の80%以上、女子の50%近くがむずかしさを感じ、疲労度ではやはり男子の80%近く女子の50%以上がつかれるといっている。いずれも男子の率が女子よりも高く、ここでも通勤青年でみられたと同様の関係が表われている。

仕事に興味をおぼえておれば、むずかしさや疲労をのりこえてもその能力の向上に努めることと思われる。第39表は「仕事の腕をあげること」について問うた結果であるが、現在において男子の全員、女子もやや消極的な者を加えて

第 39 表

仕事の腕をあげていくことについて

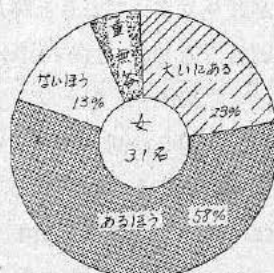
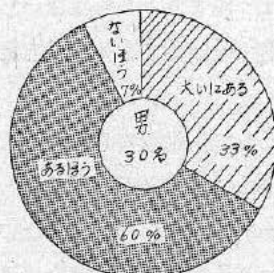
応 答	現 在					将 来						
	大い に 努力 す る 力	努力 し て い る	ま だ あ い る 力 が あ る	べ つ に 考 え た こ と が な い	重 ・ 無 答	計	努力 す れ ば か な ら ず で き る	努力 す れ ば か な ら ず で き る	努力 す れ ば か な ら ず で き る	努力 し て も で き な い	重 ・ 無 答	計
男 子 人 数 " %	15 50.0	15 50.0	— —	— —	— —	30 100.0	28 93.3	2 6.7	— —	— —	— —	30 100.0
女 子 人 数 " %	10 32.3	14 45.1	7 22.6	— —	— —	31 100.0	21 67.8	9 29.0	— —	1 3.2	— —	31 100.0

(注) 通勤青年の部の第8図の5、6と対照される。

全員が努力の方向を認めている。これは通勤青年よりも意欲的である。またそうした努力を続けた場合、将来それがむくわれるかどうかについては、「努力すればできる」方向に男女の全員が向いているといつてよい。特に男子の93%までが「努力すればかならずできる」と確信をもっており、頼もしい限りである。

仕事に興味がありその能力の向上に努力し、それがかならず実を結ぶと信じ樂觀して毎日を送っているのだから、仕事のやりがいを感じているにちがいない。第26図はそれを裏がきしている。「仕事のやりがいがある」と考えているのは男子の93%、女子の81%に及んでおり、仕事に興味と関心を持つと同時に

第 26 図 今の仕事のやりがいは

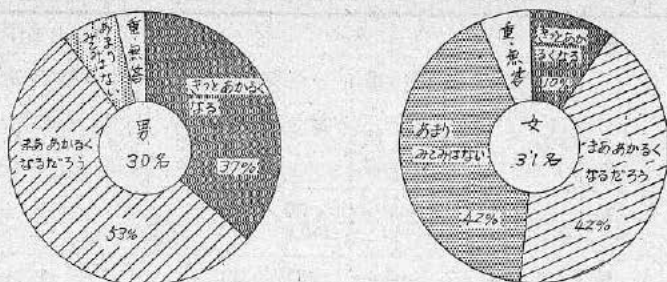


はりあいをもって精励しているものとうけとれる。これは通勤青年よりはるかに好ましい状態といえる（第8図の2参照）。だから、「今の仕事を続けていけばあなたの将来は」と問われても、「きっとあかるくなる」あるいは「ま



第 27 図

今の仕事を続けていけばあなたの将来は



「ああかるくなるだろう」と男子は大部分の者が、女子は半数が答えているのうなづかれる。ただ女子で「あまりみこみはない」と答えた者が4割以上あるのは注目してよい。19才青年といえ、理想と現実が分離し、どちらかといえは理想に関心の高かった16・7才ころとは異なって、現実生活と理想（それも空想よりは現実立脚している）の板ばさみになって、いまだに不安と動揺におそわれている時期であり、女子の場合まだ多分にロマンチックなものは残っていると思われる。そして彼女等の将来の関心はおそらく結婚をあれこれと夢みる時期に来ているとみられ、具体的生活設計とまではいかなくとも、できるだけよい結婚相手を考えているにちがいない。「いまの仕事を続けていけばあなたの将来はどうなるか」ときいた場合、女子青年が数年先に予想される結婚を考慮に入ると考えるのはうがちすぎているかもしれない。だが仕事そのものにやりがいを感じながらも、自分の将来を悲観的にみているなかには、そうした事情がおりこまれていくと解したい。では「あまりみこみはない」とした者を職種別にみると、工員が5名、看護婦3名、女中2名、食料品店員、飲食店事務員、食堂給仕各1名となっている。

次に、興味と関心の高い仕事をすすめていく上で、勉強の必要性をどの程度感じているのであろうか。第40表によると男子は全員が必要を認め、そのうち4分の3は「大いにある」と積極的である。女子も16%が「あまりない」と消極的であるが、84%はやはり必要性を認めており、通勤青年の場合、男子の3割、女子の5割近くが消極的であったのにくらべると格段の相違である。しかしこのように意欲的であっても現実に勉強の機会や条件はどうであろうか。青年たちの判断では男子の57%、女子の65%が「めぐまれている」か「めぐまれ

第 40 表 仕事をすすめる上での勉強の必要性和機会や条件について

応 答	勉 強 の 必 要					勉強の機会や条件				
	大いにある	ややある	あまりない	まったくない	計	めいぐまれて	めいぐまほれて	めいぐないれほう	まぐまたれくないめい	計
男子人数	22	8	—	—	30	3	14	11	2	30
男子%	73.3	26.7	—	—	100.0	10.0	46.6	36.7	6.7	100.0
女子人数	14	12	5	—	31	5	15	10	1	31
女子%	45.2	38.7	16.1	—	100.0	16.1	48.4	32.3	3.2	100.0

(注) 通勤青年の部の第19表と対照される。

ているほう」だとしている。「まったくめぐまれていない」者はごく少なく、「めぐまれていないほう」とした者が男女とも約3分の1ある。これらの結果を通勤青年と比較すると、女子は通勤青年よりもめぐまれていると判断した者が多く、男子は少なくなっている。勤務時間は男女とも通勤青年より長い者が多い中で、このような結果がでたことは、環境条件や人間関係など複合的な諸条件を考慮に入れても、住込み青年の仕事に対する熱情の一端をのぞきみることにならないだろうか。

さて、勉強にもっとも深い関連をもつことは、おそらく職業能力の向上であろう。「仕事の腕を上げるためにいちばん力をいれているもの」を8項目の中から選んでもらったところ、第41表の結果がでた。男女とも「上役や、先輩、仲間などに教えてもらっている」者が半数以上をしめ、「経験をもとにして考

第 41 表 仕事の腕を上げるためにいちばん力をいれていること

応 答	上役・先輩・仲間	つてに教える	研究会やサークル	学校や通信教育	など	本を自分で読む	うをたて	経験をもとにして	そ	どかわすかた	こまにばい	べつに努力して	重・無答	計
男子人数	16	1	—	—	1	6	2	2	—	2	—	—	2	30
男子%	53.3	3.3	—	—	3.3	20.0	6.7	6.7	—	6.7	—	—	6.7	100.0
女子人数	20	1	3	—	4	1	—	—	—	—	—	—	2	31
女子%	64.5	3.2	9.7	—	12.9	3.2	—	—	—	—	—	—	6.5	100.0

(注) 通勤青年の部の第9図と対照される。

えている」が男子20%，女子13%あるほか、女子に「学校や通信教育などで勉強している」者の10%がめだつ程度である。住み込んでいる以上個人企業であるならば、当然そこの主人が指導者となるのが普通のことなので、上役（主人）、先輩、仲間が直接の手びきをしてくれるのはあるべき姿である。これらの傾向は通勤青年と大体似ている。

#### 4. 労働観……仕事は腕でこい

労働に対する考え方については、通勤青年の場合、彼らの生活経験の事実を自分の行動のよりどころとして、おもくみる傾向が表われていたが、住込み青年はどうであろうか。同じく働いているといっても、起きてから寝るまで主人や家族、あるいは先輩、仲間などに対する人間関係の感情、気分、態度などの非合理的ではあるが除くことのできない環境、条件に包まれている。その比重が大きければ大きい程不平不満も大きく、労働意欲の減退や生産能率の低下をまねき、労働そのものに対する正しい考えがゆがめられてくる。ここでは提示された問題に対する応答を通勤青年と比較しながら、住込みという特殊条件を考慮にいれて分析してみたい。

まず、「仕事をしていくには、本を読むより、実際の経験できたえあげるのがいちばんだ」との提示に対し、「ほんとにそう思う」や「そんな気がする」と賛意を表した者は、男女とも8割以上に達して、仕事の上での経験を重視している。小・零細な個人企業では近代産業のオートメーション化はもちろんのこと、近代化への道をふさがれているところが多く、仕事そのものにも経験的要素が大きく働くので、住込み青年の職種などからみても経験尊重が肯定される。そして、その考え方の割合は通勤青年や全国勤め人の率とも似かよっている。

次に筋肉労働が事務の仕事よりはねうちがあるかとの問に対しては、男女の55%近くが同意している。しかし「あまり思わない」や「ぜんぜん思わない」反対者が男子に43%，女子に39%ある。その職種別内訳は男子では職人的な大工、建具職などが6人、工員3人、店員2人、その他2人、女子は工員5人、サービスの職業従事者3人、事務員2人、その他2人となっており、工員や職人的職業従事者の反対は、通勤工員にみられたと同様にホワイトカラーへのあ

第 42 表

## 仕事についての考え方

応 答	本を読むより経験が大切					事務よりも油まみれの 仕事がよい					計	
	ほん とに そ	そん な 気 が	あま り 思 わ	ぜん ぜん 思 わ	重 ・ 無 答	ほん とに そ	そん な 気 が	あま り 思 わ	ぜん ぜん 思 わ	重 ・ 無 答		
男 子 人 数	19	7	3	1	—	30	4	12	9	4	1	30
" %	63.4	23.3	10.0	3.3	—	100.0	13.3	40.1	30.0	13.3	3.3	100.0
女 子 人 数	17	9	4	—	1	31	7	10	7	5	2	31
" %	54.9	29.0	12.9	—	3.2	100.0	22.6	32.2	22.6	16.1	6.5	100.0

(注) 通勤青年の部の第9図の1, 2と対照される。

こがれ、こんな職業よりはもっと楽な職業が良いといった意識が働いているのであるまいか。

では学歴や縁故に関してどう考えているかを第43表でみると、「どんなに実力があっても、学歴や縁故のないものは下積みで一生を終るだけだ」という提示について、「本当にそう思う」「そんな気がする」と同意を表わしたのは男女とも20%余りで男女とも71%は否定的な見解を持っている。この回答からは住込み青年の下積み意識はきわめて低いことがわかる。通勤青年の場合同意を表明した者は男子に40%、女子に57%もあったのにくらべると、住込み青年の

第 43 表

## 学歴や縁故のないものは下積みになる

応 答	ほん とに そ う 思 う	そん な 気 が す る	あま り 思 わ ない	ぜん ぜん 思 わ ない	重 ・ 無 答	計
男 子 人 数	4	4	11	10	1	30
" %	13.3	13.3	36.8	33.3	3.3	100.0
女 子 人 数	4	3	12	10	2	31
" %	12.9	9.7	38.6	32.3	6.5	100.0

7割以上が学歴や縁故を意に介さないで、腕でこいといった気構えが濃いことを物語っている。仕事の上で経験尊重が普通とされる住込み先が多いことからして、職人気質めいた気風が出てくるのではないと思われる。

次に職業についての二つの考え方を問うた結果、第44表のような応答をえた。「仕事がつらくても、収入の多い職業につくのがよい」というのに対し、



「ほんとにそう思う」と全面的、積極的賛成者は一人もなく、「そんな気がする」と消極的に肯定した者が男子に27%，女子に13%あるだけである。したがって男子の7割，女子の8割近くは収入第一で職業を選択すべきでないと考えており，その考えは裏をかえせば次の問題に転ずることにもなる。すなわち収入第一でない職業とは，「収入が少なくても，自分の個性や趣味を生かせる職業につくのがよい」といったことになるまいか。この問題の提示に対し，男女とも大部分の者が「ほんとにそう思う」と積極的に，あるいは「そんな気がする」と消極的に賛意を表している。通勤青年よりも賛成者が多いのがめだつし

第44表 職業についての考え方

応答	仕事がつらくとも収入第一						収入より個性にあつた職業がよい					
	ほう ん 思 と う に そ	そ す る な 気 が	あ ま い 思 わ	ぜ ん な ぜ ん 思	重 ・ 無 答	計	ほう ん 思 と う に そ	そ す る な 気 が	あ ま い 思 わ	ぜ ん な ぜ ん 思	重 ・ 無 答	計
男 子 人 数	—	8	17	4	1	30	17	10	—	1	2	30
" %	—	26.7	56.7	13.3	3.3	100.0	56.7	33.3	—	3.3	6.7	100.0
女 子 人 数	—	4	16	8	3	31	20	9	1	—	1	31
" %	—	12.9	51.6	25.8	9.7	100.0	64.6	29.0	3.2	—	3.2	100.0

(注) 通勤青年の部の第10図の4，5と対照される。

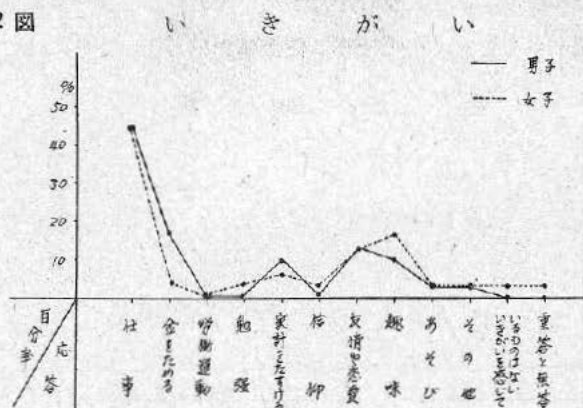
収入第一を認めながら，個性や興味を生かせる職業を選んでいるのは，むしろ後者に重みを感じているのであるまいか。

さて労働に休養は不可欠であるが，住込み青年には休日や休暇も通勤青年などより少ない事情はすでにみてきた。そこで「せっかくの休みには，コツコツ勉強するより，レクリエーションで楽しくすごすのがよい」と休日のあり方を示したのに対し，男女とも約80%の同意者がみられる。仕事や対人間関係から解放されて肉体的，精神的自由を得ることは健全な生活を送る大きな支柱ともいえる。しかしレクリエーションによって人生に喜びを発見し，生活を豊かにすると同様に，休日に勉強にいそしむ青年もある。「あまり思わない」や「ぜんぜん思わない」青年たちの中には，勉強に生命を発見している者もあるかもしれない。いずれにしても通勤青年と同じような結果がみられたことになる。

り、職場や近所の友だちもかなり制限されてくるといった事情が考えられるのである。したがって職場のせんぱいがなかったり、主人にうちあけるほど親近感や信頼感はなく、結局家の人に頼らざるをえないのであろう。

次は悩みとは反対に「生きがい」をみることにする。第32図でみられる特徴は、約半数近い男女が「仕事」に生きがいを求めていることである。通勤青年では20%前後しかなかったのに、ここでは男子に44%、女子に45%みられる。

第 32 図



これを職種別にみると男子では約8割が職人、工員でしめられ、女子は9割近くがサービス従事者および店員となっている。仕事に生きがいがあるということは働くことにはりあいを感じ、自分の将来がそれによって約束されることに希望を托し、住込みの目的を果しているともいえよう。次に通勤青年と大

第 48 表

仕事に生きがいを感じている者

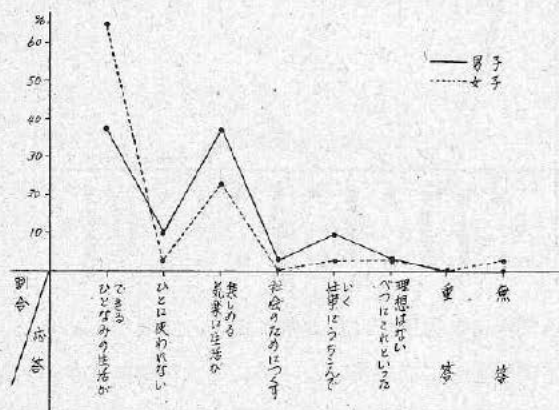
性別 職種	男 子					女 子				
	職人	工員	店員	その他	計	サービス	店員	事務員	職人	計
人 数	7	3	1	2	13	8	4	1	1	14

きく異なる点は、男子に「金をつためる」ことに生きがいを感じている者がかなりあることである。店員2名、職人2人、工員1名の計5名であるが、これも労働者としての一つの生き方であろう。「趣味」を求めている者は女子が男子

より多いし、「友情や恋愛」は男女同率であり、「家計をたすける」ことでは男子が多く、勉強や信仰、あそび等ではみるべきものがない。

生きがいと関連して将来の生活理想を第33図によってみると、男子は通勤青年と全く同じような傾向にある。(第21図参照) すなわち彼らが理想としていることは職場の緊張から解放された現実的生活を「ひとなみ」に送ることであり、「気楽に楽しめる」ことにある。彼等の職業体験の中には、その職業に対する使命観とその職業によって生計をたてていくという二つの要素が働いている。たとえ報酬が多くとも、その仕事に使命観を感じないときには、張り合い

第 33 図 生 活 理 想

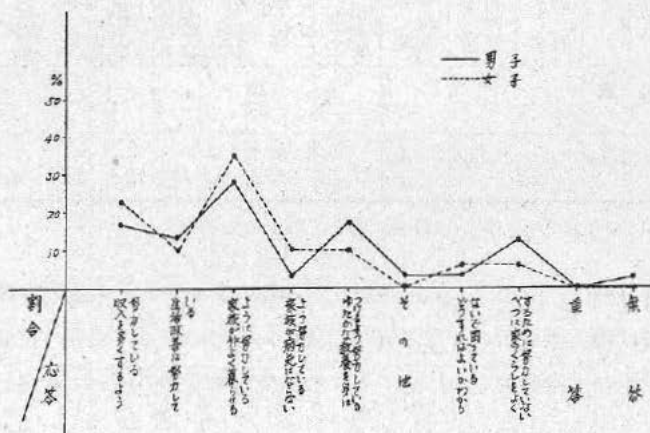


のある幸福な職業生活は営まれないし、また使命観にあふれても無一文ではやはり苦しい生活となってしまう。使命観と生計とが両立し調和しているときにもっとも幸福な職業生活が営まれる。しかしこの調和的な職業生活をもつことはなかなか困難であって、一方はよくても他方はみだされないという関係になり易い。住込み青年の多くが仕事に生きがいを感じていたが、彼等の生活理想からは仕事にうちこんでいく使命観は男子の10%を残してほとんど姿を消し、せめて「ひとなみの生活ができる」という平凡なねがいとなり、使命観と生計とが両立して「気楽に生活が楽しめる」境地を欲している。また彼らの考えの中に独立経営の夢「ひとに使われない」親方のような生活をとの声も、10%を数えるに過ぎなく、「社会のためにつくす」といった使命観はほとんど表われてきていない。女子はその65%までが「ひとなみの生活」を欲し、「気楽な生

活を求める者も23%ある。

このような手近かなさやかな生活理想をうたえる青年たちにとって、現実の家庭生活はどうなのであろうか。第34図は家の暮らしをよくするためにいちばん力をいれていることの応答結果である。「気楽な生活」や「ひとなみの生活」の内容として「家族が仲よく暮らせる」ことが重要なことはいうまでもない。職場の緊張がねぐらである家庭に帰っても再現されることは堪えられないことにちがいない。また「収入を多くする」努力も家庭の和とともに家庭生

第 34 図 家のくらしをよくする努力



活向上の直接の原動力となることはいうまでもない。なお男子の17%、女子の10%が「ゆたかな教養を身につけるよう」努力していたり、「生活改善」を目標としたり、あるいは「家族が病気になるように」配慮していることは、それぞれの実情に応じてもっとも力をいれていることであって、住込み青年の生活理想への足がかりとみてよいであろう。

## 7. 教育の機会……男子よりも女子が機会を多くつかんでいる

住込み青年が教育の機会をどのようにもっているかを、高等学校、各種学校他の教育機関、団体にわけて検討してみる。

高等学校関係では男子に4名(13.3%)、女子2名(6.4%)にすぎなく、通勤青年で男子の35%が定時制在学中であったのとくらべ格段に低いのは、勤務形態が就学を困難にしているからと思われる。雇用主のよほどの理解がなけれ

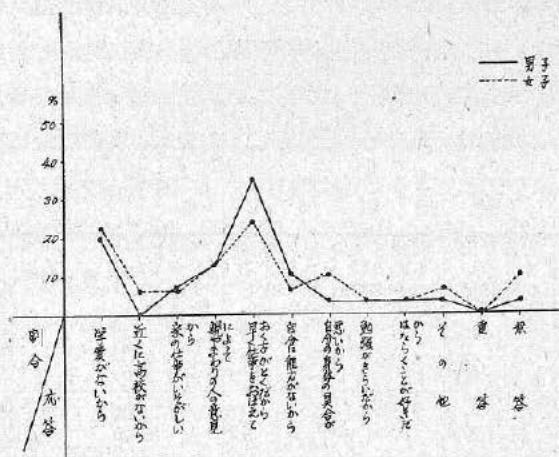




とやや似ている。住み込んでいるという名目で加入させられている者もあるうし、かって在村中に加入した経験者もあるかもしれない。また女子にレクリエーションなどの集まりに参加した関係者が10%みられるほかは、男子に4日経験者が1名あるだけである。まずは低調というほかない。

では、これらの住込み青年が全日制高校へ進学しなかった理由を問うてみよう。男女を通じてもっとも多いのは、「早く仕事をおぼえておく方がとくだから」ということであり、次が「学費がない」である。農家出身者の割合が多くその上男子はいわゆる職人が約3分の2、女子はサービス従事者や工員が4分

第 36 図 全日制高校不進学の原因



の3近くいる職業的事情が加わって、「早く仕事をおぼえる」べく住み込んだ者が多いのであろう。「学費がない」のはまったく家庭的事情からで、「親やまわりの人の意見によって」とか、「家の仕事がいそがしい」等とともに他律的要因と見なしうるであろう。「自分に能力がないから」とあきらめたり、「身体の具合」「勉強がきらい」「働くことが好き」などいずれも自律的要因で進学を断念しているが、男子の60%、女子の50%がそれらを第一の理由としている。通勤青年の場合にも、男子に自律的要因をあげた者が多かったが、住込み青年も同様の傾向があって、調査全般にみられる男女の相異を表わしている。

教育機関や各種団体等で勉強の機会を得たことのある者、現に関係している者はかなりの数に達していたが、個人的に勉学に励んでいる者もあるはずであ

る。第50表でみると男子で6人、女子8人となっており、その種類も雑多ではあるが、宗教修養など特異なものであるまいか。

第 50 表 個人で勉強していること

応 答	宗教・ 修 養	工業	商業	家庭	芸能	判定 困難	ない	無答	計
男 子 人 数	2	1	—	—	1	2	19	5	30
" 人 数 %	6.7	3.3	—	—	3.3	6.7	63.3	16.7	100.0
女 子 人 数	1	—	1	4	1	1	18	5	31
" 人 数 %	3.2	—	3.2	12.9	3.2	3.2	58.2	16.1	100.0

ではこうした勉強についてそのあり方をどう考えているのかを問うてみると「仲間をつくっていっしょにする」と仲間意識の強い者が男女とも6割近くに達している。青年たちが自分たちのおかれている立場——個人企業への住込みの場合、おそらく仲間がいない——を理解し、よりよい学習のあり方をグルー

第 51 表 勉 強 に つ い て

応 答	自分ひとり コツコツ勉強する	勉強する ものとは つきあい にくい	自分は今 さらする 気になら ない	仲間をつ くってい っしょに 勉強する	重・無答	計
男 子 人 数	10	—	3	17	—	30
" 人 数 %	33.3	—	10.0	56.7	—	100.0
女 子 人 数	9	—	3	18	1	31
" 人 数 %	29.0	—	9.7	58.1	3.2	100.0

プに求めたものと思われる。個人的に「自分ひとりコツコツする」を選んだ者は男子の3分の1、女子の3割弱で、「いまさら勉強する気になれない」と意欲を棄てている者は男女それぞれ10%である。ともかく大半の者は勉強したいし、できれば仲間（同じ職種の集まりが望ましい）をつくってやりたいと望んでいるわけである。

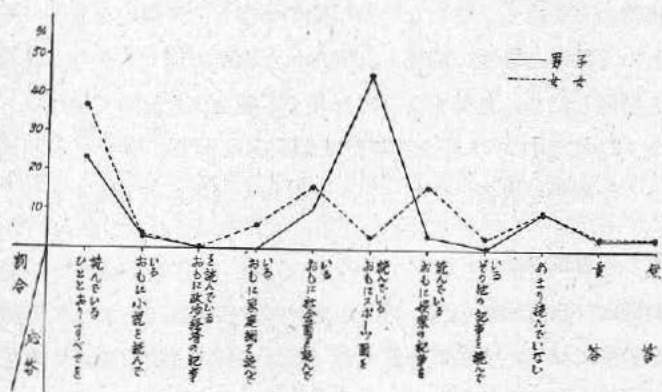
次に、勉強は金もうけのためになってこそねうちがある」と提示したところ第52表の1のような結果をえた。通勤青年と同様に勉強を功利的に考えている者は20%余りで、男子の80%、女子の70%は教養的な見解をもっているとみられる。そうした意味で一步つっこんで社会や政治の勉強にどの程度関心をもち努力しているかどうかをみると、「べつに考えたことがない」という男女の3

第 52 表 勉強に關して

<div> <div> <div></div> <div> <div></div> <div> <div></div> <div></div> </div> </div> </div> </div>	1 勉強は金もうけのため						2 社会や政治の勉強					
	ほん とに そう 思う	そん な 気 が す る	お あ り 思 わ ない	ぜ ん ぜ ん 思 わ ない	無 答	計	大 に 努 力 し て い る	努 力 し て い る	ま あ 努 力 し て い る	べ つ に た と え 考 え し た	無 答	計
男 子 人 数	1	5	13	11	—	30	3	6	9	10	2	30
" %	3.3	16.7	43.3	36.7	—	100.0	10.0	20.0	30.0	33.3	6.7	100.0
女 子 人 数	1	6	12	9	3	31	2	4	13	11	1	31
" %	3.2	19.4	38.7	29.0	9.7	100.0	6.5	12.9	41.9	35.5	3.2	100.0

分の」を除いては、一応関心と努力の方向があるとみられる。ただし「まあ努力している」と消極的な者が多いことは、関心の程度を察知する手がかりとなる。これをさらに、日常接している新聞の読み方で確かめてみると、政治、経済記事に注目している者は皆無といってよく、社会の勉強は「社会面」のいわゆる三面記事への興味であり、「ひととおりですべてを読んでいる」といってもやはりスポーツ面や社会面、あるいは娯楽面にまず注意をひかれていることと想像される。高校3年程度になると社会や政治への関心が急に高まるのとくら

第 37 図



べ、職業的な差異としておろそかにできない問題と思われる。



## 8. 調査結果の要約と教育上の問題点

### (1) 職場事情からくる生活意識の制約

男子30名、女子31名の住込み青年のうち、男子は職人60%、工員17%、店員13%あわせて90%の者はいわゆる徒弟小僧型とよばれる部類に入るであろうし女子の39%に及ぶサービス業従事者、32%の工員、19%の店員等、住込みという生活形態からくる制約は男子同様の事情にあると考えられる。

これらの住込み青年たちの大部分は日夜主人のいいつけのままに下働きに酷使され、一人前の独立した労働者としての扱いをうけている者は数少ないであろうし、職場の生活者としても位置づくまでにいたっていないことと想像される。さらに青年たちが、主人の家に住込みで働いているという生活構造は、家族主義的な人間関係の中にあって、独立した人間としての生活が確立されていないということや、職業修得の過程そのものが近代的な教育から程遠いといった事情も加わって、かれらの生活意識全体を規定してくると思われる。すでに明らかにしたとおり、男子の70%、女子の55%は零細、家族経営の家庭に住み込んでおり、しかも男女の半数は農家——収入もよくない——の出身という事情もあって、長時間労働はもとより、その給与もきわめて低い事情にあった。かれらは義務教育を終るか終わらないかで徒弟小僧として雇いこまれ、その生活空間をほとんど職場と職場に関係した限られた場所で過しており、社会のさまざまな人と接触したり、見聞をひろめたりする機会はきわめて少ないといえてよい。したがってかれらの社会的視野は限られており、狭いことが通例である。このような制約を考慮に入れて以下の要約を試みることにする。

### (2) 仕事への意欲は高い

就職の動機は「自分にむいている」とか「将来性がある」として積極性を示したものが男子に46%、女子に36%もあって、「親やまわりの人の意見」によるとか、「適職がなかった」「人にすすめられた」というような、あなたまかせ的な入職をした者は男子の40%、女子の49%と予想よりは低い結果がみられた。しかしその入職てづるは縁故やそれに類似の者が男子67%、女子75%と高く住込み決定への事情を物語っている。そうした就職動機やてづるで現在の職場に働いている青年たちが、仕事はむづかしいし(男子83%、女子48%)疲れ

る（男子77%，女子55%）といいながらも、仕事そのものに興味と関心が意外に高く、男子の93%，女子の81%が仕事にやりがいを感じている。同時に、仕事の腕をあげることに男子は全員が、女子は8割までが努力していると答え、その上、男子の93%，女子の68%は努力を続ければ必ず職業能力向上が達成できると決意を示している。このように職業生活において自己をみがく必要にせまられ、むつかしい仕事にもかかわらず興味をもって努力している現状は、男女のほとんど全員をして「勉強の必要がある」と認めさせているのである。かれらの職種から勘案するに、昔流では義務教育程度の教養や技能を土台として何時とはなしに見よう見まねで仕事ができるようになっていく生活であった。しかし現在では、たとえ大工の徒弟であっても将来技能検定や建築士の免状を所有することが要求される時代であり、看護婦、美容師等それぞれの職種に応じて教養や技能の取得が必要であり、努力が要請されるのである。したがって仕事の場、職場がその中にいる人間をたえず成長させ、たえず発奮させるような緊張したものをもってしているとすれば、そうした職場は人間形成の場であるといえるであろう。住込み青年たちの職場がそうした雰囲気にあるのかどうかは不明であるが、少なくとも仕事への喜びを見出し一人前になろうとする意欲をもやしていることは事実であって、（特に男子に強い）心強いものを感じさせる。

### (8) 労働観

徒弟小僧として住み込んだ以上、一人前に仕事をおぼえることがかれらの第一目標といえるであろう。前にもふれたように男女の大部分は仕事をすすめる上に勉強の必要を認めていた。しかし、「仕事をしていくには、本を読むより実際の経験できたえあげるのがいちばんだ」という提示に対しては、「ほんとにそう思う」（男子63%，女子55%）、「そんな気がする」（男子23%，女子29%）と大部分が賛意を表し、親方の命にこれ従う徒弟的行き方をはっきり示している。それにもまして住込み青年の生き方を鮮明にしたのは、「個性や趣味を生かせる職業」に男子の90%，女子の94%が同意したことであろう。それは仕事への興味や関心と同じ程度の割合であり、通勤青年でみられたものよりもはるかに高い一致を示している。それはまた職業意識において、職場の将来

性や今の仕事を続続した場合の自己の将来性等に希望をもっている者の割合とも一致して、かれらが一応現在の仕事を自分の個性を生かせる職業と考えている反応と解されるからである。さらに、「学歴や縁故のないものは下積みで一生を終るだけだ」という問題については男女の71%がそうは思わないと反対し仕事そのものに頼らざるを得ない者が多く、しかもその腕が尊重されるといった事情を物語るとともに、かれらの心意気——明らかに職人氣質——を表明している。同時に「収入の多い職業につく」ことについて男子の7割、女子の8割近くが反対し、かれらが現に従事している職業の妥当性を自ら立証しようとする態度がうかがわれる。しかし、「きれいな事務の仕事より、汗や油にまみれて働く仕事のほうがねうちがある」という提示には、男女の53~55%が同意し、43~39%が反対しており、通勤青年よりも反対者が多少多い。

#### (4) 職 業 意 識

住込み青年の現在の境遇は必ずしも恵まれているとはみられないが、それにもかかわらずかれらの職場続続意志は高いものがある。かわりたい者は男子の13%、女子の16%と通勤青年よりも低く、続けてもかわってもよいとする者は男女の13~26%である。このように男子の7割、女子の6割近くが職場を継続したいという意識の内部には、むしろかれらが現在の職業を簡単にやめることのできない事情にあることを考えるべきであろう。かれらの大部分は家でも収容できず、通勤できる適職もなく選んだ道であると思われる。自分の意志でなく他からおしつけられて、やむなく入った者もあるであろう。しかしいったん住み込んで仕事をおぼえ始めた以上、家へもむざむざ帰れないし、また都会の他の職業に代りたいと思っても、それに必要な専門的技術もなければ、都市生活者としてのセンスも身につけていないわけであるから、いきおい現在の職業がたとえ条件が悪くとも、続けられる限りは続けていかざるを得ないのである。ところが通勤青年の場合、転職がさしてむづかしく考えられず実行できる事情には、生活環境や社会的視野の広狭、深淺といった相違のほか、自己のものにした仕事の腕を他の異なる職場へ直ちに適応できるという利点があるからであって、それだけ住込み青年の仕事への熱情や打ちこみ方が真剣にもなってくるのである。このような職業に対する積極的な意識は、勤め先の将来性に

希望をもったり（男子87%，女子75%），今の仕事を続けていけば自分の将来は明るくなる（男子90%，女子52%）との希望に支えられているといってもよい。住込み青年の大半は労働組合など夢みることのできない徒弟小僧として住み込んでいる，にもかかわらず，いっしょに働いている人たちとの人間関係については，「大へんうまくいっている」（男子40%，女子29%）あるいは「うまくいっているほう」（男子57%，女子61%）と暗さを感じさせないものがある。したがってかれらの職場は明るいであろうし，徒弟小僧的な地位をさして苦にしていないと受け取れるのである。

#### （5）夢と現実（通勤青年と対照して）

住込み青年の労働観や職業観には予期以上に明るい楽観的気分がただよっていることが感じられたが，環境条件の核心である住込み先が，かなり昔と異なっていて徒弟小僧的立場にある青年たちを大切に，優遇とまではいかなくとも冷遇はしていないことを示しているのではあるまいか。そうした青年たちにもいろいろの悩みが表明されている。まず男子であるが（カッコ内の数字は通勤青年の反応率を示す），学歴がない（13%），家がまずい（10%），悩みはない（13%）がおのおの17%であり，賃金が安い13%（19%），自分自身のこと7%（18%）といったぐあいである。通勤青年と比較してわかるのは，学歴のない悩みや家がまずい，あるいは悩みはないことなどが高い率となっていることである。学歴については職人，工員だけがとりあげており，先に下積み意識に同意した20%余りの者がやはりこの悩みを訴えている。家がまずいことを最大の悩みとすることは余程心痛のたねとなっているのであろうが，同時に賃金が安いという悩みにも通ずることにもなる。通勤青年の場合，自分自身のことが高い率であったが，住込み男子青年には比較的自己内省的な悩みが少ないのであろうか。次に女子をみると，自分自身の問題が30%（23%）と断然多く，学歴がない10%（20%），賃金が安い11%（12%），悩みはない10%（13%），その他10%などとなっている。自分自身の悩みが3分の1近くあるのは理想と現実の距離をみつめて，将来に希望がもてなかったり，才能や能力に対する劣等意識等いろいろあるであろうが，彼女らの生活理想からおして人なみの生活を求めている者が大半をしめているので，結婚を通しての人生設計



が直接のものでないかと想像される。

ところが悩みを訴える人となると「家の人」が男子の40% (30%)、女子の54% (33%)と通勤青年よりも増加し、「友だち」が男子23% (43%)、女子16% (43%)に激減してくる。これは住込み青年の生活領域の空間的、時間的狭さを物語るものであって、共に人生を語りあえる友人を得られない青年期の欠陥を見せつけられるような気がする。さりとて職場の親方には悩みをうちあける程の信頼感はなく、やはり「家の人」に落ち着くことになるのであろう。

さて青年たちの生きがいは男女とも「仕事」に集中している。男子の44% (18%)、女子の45% (22%)がそれで、通勤青年の遠く及ぶべきところでない。仕事への意欲になみなみならぬものをもっていた青年たちにすれば、やがて年期が明けて独立独歩の職業人たれんとする希望に燃えて、一途に打ちこんでいる姿がほうふつとしてほほえましくさえる。全日制高校不進学の理由に、「早く仕事をおぼえておくほうがとくだから」と答えた男子35%、女子24%はもちろん、それらを上廻って「仕事」に生きがいを求めているのである。通勤青年の場合「趣味」に生きがいを求めた者は男女とも19%あったが、住込み青年では男子の10%、女子の17%がみられ、友情や恋愛は男子13% (15%)、女子13% (10%)、家計補助が男子10% (11%)、女子6% (16%)となっているが、男子で「金をためる」ことをあげた17%は通勤青年の5%とは比較にならない高い率で、コツコツと貯蓄をし諸事に節約を旨としているのであろうがあなたがち功利的ときめつけるにもあたるまい。

最後に生活理想では、女子の「ひとなみの生活ができる」ことをねがった65% (39%)が群をぬいている。彼女らの好ましい夢がつつましいねがいとして表明されたことには大きな理由があるのであるまいか。大体女子にとって職業は生涯のものとして考えられているのではなく、家庭に位置づくことに最大の関心があるといえよう。ただ一時的ではあるが職業生活を送ることによって女子の生活態度や、社会に対する考え方を現実的に理解しうることが与えられているといえる。そうした窓から人生設計を現実的に把握したとき、「ひとなみの生活」が出てきたのであるまいか。それは「気楽に生活が楽しめる」ことよりも一段とへり下っていないだろうか。「人なみ」ということは「平均以上」を指してはいない。平凡なありきたりの生活ということである。そこに現にお

かれている彼女らの位置づきが想像できるし、家庭における余り者的存在のにおいすら察知されるのである。

#### (6) 教育の機会とその課題

住込み青年の教育機会は、通勤青年と比較しても、農業青年とくらべても一番よくない。すでにみたとおり、高校教育では定時制中退が10%みられる(男子)ほかはみるべきものがないし、各種学校では女子の家庭、サービス関係におのおの13%。他の教育機関へは男女とも50%近く、その他団体、サークル等に男女の約20%が関係していたが、何等の教育機会をもたない者が男子43%、女子33%と高い割合を示している。端的にいうと、彼らに時間的余裕があっても、事実上生活の自由が束縛されており、学習の機会に触れられない者が多いのであるまいか。それでいて、「仲間をつくって勉強したい」という者が男子に57%、女子に58%と通勤青年よりも高く、「自分ひとりでコツコツ勉強したい」者をあわせて男子の90%、女子87%もが勉強の意欲をもらしている。このように自覚したとしても個人的に学校教育を継続することは、労働との関係、住込み先への気苦勞等で途中で挫折するようなことになりかねない。定時制中退者の10%がそれを物語っているといえよう。いきおい手近かな比較的ゆきやすい女子の各種学校、他の教育機関、青年団等に限定されてくことは、住込み青年に手をさしのべる教育として、現実にはこうしたもののしかその機能を果たしていないことになる。しかし青年学級や青年団に彼らが関係しても、果してどの程度の効果をあげうるかは疑問であって、ここにも職能集団として彼らを教育的に編成する必要が痛感される。それが彼らの欲する「仲間をつくって」という要望に答える道ではあるまいか。徒弟小僧として住み込んだ職場が幸にして彼らをたえず成長させ、たえず弛緩させるような雰囲気にあるならば、彼らはつねに自分の力の不足を感じ自己自身を高めようと努力するであろう。しかしそうした職場であってもなおかつ広い視野に立った見識と教養が望まれるのである。住込み青年の大部分が仕事に興味をよせそれをすすめる上で勉強の必要を認めていたのは、職業能力の向上につながる問題と解される。いずれにしてもそうした意欲があるということは停滞を意味していないし、惰性が彼らの生活態度とまで化していないものと思われる。そうした意欲や心情をとり

あげてくれる組織があり、親方や仲間からも認められるとすれば、彼らは喜んでそうした教育に参加するのであるまいか。その形態が共同の技能者養成機関であっても、青年学級であっても、要は内容的に充実し青年たちの人間形成に資するものであればよいのである。

## 第4節 農 業 青 年

(自営型青年、抱え込み型二・三男、および女子青年)

これから分析する農業青年は男子81名、女子97名、計178名で、その生活類型別経営規模別人数は第2表で示してある。長男層(自営型)は51名(63%、全国集計は54.7%)、二・三男(抱え込み型)29名(35.8%、全国集計32.8%)、女子89名、雇用者男子1名、女子6名となっている。分析にあたっては雇用者を一応除外し、長男層、二・三男層、女子を同時に比較しながらそれぞれの特徴をみ、全国集計からの見解も併列させていくことにする。なお集計資料は本文に記載するものをかなり制限し、資料としてまとめたものが相当あることをお断りしておく。

### 1. 農家の実態と青年たちの経営参加状況

#### (1) 田畑作農家が大部分をしめ経営規模は比較的大きい

169名の出身家庭を資料1、2、3、4でみると、米作を主体としている農家が93%で全国集計よりもずっと多く、次に力を入れているものでは野菜・たばこ・養蚕・畜産などが多く全国とはやや趣を異にしている。その中で、野菜・たばこに力を入れている農家に二・三男、女子が多いのは、それだけの労働力を必要とするからであろう。したがって本県農家の主たる経験状況は水田農家が約40%、田畑作農家が58%をしめ(資料3)その経営規模は1町5反以上の農家が74%をしめて全国の54%よりかなり上まわっていることがわかる。これらは本県農業の実態を反映しているものと考えられる。

#### (2) 機械化はかなり進んでいるが、農業所得からの生計費の割合はあまり高くない

経営規模が大きければ農業従事者数も多くを要するわけであるが、全国集計と比較してさほど多くないのは、機械化が進んだためであるまいか。なお資料5によると長男のいる農家の農業従事者は3人がピークになっているが、二・三男、女子のいる農家は4人がかなり多いのは、野菜・たばこの経営農家と関係があるように思われる。これを耕作方法からみると、すき・くわなどで耕作する農家は本県にやや多いし(資料6)、また機械を使用している農家も全国より上まわっている(本県男子38%、全国男子35%、本県女子47%、全国35%)。これも本県における耕耘機普及率が全国第一位であることを反映しているとみられる。ただし、農業簿記をつけている農家は、男子が全国の約半数、女子がやや上まわっていて、相対的には低いことになる。

次に生計費と農業所得の関係をみると(資料9)、農業所得から8割以上の生計費を満たしている農家は男子36%、女子28%で、全国男子の41%、女子の39%より低くなっている。これはどういうことを意味しているのであろうか。米作主体であり、表日本のように多角経営のうまくいっていない現状としてはやむを得ない事情があるのであろう。米作一本では食っていけない以上、兼業も当然であって資料11でみられるように、兼業をしていない農家の割合は男子33%、女子55%で、全国の男子55%、女子62%より少ない。その兼業の形態もいろいろであるが、年間、季節を問わず実施している家が多い。

#### (8) 農業経営への参加状況

資料10によると、「さしずをうけてやっている」者は、長男41%、二・三男55%、女子85%と女子の率が非常に高い。このことは女子が単なる労働力の中に位置づけられていることを意味している。(1959年発行 研究紀要 第20集 農村青年の人間形成 参照)。また長男の経営参加も、生産の一部門をまかされている者が35%、すべてをやっている者が16%いる。19才といえば農業高校へ進学しているならば卒業翌年ということであり、伝統的日本農業の生産技術を一通り修得しかかっている年令といえる。したがって、すべてをまかされている者にとっては大きな試練に直面しているといえる。これら長男の割合は全国男子の割合を上まわっているが、二・三男を加えればその率はかなり低下してしまう。また女子では、全国でさしずをうけてやっている者が約70%で本県女



子より15%も少なく、生産の一部門をまかされている者が14%もある。それだけ本県女子の農業経営参加への位置づけが低く評価されるわけである。

#### (4) 家庭事情

家族の中で農業に従事している者の人数は資料5で明らかにしたが、両親が健在かどうかを第53表でみると、両親とも健在の家庭は男女平均76%で全国なみである。欠損家庭では父のない家庭が多く、戦争の爪あとがこうした形で残されている。また家族の総収入を家族総人数で割った家族1人あたり月平均収入は、資料12でみると、無答者が半数もあって、回答だけの傾向では4,000円

第53表 両親の健否

	両親あり	父なし	母なし	両親なし	無答	計
本県長男 人数	41	9	1	—	—	51
" 二・三男 人数	22	4	2	1	—	29
" 女子 人数	65	21	3	—	—	89
" 二・三男 %	80.4	17.6	2.0	—	—	100.0
" 女子 %	75.9	13.8	6.9	3.4	—	100.0
全国男子 %	77.5	16.8	3.3	1.8	0.6	100.0
" 女子 %	77.0	14.2	5.4	3.0	0.7	100.3

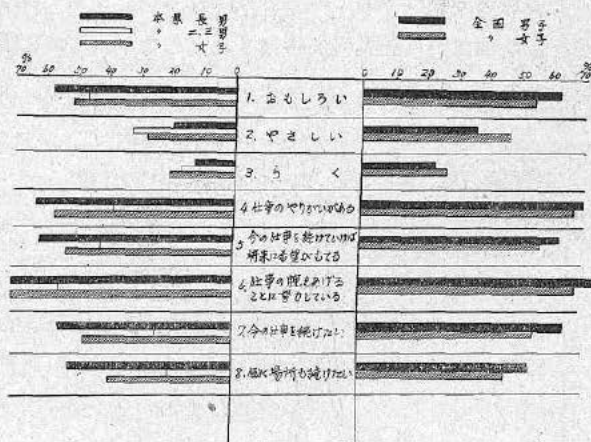
以下の割合が高く（男女平均23%）、大体全国なみくらいと推定される。また13,000円以上の高い水準は男女とも全国より高い。なお女子に無答者が6割もあり、男子も45%もあるのは、家計を知らなさ過ぎるといってよく、一家の所得をおやじが独占していた過去のあり方が残っているのではないかと疑われる。

#### 2. 仕事についての考え方

第38図は仕事に関連したいろいろの問題について、一方の方向を示す一つの意見を提示し、それについて同感——反対の程度を評定してもらい、同感の者の割合だけをまとめて示したものである。例えば1の「仕事はたいへんおもしろい」や「ややおもしろい」と答えたものの割合は、本県の長男58%、二・三男47%、女子52%であって、全国集計の男子62%、女子54%と比較することができる。この図を1項目ずつ検討すると、そこにいろいろの問題が伏在してい

ることが読みとれる。1, では仕事の興味に関し長男が一番高く、2 仕事の難易に関しては二・三男や女子が長男より高いし、3, では女子、二・三男、長男の順になっている。仕事は長男にとっては、やがて自分の責任において経営せねばならない運命を自覚し熱意を示す——そしておもしろい——と同時に、未知のどうにもならぬことが多くて仕事のむつかしさを体験し、むだのない実りのある農業をうちたてるにはまことにむづかしいということにもなる。そうし

第 38 図 仕事について……全国集計との比較



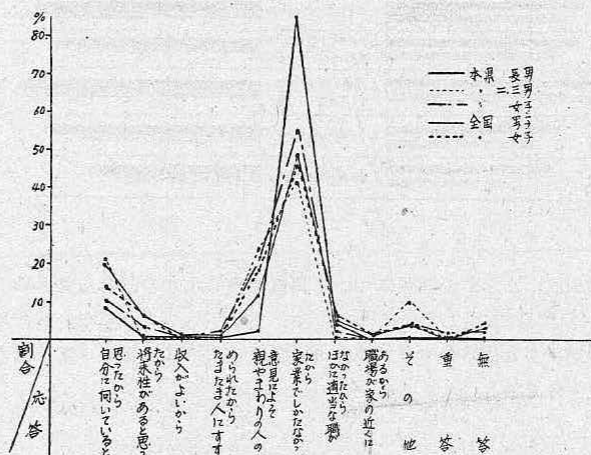
(注) この図は、まん中の問題について賛意を表した者の割合をまとめて示した。たとえば仕事はおもしろいについては、「たいへん」「やや」おもしろいと答えた者を、また仕事のやりがいについては「大いにある」「あるほう」と答えた者の割合である。

たそれぞれのおかれた立場が微妙に影響し、大差ではなくても高低が出たものと考えられる。全国の男女にもそれが似たような現われ方をしている。4, 仕事のやりがいについては、長男に「やりがいがある」者がもっとも多く、二・三男が一番低い。二・三男の中には近い将来離農して、都市生活者とならねばならない運命をになっている者が多いのであろうから、仕事に「やりがい」が感じられないだろうし、したがっていまの仕事を続けていっても、「将来に希望」がもてないわけである。さらに7, 「今の仕事を続けたい」希望者や、8 「現在の働く場所」すなわち生家に残っていたいという者がめだって少なくな

る道理でもある。また女子は経営に参加できず、万事さしずをうけて仕事をしている。したがって彼女たちには「考える」ことがさして必要でない「経験的技能」の範囲での仕事が与えられ、しくまれていくことが多い。それにもかかわらず、二・三男以上に興味や関心をもち、将来へ希望を托し農業を続けたい者の多いのは、現実的に彼女らがおかれている立場を容認し、一種のあきらめに似た気持ちに転化しつつあることを物語るのであるまいか。（研究紀要 第20集 農村青年の人間形成 36ページ参照）

現に従事している農業労働についての考え方は以上のごとくであるが、169名の農業青年がどんな理由から農業に従事せざるをえなかったかを確かめてみよう。まず長男の85%は「家業でしかたがなかった」としている。農家の長男

第 39 図 選 職 の 理 由……全国集計との比較



として生まれ幼いときから農業を受けつぐべく宿命づけられてはいるが、自営青年がこうした宿命的な、あきらめに似た気持ちで中学校卒業と同時にずると農業に入り、ここでみられるように農業を積極的に肯定している者が少ないことに問題がある。わずかに8%の者が「自分に向いていると思ったから」と述べているに過ぎない。また二・三男、女子にも「家業でしかたがなかった」と答えた者が、それぞれ42%、55%あり、加えて「親やまわりの人の意見」によった者がこれまた20%以上あって、青年たちのなりゆきまかせの、惰性的心

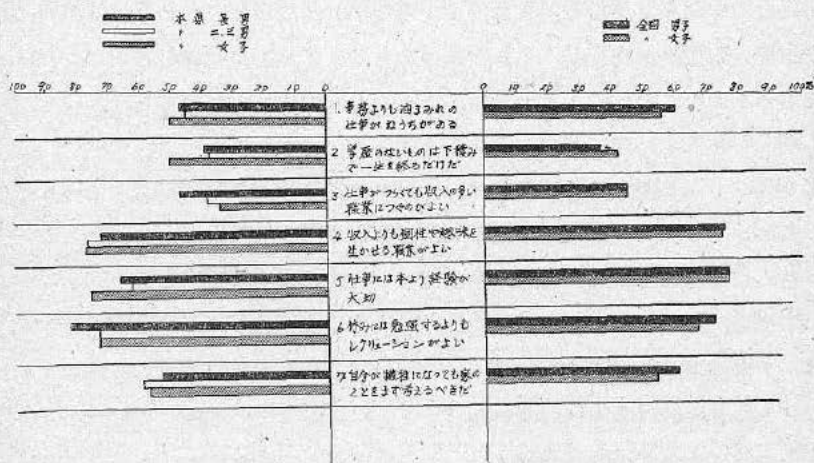
情がうかがわれる。通勤青年や住込み青年にみられた積極性が影をひそめている  
 といつてよい。それにもかかわらず現在、「仕事のやりがいがある」「将来  
 に希望がもてる」という者が男女それぞれ半数以上（二・三男も長男に加えて  
 平均している）ある。しかし、今の仕事を続けるかどうかの決断になると、長  
 男すら「続けたい」者が減少するし、二・三男、女子はさらに大きく後退して  
 くる。

以上の選職とそれにかまざる問題について昭和32・33年に実施した勤労青年  
 の共同研究をまとめた「勤労青年の生活」411ページには、次のようにまとめ  
 ている。青年たちは学校（中学または高校）を卒業して農業にはいるについて  
 どこの地帯でも特別理想をもってはいるのではない。むしろいやいやながらふ  
 みこんでいく。しかし数年の後、はっきりちがった心の向き方をもって農業に  
 立ちむかっていることが示されたとしている。

### 3. 労働観

では農業青年の農業への立ちむかい方は具体的にはどうなのであろうか。こ  
 れを側面的にいろいろの方向から提示した問題に対し、同意した者の割合だけ  
 を示したものが第40図である。概観すると、1, 2, 3の問題については賛成

第40図 労働観……全国集計との比較



者が50%以下にとどまっており、4, 5, 6については60%以上の賛成者がみ



られる。全国集計もやや似た傾向にある。

まず筋肉労働を意味づけた第1問については、半数近い賛成者がある。近代化された農業からみれば、泊まみれの仕事といった観念はうかばないかも知れないが、それに近い考えがうかぶのであるまいか。とすれば、半数近くの青年たちは自分たちの労働を肯定し、ある程度意義づけていることになる。第2問の学歴については、女子が長男、二・三男よりも下積み意識（劣等感）をもっており、女子の半数は同意している。第3問は仕事と収入の関係を提示しているが、長男、二・三男、女子の順に収入の多い職業を望んでいる。これはあながち功利的とばかりはみることができず、生活にあくせくせざるを得ない者からみれば、背に腹はかえられぬといった気分にもなるであろう。ところが観点をかえて、「収入よりも個性や趣味を生かせる職業がよい」と、むしろ逆のきき方をすると男女の70%以上が「ほんにそう思う」たり、「そんな気がする」と同意してくる。ここへは収入第一と考えた者も混入し、青年たちの生き方に対する希望が那辺にあるかを察知できよう。

第5問は、「仕事をしていくには、本を読むより、実際の経験できたえあげるのがいちばんだ」と、経験尊重をうたっているのである。それに対して60%以上が賛意を表している。これらの青年の意識の中には、自分は学問はない、あまり科学的な農法もわからない（自己卑下）、しかし人なみのことをしていれば百姓でもなんとかなる、また何とかしなければならぬという生活への要求や生産への要求が内在し、それを正当なものとするため経験が大切だとしたのであるまいか。農村の多くの青年がこうした心的内部矛盾をもちながらも、その統一をこうした形で解決しようとしているようである。

第6問は、「せっかくの休みには、コツコツ勉強するより、レクリエーションで楽しくすごすのがよい」と提示したところ、男女の70%以上が同意している。特に長男は82%と高い。農閑期は別として、月に2・3回しかないせっかくの休みを、青年たちは一日千秋の思いで待ちわびており、青年団や4日さては青年学級の集いなどはこうした休みを利用することが多い。多くの青年はそうした主として学習に休みがつかわれることに反対しているわけである。このことから農村青年の学習意欲が低い、と単純にきめつけることは適切でないがそれにしても「あまり思わない」とか「ぜんぜん思わない」と反対した者は長

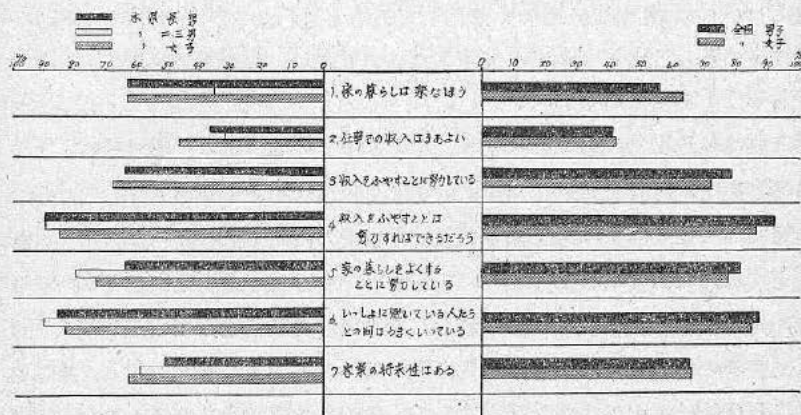
男14%、二・三男、女子とも20%にすぎないから、現実的な問題としてレクリエーションで楽しくすごすことを、大部分の男女が望んでいることに間違いがない。

第7問は、中学校卒業当時、家業だからとか親やまわりの人にすすめられて農業に従事してきた青年たちが、現在働いていることをとおして、「自分が犠牲になっても家のことをまず考えるべきだ」と考えているかどうかである。男女の半数以上が犠牲的精神を肯定している。戦後の民主的教育の中に育った若者たちではあるが、彼らのおかれている現実の姿——二・三男や女子にとっては無駄骨おりである場合もあろう——の認識を、そのように決定づける要因、彼らをそう思わせる事実があるからであるまいか。たとえば第44図の「生きがい」をみると、「家計を助ける」とした者がかなり見られるし、家計がくるといって答えた者が二・三男に半数、長男に30%、女子に26%あるなど、彼らの働きを意味づける要因となるように思われる。そして長男よりも二・三男や女子にそうした考えの者が多いのも、長男には宿命的、運命的意識が強く、犠牲的とまで思わない者が多いからであろう。

#### 4. 青年たちからみた家の暮らしや収入

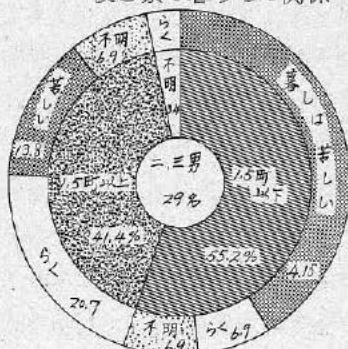
農家の収入については資料12で示してあるが、経営規模からいって1町以下の農家も相当あるわけだから、家の暮らしもおしなべて楽とはいえないし、む

第 41 図 家の暮らしや収入など……全国集計との比較



しろ苦しい家が相当あることは事実である。第1問の結果では、二・三男に苦しいとしている者が多いことがわかる。そして第2問でもそれが裏づけされている。すなわち「仕事での収入はまあよい」と答えている者が32%しかなく、「あまりよくない」「わるい」とした者が65%もあることでわかる。そこで二・三男だけの経営規模と家の暮らしについて第42図によってみると、二・三男在家の農家は半数以上が1.5町以下の本果としては経営規模の中以下のものでしめられており、それらの大部分は生活が苦しい苦しいほうだとしている。しかし資料4によれば長男層の家庭には、二・三男層の家庭よりも1.5町以下の家庭が多く（65%に及んでいる）、二・三男でみられる家の暮らしに対する評価の関係からすれば、二・三男以上に苦しい割合があつてよいわけである。それが逆に楽だとか楽のほうだとしているのはどうした理由からであろうか。思うに二・三男は選職の理由からでもうかがわれるように、労働力として確保されているとしか思われぬ者が大部分で、彼らは機会があれば他への就職を望んでいる。しかも村や部落の中には自分と同じ運命にある仲間の数も少なく（この点女子は異なっている）、将来へのあせりや自分のおかれている位置についての劣等感が大きく作用していると思われる。そうした感情が、「俺の家の暮らしはどうみても他家よりはよくない」と悲観的見解をとらせたのであらうと考えられる。

第42図 二・三男家庭の経営規模と家の暮らしの関係



(註) 内円は規模別、外円は暮らしに対する評価のそれぞれの割合を示している。

第3問は収入増加に努力していると答えた者の割合であり、第4問は、そうした努力をすれば将来可能であると希望をもっている者の割合を示している。現に努力している者より、将来の可能性を示した者の割合がはるかに多く、働きさえすれば収入はひとりでについてくるといった安易な考えがひそんでいるようにも思われる。第5問は家の暮らしをよくする努力をしている状況でありここで長男の割合が少ないことが気にかかる。そこで家の暮らしをよくするために、具体的にはどのような努力をしているのかを確かめてみると第54表のよ

うになる。長男、二・三男ともに50%前後が収入増加にもっとも力をそそいでおり、同じく20%余りが「家族が仲よく暮らせるよう」努めている。通勤男子青年の場合、この項目が第1位で34%もあったことからすれば、農村男子青年の場合はさし迫った生活への対処が彼らの頭から離れないもののようである。

第54表 家の暮らしをよくするための努力……全国集計との比較

応 答	収入増加に努力している	生活改善	家族が仲よく暮らせるよう	家族が病気にならないうよう	ゆたかな教養を身につける	その他	どうすればよいかからない	べつに努力していない	重・無答	計
長 男 人 数	24	8	11	2	—	2	—	—	4	51
" %	47.1	15.7	21.6	3.9	—	3.9	—	—	7.8	100.0
二・三男 人 数	15	1	7	1	5	—	—	—	—	29
" %	51.9	3.4	24.1	3.4	17.2	—	—	—	—	100.0
女 子 人 数	14	10	32	8	12	—	6	4	3	89
" %	15.7	11.2	36.0	9.0	13.5	—	6.7	4.5	3.4	100.0
全国 男子 %	24.1	8.8	35.7	8.0	7.0	2.2	4.3	7.1	2.8	100.0
" 女子 %	16.5	9.2	37.1	13.4	10.2	1.0	3.9	5.5	3.1	99.9

そして長男はそうした収入も考え、出るを制して入るを図る意図からであろうか、生活改善を第一にとりあげている者もかなりある。ところが二・三男で注目されるのは、「ゆたかな教養を身につける」努力が家の暮らしをよくするとだと判断していることである。そのような判断を下したのは定時制在学中の青年で、彼らはいまは家で世話になっているが、近い将来には立派に就職し一人立ちすることによって、家の暮らしをよくすることができるし、また現在教養を身につけることによって、有形無形の影響を及ぼしているとも考えているのであろう。これは高校教育を受けることによって進んだ考え方を身につけたからだといってよい。

ところが女子になると男子と趣を異にしてくる。彼女らの第1の努力は「家族が仲よく暮らせるよう」につとめることであって、全国的女子も全く同様の傾向を示している。農村の女子が男子よりも従属的な「あなたまかせ」で働いていることはすでに述べたとおりであるが、そうした彼女らのおかれている立場を如実に反映していると考えられる。しかしここでも「ゆたかな教養を身につける」ことと答えているものが13%もあることは注目してよい。

第6問は人間関係がうまくいっているかどうかを問うたのであるが、男女の

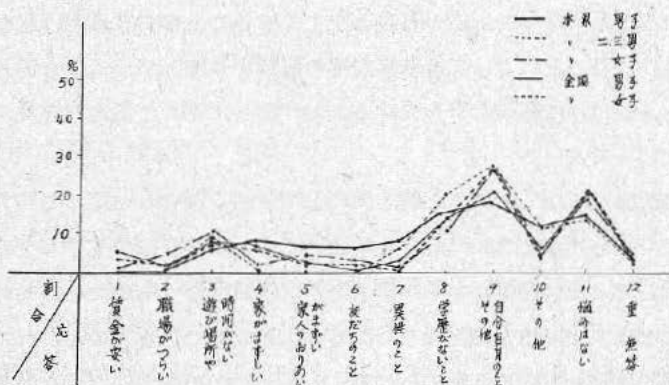


80%以上がうまくいっていると、家庭の秩序が保たれているとの判断に立っている。その内容が民主的であるか、あるいは旧態依然たるものなのかは不明である。最後に「家業の将来性」を問うてみた。将来性があると判断した者が男女とも50%を越している。ここでは長男の見とおしがいちばん厳しくなっており、家の暮らしは楽なほうだと答えた者まで将来性を悲観的にみている。農家のおかれている現実を二・三男や女子よりも広く深く体験し、その容易でないことがわかりかけてきているからではあるまいか。

### 5. 悩み——生きがい——生活理想

農業青年の多くの場合、中学校卒業後およそ1年ていどは、長い学校生活になれた生活慣行が持続し、新しい世界にただちにはいきぬ期間がしばしばみられるし、理想と現実とが分離し身近な現実の農業生活は、これを受動的にうけながしながらも、自分の理想をさまざまに描いて試みようとする。しかし現実の大きなかべはあまりにも厚く突き破るべくもなく、再び現実の自己をみなおして、これではならぬと生活場面に反省を加える。長男はこの家の農業をうけ継いでいかねばならないのだとの自覚がわき、二・三男はやがてはこの家を去らねばならないのだがどうしたらよからうかと悩む。女子もまた都市生活にあこがれながらも自分のおかれている立場から、それをあきらめたりさら

第43図 いちばん悩んでいること……全国集計との比較



に強めたりする。19才の農業青年たちはこのような自覚と、反面いえようのない不安も蔵しながら生活しているのではあるまいか。彼らの悩みをそうした観

点から検討してみると、第43図に現われた青年たちの苦悩の姿が理解されるような気がする。

まず二・三男に注目してみよう。約50%が「自分自身のこと」と「学歴がないこと」に集中している。これは長男や女子の割合よりもはるかに高く、通勤青年や住込み青年にくらべてもはるかに高い。1から8までの項目に入らない自分自身の問題とは何を意味しているのであろうか。最大の関心はおそらく自分の身のふり方であると思われる。いつまでも家に奉仕していることはできない。さりとて何の準備もなくいきなり都市の職場へ就職してもうまくいくものでもない。そうしたあせりと自己矛盾の心情が彼らの脳裏をつねに去来し、その解決に苦慮しているものと解される。その悩みの中に「学歴がない」——多少でもよい職場への就職条件がはばまれている——という劣等感も生じてくるのであって、彼ら二・三男のおかれている現実認識がそうさせているのである。そしてこうした悩みを持っている青年たちは例外なく両親のある家庭に育っている事実も見逃せないように思われる。

次は長男であるが、二・三男同様「自分自身のこと」と「学歴がない」ことの割合が高くなっているが（あわせて34%）、その集中度は二・三男ほどでなく、3、4、5、6、7などの項目に7～8%づつの分数がみられる。それは長男のおかれている立場によって「家がまずしい」ことであったり、「家人のおりあいがまずしい」「友だちのこと」とか、「異性」に対する関係などバライターに富んでいる。そして二・三男同様、悩みのない者も15%みられ、問題意識のない、なるようにしかならないといったなりゆきまかせの青年たちの姿ではないかと思われる。

女子は大きく二つに色分けされる。一つは「自分自身」の問題であり、他は「悩みはない」ということである。前者は28%、後者は20%に達している。女子青年が自分自身の問題で悩むことは、二・三男のような身のふり方でないかと思われる。それは就職といったさし迫ったものではなく、より多く第二の人生への設計であるまいか。農村は一般に早婚であり、成人式をまたずに結婚していく者もある。女子青年たちが理想として描いていた都市生活の夢——町人の嫁となる——や、せめて『洋裁にでも身をたてたい』といった漠然たる希望も、だんだん現実的な考え方に变化せざるをえなくなってくる。ここに女子青

年の悩みが出てくるのである。（研究紀要 第20集 農村青年の人間形成 35ページ参照）しかしそうした悩みをもたないで、なりゆきにまかせてその日その日を送っているのではないと思われる者もかなりあるわけである。その他「学歴がないこと」「遊び場所や時間がない」などそれぞれ10%余りに達している。

そうした悩みやその他なんでもうちあけられる人を聞いてみると第55表に示したとおりである。二・三男や女子は家の人をまず第一にあげている。ところが長男はそれが半減して近所の友だち、学校の友だちが逆に多くなってくる。通勤青年が職場の友だち学校の友だちを頼りにしている心的傾向が、そのままではないにしても長男層にも出てきていると思われる。19才の長男たちにとっ

第 55 表 なんでもうちあけられる人（全国集計との比較）

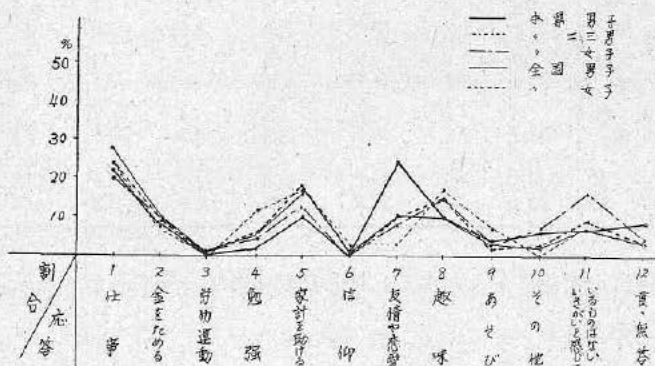
応 答	家のひと	小学校の先生	中学校の先生	せんぱい	近所の上役	職場の友だち	学校の友だち	恋人	その他	そのようない人	重・無答	計
長男人数	10	—	—	2	—	9	1	13	3	3	9	51
〃 %	19.6	—	—	3.9	—	17.6	2.0	25.5	5.9	5.9	17.6	100.0
二・三男人数	11	—	—	—	—	5	1	4	—	1	7	29
〃 %	38.1	—	—	—	—	17.2	3.4	13.8	—	3.4	24.1	100.0
女子人数	38	1	1	2	—	26	2	8	—	1	8	89
〃 %	42.9	1.1	1.1	2.2	—	29.2	2.2	9.0	—	1.1	9.0	100.0
全国男子 %	37.2	0.2	1.2	5.5	2.3	5.5	15.9	9.5	3.5	3.6	14.4	100.1
〃女子 %	45.2	0.2	0.7	3.1	0.9	3.7	20.5	8.8	2.9	3.3	9.6	99.8

ては、農業経営の一部または全部を担当し、そろそろ意欲を燃やし始めるころであるが、万事に回顧的な年よりの指図のまま動くことに困惑を感じ、それから抜けだし、親の指図の及ばない領域を築きたいと努力している者が多くなる。そうした農事に関係した悩みはもちろん、身辺雑事すべて気のあった学校友だち、近所の友だちにうちあけなくさめあうことによって、新しい知識や技術を獲得し生活にはりあいをもっていく。それが農事研究や青年団活動等につらなって、近く予想される村の中堅青年たりうる機縁となっていくのである。しかし二・三男は、近所の友だち、学校の友だちもあるであろうが、それらは多くは長男層であり、境遇を同じくする二・三男は数少ないものと思われる。長男たちは農事にうちこみはじめ、転職をひめている二・三男とは何となく話があわなくなってくる。そうした事情が伏在して家の人に頼らざるをえない者

の割合が多くなっているのであるまいか。女子青年の場合、余暇を利用して話しあえる友だちが極限されてくる。他部落まで出かける余裕ももてず、近所の友だち——それも気のあう同級生くらいならまだしも、年令差があると遠慮してしまう。いきおい母親、姉といったところに落ちつくのであるまいか。

以上のごとき諸事情はまた青年たちの生きがいをもある程度規制しているようである。長男に友情や恋愛（これは二・三男よりも多いことは、第44図でも理解できる）をあげた者が4分の1もあり、二・三男に趣味や勉強をとりあげ

第 44 図 生 き が い……全国集計との比較



た者が30%もあるなど、前者は相互に激励しなくさめあえる友人をもっているからであり、後者はそうした志を同じくする友人も数少なく、現在将来の生活をおもんばかってやるせない気持を趣味でなくさめたり、勉強することによって活路を見出そうとしているかのようである。そして女子青年にも趣味や友情恋愛をとりあげた者がかなりある。また仕事に生きがいを感じている青年は、長男、二・三男、女子ともに20%前後あるし、家計を助けることをあげた者もかなりある。反面、生きがいを感じているものはないと答えた者は女子青年に17%もあり、その日暮らした的な平凡な生活を感じさせる。

では農業青年たちの将来への生活理想はどうなのであろうか。提示した項目が6項目しかないためかたよりがあると思われるが、第56表はその結果を示している。これによると長男、二・三男ともに同じような結果がでている。すなわち第一は「気楽に生活が楽しめる」ことであり、第二は「ひとなみの生活」



ということである。ここでは仕事に生きがいを感じている者も、将来とも「仕事にうちこんでいく」とした者はほとんどなく、「社会のためにつくす」といった隣人愛も、独立自営をうたった「ひとに使われない」ことも影をひそめている。女子青年も大体似たような傾向を示し「べつにこれといった理想はない」者が若干めだつ程度である。こうした考え方は農業青年だけでなく、通勤

第 56 表 生 活 理 想 (全国集計との比較)

応 答	ひとなみの生活	ひとに便われない	気楽に生活が楽しめる	社会のためにつくす	仕事にうちこんでいく	べつにこれといった理想はない	重・無 答	計
長 男 人 数	18	2	25	2	2	1	1	51
" %	35.3	3.9	49.0	3.9	3.9	2.0	2.0	100.0
二・三男 人 数	9	1	15	2	—	1	1	29
" %	31.0	3.4	51.9	6.9	—	3.4	3.4	100.0
女 子 人 数	34	1	36	5	4	7	2	89
" %	38.2	1.1	40.5	5.6	4.5	7.9	2.2	100.0
全国 男子 %	38.5	9.6	29.7	4.4	11.4	4.8	1.6	100.0
" 女子 %	43.4	4.2	32.2	5.0	9.2	4.4	1.5	99.9

青年にも住込み青年にもみられる。むしろ勤労青年一般にみられる思想といってもよいであろう。

## 6. 教育の機会

農村青年の教育機会に関しては、当所においても数多くの研究調査を実施してきた。ここでみられるいろいろの結果もそれらの研究調査の域を出る新しいものは見当たらない。ただ全国集計の結果と比較して、本県農村青年の特徴的な部面はかなりみられるし、長男や二・三男、それに女子の相異など、いままでみてきた青年たちの意識を裏づけるようなものもあるように思われる。そこでできるだけ要約的にそれらの点を指摘しながら実態を明らかにしたいと思う。

### (1) 高校関係では定時制在学者が多い

資料13によると、男女とも定時制在学者の割合が全国平均を上まわっている。特に二・三男の率がきわめて高いのは(38%)特色といってよい。通勤男子青年の場合にも似たような割合がみられたし、しかも転職を希望する者がそれらの半数をしめていた。農村二・三男の場合も農業離脱の機会が定時制を卒

業することによって訪れることであろう。それは「いまの仕事をかわりたい」とするものが、11人中10人あることで判断できよう。

## (2) 各種学校関係

資料14をみると、女子の家庭関係卒業外の14%を除いてみるべきものがなく全般的にきわめて低調というほかはない。全国集計をみると男子は本県同様ふるわないが、女子の家庭関係が本県の二倍近くの率となっている。

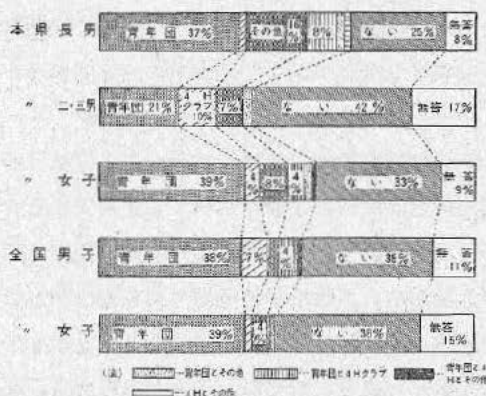
## (3) 他の教育機関について

資料15によると、青年学級関係者の率がきわめて高く、社会通信教育を除けば他にみるべきものがない。全国集計も大体同じような傾向を示しているが、本県の男子では二・三男の率が長男よりも相当低くなっている。これは青年学級が長男や女子を吸収し易いように運営されてはいるが、二・三男には魅力をもたせる存在になっていない傾向を物語っていると思われる。

## (4) 各種の団体やサークルについて

「あなたは青年団や4Hクラブ（農事研究会）など、各種の団体やサークルにはいて、勉強やレクリエーションをしたことがありますか」という問に対する回答の割合を示したものが第45図である。ここでも二・三男の関係者が長男や女子とかなり相異しているのが目につく。たとえば青年団であるが、本県

第45図 団 体（全国集計との比較）



全国の男女を通じ37～39%の関係がみられるのに、二・三男は21%しかみられない。しかし4Hクラブには10%とかなり高い率をみせている。農村における青少年団体や学習集団は、地域青年団を筆頭に、青年学級、農村青少年クラブ、農協青年部その他サークル的な各種団体などかなり多彩なものがあるが、青年団体の主軸は、この図でみられる青年団や農村青少年クラブで代表されている（文部省発行の「進みゆく社会の青少年教育」30ページ参照）。ところで地域青年団活動であるが、一般的には行事中心の活動に偏しているし、また幹部中心の活動が多いことが特色となっている。これに対して農村青少年クラブでは（20才以下の青少年を主体とする4Hクラブと、20～25才の青年を主体とする青年農業改良クラブとに大別される）、行事的活動とは根本的に異なった恒常的な研究活動を行なうという点において、青年団の一面の欠点を克服しうる可能性をもっている。このように考えてくると、青年団はその実質的な活動を青少年クラブや青年学級に吸いとられて、たんなるいれものとしての意味しか果さなくなるのではないかと心配される。そうした曲り角にたちながらもなおかつ、農業青年の4割近くを吸収していることは伝統の強味といってよからう。しかし、二・三男や商工青年を引きつける魅力に欠けていることはそれらの参加者が少ないことが有弁に物語っている。

#### (5) 個人的な修養について

資料16は個人の勉強について問うた結果であるが、全般的にみて個人的勉強はほとんどしていないといってよい。農業に従事している青年だから農業の勉強をしなければならないというきまりはないが、やはり職業的なものに比重がかかっている。全国集計も低調であって、女子の家庭関係がかなり目だつ程度である。

ところで日常の新聞の読み方などでは、長男、二・三男、女子とそれぞれ特徴的な面が多少出ている。「ひととおりのすべてを読んでいる」者は3分の1以上で似ているが、長男は社会面とスポーツ面に45%が集中、二・三男も同様に38%がそれに集中しながらも、政治や経済面に興味をひかれていた者が14%あることは、それだけ政治や経済に敏感な者がいることを示している。女子では家庭欄と社会面に40%が集まり、娯楽にも12%がみられる。これを通勤青年や

第 57 表

新聞を読んでいるか (全国集計との比較)

応 答	ひと と お り す べ て	おも に 小 説	おも に 政 治 経 済 記 事	おも に 家 庭 ら い	おも に 社 会 面	おも に ス ポ ー ツ 面	おも に 娯 楽 記 事	そ の 他 の 記 事	あ ま り 読 ん で い な い	重 ・ 無 答	計
長 男 人 数	21	—	2	—	13	10	2	—	1	2	51
" %	41.2	—	3.9	—	25.5	19.6	3.9	—	2.0	3.9	100.0
二・三男 人数	9	1	4	—	6	5	—	—	3	1	29
" %	31.2	3.4	13.8	—	20.7	17.2	—	—	1.03	3.4	100.0
女 子 人 数	28	3	1	20	16	2	10	—	3	6	89
" %	31.5	3.4	1.1	22.5	18.0	2.2	11.2	—	3.4	6.7	100.0
全国 男子 %	33.2	2.4	6.1	0.9	21.3	23.0	3.4	0.9	5.0	3.7	99.9
" 女子 %	35.9	3.4	2.4	12.2	24.2	3.5	5.6	0.9	8.6	3.5	100.2

住込み青年と比較すると、住込み男子青年はスポーツ愛好者が断然多く、通勤男女青年は3分の1以上がひととおりで読み、次は男子はスポーツ面に女子は社会面に集中していたし、住込み女子青年は社会面と娯楽面に2分されていた。このように農業青年は農業青年として他の職業青年と趣を異にしていることがわかる。

新聞と関連して社会や政治の勉強について努力の程度をきえてみると、資料19のように努力している者の割合が男子では3分の1以上、女子でも24%にのぼってくる。これらの青年たちは努力はしているが、新聞では政治経済記事が第一に興味をひくまでになっていないということであろう。ともあれこれからの農業青年には客観的社会課題に多面的にふれさせ、それらがすべて政治につながっていることの認識を深めさせ、農村問題の解決能力を大きな視野から身につけさせることが必要なのである。

次に「勉強は金もうけになってこそねうちがあるのだ」という提示をして同意か反対かを問うたところ、資料18のような反応があった。すなわち「ほんとにそう思う」としたり消極的ながら同意を示した者は長男に約30%と一番多く二・三男は21%、女子は24%となっている。農業労働の結果は農産物価格をとおしてその収穫の多寡によって決定されるので、農村青年は経営の多角化や合理化によって収量をあげ、少しでも現金収入を増加させたいと苦心している。金もうけをそうした価値実現と解釈すれば、同意した者はあながち功利的とばかりは解されまい。長男層に同意者が多いのもそうした現実的要請が二・三男や女子よりも強く求められ、関心をひいているからである。しかしそうしたう



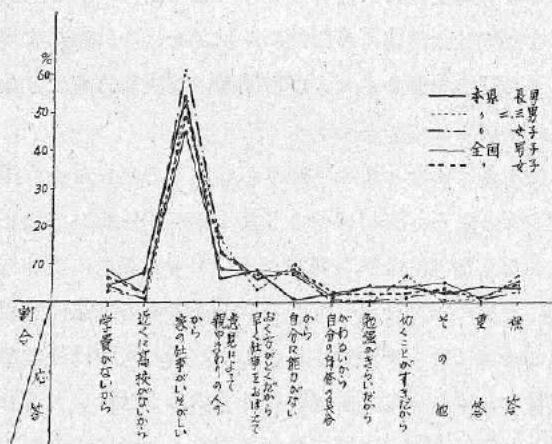
けとり方はあまりにもうがちすぎているかもしれない。

以上のような個人的修養と関連して、青年たちが今の仕事をすすめていく上で勉強の必要をどの程度感じているのかを資料20でみてみると、さすがに長男がもっともその必要を認めている。すなわち長男の7割は「大いにある」とし2割余りが「ややある」としている。これに反し二・三男の31%は「あまりない」とか「まったくない」としており、女子にも18%の者がそのように反応している。

また勉強する機会や条件については、資料21のように、二・三男や女子の方が長男よりもめぐまれていると認めている。とすると二・三男や女子は勉強する機会や条件はめぐまれているが、今の仕事をすすめていく上での勉強を必要としない者が多く、それらの青年が農業に興味をもたなかったり、仕事を続けていく意志のないこと等とつながった意志表示と思われる。

最後に農業青年が全日制高校へ進学しなかった理由を明らかにしておく。「家の仕事がいそがしい」との名目で進学しなかった者が男女とも50%以上ある（女子は62%）。これは全く農業青年特有の理由であって、通勤青年が能力のないことや早く仕事をおぼえること、学費がない等を理由とし、住込み青年

第 46 図 不 進 学 の理由……全国集計との比較



が早く仕事をおぼえる方がとくだとしたことなどと対照される、それぞれの生活のタイプを派生させた直接の動機といってもよいであろう。

## 7. 調査結果の要約と教育上の問題点

これまで農業青年を、生活のタイプからみて大きく三つに分け、それぞれのタイプに即した生活意識の解明を試みてきた。長男には長男特有の考え方があり、二・三男には二・三男としての生活事情や将来の生活設計からくる特異性がみられたし、女子にはこれまた男子と異なる意識がみられた。それらをいちいち繰返すことはさけることにする。ただ教育の機会に関してはそれぞれのタイプに応じて教育機関の選択を行っており、全国集計の農業男女青年と比較しても低いものではなく、定時制や青年学級などにはむしろ高いものがみられた。試みに中学校卒業後、何らの教育の機会に恵まれていない者は、長男二・三男ともに10%にすぎず、女子も11%にとどまっている。こうした点からみれば農業青年には教育機会が恵まれているといえる。しかし、その内容となるとたとえば二・三男が青年学級や青年団等に関係した場合、彼らの望むような教育の場として有意義なものかどうかは甚だ疑わしい。農業青少年の教育がそうした参加し易い形で存在していることは否定しないが、問題は彼らの人間形成にどれだけプラスになるかという点である。これらに関してはあまりにも多くの著述がみられ、また当教育研究所においても、研究紀要第二十集「農村青年の人間形成」においてくわしく論述しているので、ここでは課題として提起するにとどめる。

資料 1 農業経営でもつとも力をいれていること

……全国集計との比較

応答		米・麦	野菜 たばこ	果花	物	畜産	酪農	養蚕	林業	その他	重答	無答	計
本県長男	人数	49	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	51
"	%	96.0	—	—	—	—	—	2.0	2.0	—	—	—	100.0
"二・三男	人数	27	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	29
"	%	93.2	—	—	—	—	—	—	3.4	—	—	3.4	100.0
"女子	人数	82	1	—	—	—	—	—	—	1	4	1	89
"	%	92.2	1.1	—	—	—	—	—	—	1.1	4.5	1.1	100.0
全国 男子	%	72.6	6.4	3.8	3.3	3.9	1.4	3.0	2.4	1.4	1.7	—	99.9
" 女子	%	83.3	3.7	1.9	0.4	1.4	1.5	1.3	2.4	2.6	1.4	—	99.9

資料 2 次に力を入れているもの……全国集計との比較

応答		米・麦	野菜 たばこ	果花 物	畜産	酪農	養蚕	林業	その他	重答	無答	計
本県長男	人数	2	7	2	8	—	15	5	5	—	7	51
"	%	3.9	13.7	3.9	15.7	—	29.5	9.8	9.8	—	13.7	100.0
"二・三男	人数	—	9	1	3	2	7	—	4	—	3	29
"	%	—	31.2	3.4	10.3	6.9	24.1	—	13.8	—	10.3	100.0
"女子	人数	2	36	3	4	1	18	6	5	2	12	89
"	%	2.2	40.6	3.4	4.5	1.1	20.2	6.7	5.6	2.2	13.5	100.0
全国 男子	%	11.8	18.0	7.8	22.5	7.3	7.0	9.0	6.3	1.5	9.0	100.2
" 女子	%	7.7	25.9	6.1	16.2	5.2	10.7	8.6	5.9	1.4	12.2	99.9

資料 3 主たる経営状況……全国集計との比較

応答		1	2	3	4	5	6	7	8	9	y	計
本県長男	人数	27	—	41	1	—	—	—	—	—	3	72
"	%	37.5	—	56.9	1.4	—	—	—	—	—	4.2	100.0
"二・三男	人数	13	—	25	—	—	—	—	—	—	1	39
"	%	33.3	—	64.1	—	—	—	—	—	—	2.6	100.0
"女人	人数	51	—	73	—	—	—	—	—	—	5	129
"	%	39.5	—	56.6	—	—	—	—	—	—	3.9	100.0
全国 男子	%	28.7	23.1	38.9	4.9	2.8	1.7	0.7	0.7	4.2	5.0	—
" 女子	%	31.2	20.0	39.5	3.4	2.5	1.5	0.3	0.1	2.1	7.8	—

- (注) 応答 1＝水田面積／耕地面積 80%以上のもの(水田農家)  
 2＝畑面積／耕地面積 60%以上のもの(畑作農家)  
 3＝田畑の面積／耕地面積 80%以上のもの(田畑作農家)  
 4＝果樹園の面積／耕地面積 30%以上のもの(果樹作農家)  
 5＝耕地面積の内容が上記以外のもの(複合経営農家)

- 6＝酪農を取り入れた農家（乳牛3頭以上）  
 7＝養豚を取り入れた農家（豚10頭以上）  
 8＝養鶏を取り入れた農家（成鶏100羽以上）  
 9＝山林所有農家（山林30町歩以上）  
 y＝無答

資料 4 経営規模……全国集計との比較

規 模	3反未満	3～5反	～8反	～1町	～1町 5反	～2町	2町 以上	無答	計
本県長男 人数	1	4	9	1	18	3	13	2	51
" 男子 %	2.0	7.8	17.6	2.0	35.3	5.9	25.5	3.9	100.0
" 二・三男人数	—	1	4	—	11	4	8	1	29
" 男子 %	—	3.4	13.8	—	38.0	13.8	27.6	3.4	100.0
" 女子 人数	—	2	9	6	28	12	27	5	89
" 女子 %	—	2.2	10.1	6.7	31.6	13.5	30.3	5.6	100.0
全国 男子 %	2.6	7.2	18.9	13.4	26.6	13.5	12.5	5.4	100.1
" 女子 %	3.4	5.9	16.6	11.6	23.4	15.6	15.1	6.7	98.3

資料 5 農業従事者……全国集計との比較

応 答	1人	2人	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人	11人 以上	無答	計
本県長男 人数	1	10	27	7	4	1	—	—	—	—	—	1	51
" 男子 %	2.0	19.6	52.9	13.7	7.8	2.0	—	—	—	—	—	2.0	100.0
" 二・三男人数	—	4	8	11	4	—	—	—	—	—	—	2	29
" 男子 %	—	13.8	27.6	37.9	13.8	—	—	—	—	—	—	6.9	100.0
本県女子 人数	1	11	34	31	6	2	—	—	—	—	—	4	89
" 女子 %	1.1	12.4	38.3	34.8	6.7	2.2	—	—	—	—	—	4.5	100.0
全国 男子 %	1.4	16.8	49.9	20.5	6.9	1.7	0.4	—	—	0.3	—	2.1	100.0
" 女子 %	1.5	12.0	40.1	28.5	10.6	2.2	0.8	0.3	0.1	—	—	3.8	99.9

資料 6 耕作方法……全国集計との比較

応 答	1	2	3	4	5	6	y	計
本県長男 人数	16	14	7	10	1	2	1	51
" 男子 %	31.3	27.5	13.7	19.6	2.0	3.9	2.0	100.0
" 二・三男人数	9	3	3	9	5	—	—	29
" 男子 %	31.1	10.3	10.3	31.1	17.2	—	—	99.8
" 女子 人数	25	16	20	22	1	1	4	89
" 女子 %	28.1	18.0	22.5	24.7	1.1	1.1	4.5	100.0
全国 男子 %	27.3	33.0	12.9	21.8	1.7	1.2	2.2	100.1
" 女子 %	24.4	36.2	10.8	24.4	1.0	1.4	1.9	100.1



- (注) 応答 1=すき・くわなどで耕作する。  
 2=牛や馬をつかって耕作する。  
 3=カルチベーターなどの機械で耕作する。  
 4=牛馬も機械もともに使って耕作する。  
 5=その他  
 6=重 答  
 7=無 答

資料 7 家 に あ る 機 械……全国集計との比較

応 答	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
本県長男 人数	5	1	11	1	—	8	2	1	4	—	—	18	51
" 女 子 人数	9.8	2.0	21.6	2.0	—	15.7	3.9	2.0	7.8	—	—	35.2	100.0
" 二・三男 人数	2	2	3	2	1	2	1	2	5	—	—	9	29
" 女 子 人数	6.9	6.9	10.3	6.9	3.4	6.9	3.4	5.9	17.2	—	—	31.2	100.0
" 二・三男 人数	7	1	14	8	—	9	4	12	8	2	1	23	89
" 女 子 人数	7.9	1.1	15.7	9.0	—	10.1	4.5	13.5	9.0	2.2	1.1	25.9	100.0
全国 男子 人数	13.3	2.7	10.0	14.4	1.8	4.8	6.4	5.5	4.5	0.3	0.7	35.7	100.1
" 女 子 人数	11.4	1.2	9.4	14.8	1.3	4.5	6.7	6.1	3.7	—	0.8	40.2	100.1

- (注) 応答 1=耕作用動力機械のみ  
 2=運搬用動力機械のみ  
 3=加工用動力機械のみ  
 4=除虫・除草用動力機械のみ  
 5=1と2  
 6=1と3  
 7=1と4  
 8=2と3, 2と4, 3と4  
 9=1と2と3, 1と2と4, 1と3と4  
 10=2と3と4  
 11=1と2と3と4  
 12=なし及び無答

資料 8 農 業 簿 記……全国集計との比較

応 答	つけている	つけていない	重 答	無 答	計
本県長男 人数	13	37	—	1	51
" 女 子 人数	25.5	72.5	—	2.0	100.0
" 二・三男 人数	2	26	—	1	29
" 女 子 人数	6.9	89.7	—	3.4	100.0
" 二・三男 人数	31	49	—	9	89
" 女 子 人数	34.8	55.1	—	10.1	100.0
全国 男子 人数	33.7	62.1	0.8	3.8	100.4
" 女 子 人数	33.1	59.6	1.0	6.3	100.0

資料 9

生計費と農業所得……全国集計との比較

応 答	1割	2割	3割	4割	5割	6割	7割	8割	9割	10割	無答	計
本県長男 人数	—	—	1	3	4	2	6	6	4	7	18	51
" %	—	—	2.0	5.9	7.8	3.9	11.8	11.8	7.8	13.7	35.3	100.0
" 二・三男 人数	1	—	—	1	1	1	2	3	5	4	11	29
" %	3.4	—	—	3.4	3.4	3.4	6.9	10.3	17.3	13.8	38.1	100.0
" 女子 人数	2	4	3	2	4	2	1	10	7	8	46	89
" %	2.2	4.5	3.4	2.2	4.5	2.2	1.1	11.2	7.9	9.0	51.8	100.0
全国 男子 %	1.7	1.9	3.9	4.1	5.7	5.5	10.0	13.9	10.6	16.8	26.2	100.3
" 女子 %	0.9	1.1	3.4	2.5	5.5	4.8	5.7	13.1	8.6	17.6	36.8	100.0

資料 10

経営をまかされているか……全国集計との比較

応 答	1	2	3	4	5	6	7	y	計
本県長男 人数	8	—	18	—	2	21	—	2	51
" %	15.7	—	35.3	—	3.9	41.2	—	3.9	100.0
" 二・三男 人数	2	2	3	—	1	16	2	3	29
" %	6.9	6.9	10.3	—	3.4	55.3	6.9	10.3	100.0
" 女子 人数	1	—	5	—	3	75	1	4	89
" %	1.1	—	5.6	—	3.4	84.3	1.1	4.5	100.0
全国 男子 %	14.6	8.5	24.1	0.3	6.6	41.3	0.4	4.1	99.9
" 女子 %	3.9	2.5	13.9	0.2	5.1	69.1	0.2	5.0	99.9

(注) 応答 1=すべてじぶんがやっている。

2=一部(技術関係)をまかされている。

3=一部(生産の一部門)をまかされている。

4=一部(出荷・販売部門)をまかされている。

5=一部(その他および( )内無記入)をまかされている。

6=さしづをうけてやっている。

7=重 答

y=無 答

資料 11

兼

業……全国集計との比較

応 答	1	2	3	4	5	6	7	8	y	計
本県長男 人数	14	1	4	1	2	15	11	—	3	51
" %	27.4	2.0	7.8	2.0	3.9	29.4	21.6	—	5.9	100.0
" 二・三男 人数	12	2	2	1	—	10	1	—	1	29
" %	41.5	6.9	6.9	3.4	—	34.5	3.4	—	3.4	100.0
" 女子 人数	49	3	1	2	11	7	6	—	10	89
" %	55.1	3.4	1.1	2.2	12.4	7.9	6.7	—	11.2	100.0
全国 男子 %	57.5	6.3	8.5	1.7	3.9	9.8	5.1	0.3	7.1	100.2
" 女子 %	61.7	6.6	2.6	1.9	8.6	4.2	3.0	0.7	10.8	100.1

- (注) 応答 1=していない。  
 2=年間を通じて(やとわれてする仕事)をしている。  
 3=年間を通じて(農業以外の仕事)をしている。  
 4=年間を通じて(不用・無記名)をしている。  
 5=季節によつて(農業以外の家の仕事)をしている。  
 6=季節によつて(やとわれてする仕事)をしている。  
 7=季節によつて(不明・無記名)をしている。  
 8=年間と季節の両方に○をしたもの。  
 ♪=無 答

資料 12

総 収 入 / 家 族 総 数

応 答		~4.	~5.	~6.	~7.	~8.	~9.	10.	11.	12.	13.	13.	無答	計
		000円	000	000	000	000	000	000	000	000	000	000以上		
本県長男	人数	13	3	1	2	1	1	—	2	—	—	5	23	51
"	%	25.5	5.9	2.0	3.9	2.0	2.0	—	3.9	—	—	9.8	45.0	100.0
"二・三男	人数	8	2	1	1	1	1	1	—	1	—	—	13	29
"	%	27.6	6.9	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4	—	3.4	—	—	45.1	100.0
"女子	人数	17	4	2	—	1	1	—	—	—	1	3	60	89
"	%	19.1	4.5	2.2	—	1.1	1.1	—	—	—	1.1	3.4	67.5	100.0
全国	男子 %	34.9	9.1	0.8	5.3	3.7	2.9	0.3	2.6	0.3	0.3	2.4	37.4	100.0
"	女子 %	32.4	8.8	6.3	4.5	1.6	2.6	0.2	1.0	0.1	0.1	0.9	41.5	100.0

資料 13

高 校 関 係……全国集計との比較

応 答	全中 日制	別卒 科業	別中 科退	別在 学 科中	別不 明 科明	定中 時退	定在 学 時中	定不 明 時明	通在 信学 教育中	通中 信退 教育明	通退 信不 育明	な無 い答	計
本県長男 人数	—	—	—	—	—	8	11	—	2	—	—	30	51
" 人数 %	—	—	—	—	—	15.7	21.6	—	3.9	—	—	58.8	100.0
" 二・三男 人数	1	—	—	—	—	2	11	—	—	1	—	14	29
" 人数 %	3.4	—	—	—	—	6.9	37.9	—	—	3.4	—	48.4	100.0
" 女子 人数	—	—	—	—	—	2	10	—	1	2	—	74	89
" 人数 %	—	—	—	—	—	2.2	11.2	—	1.1	2.2	—	83.3	100.0
全国 男子 %	2.5	0.7	0.2	0.2	0.5	7.5	18.5	0.3	1.1	1.1	0.4	66.9	100.0
" 女子 %	1.1	2.2	—	0.2	0.1	1.4	10.7	0.2	0.8	1.6	1.0	80.7	100.0





資料 17

勉強についてどう思うか……全国集計との比較

応 答	自分ひとり コッコッ勉強する	勉強するも のとはつき あいにくい	勉強したいも のにはさして おくらず今に さらす気はな い	仲間をつく って勉強す る	重答・無答	計
本県男子 人数	15	1	4	29	2	51
" 男子 %	29.4	2.0	7.8	56.9	3.9	100.0
" 二・三男人数	6	—	6	17	—	29
" 男子 %	20.7	—	20.7	58.6	—	100.0
" 女子 人数	16	3	4	59	7	89
" 女子 %	18.0	3.4	4.5	66.2	7.9	100.0
全国 男子 %	29.1	3.0	8.7	55.5	2.7	99.0
" 女子 %	27.6	2.0	7.2	58.9	4.3	100.0

資料 18

勉強は金もうけのため……全国集計との比較

応 答	ほんとに そう思う	そんな気 がする	あまり思 わない	ぜんぜん 思わない	重答・無	計
本県男子 人数	2	13	24	9	3	51
" 男子 %	3.9	25.5	47.1	17.6	5.9	100.0
" 二・三男人数	3	3	14	8	1	29
" 男子 %	10.3	10.3	48.4	27.6	3.4	100.0
" 女子 人数	6	15	27	30	11	89
" 女子 %	6.7	16.9	30.3	33.7	12.4	100.0
全国 男子 %	8.9	18.4	46.3	20.8	4.8	99.2
" 女子 %	7.1	15.1	45.5	26.0	6.3	100.0

資料 19

社会や政治の勉強について……全国集計との比較

応 答	大力量 いしにて 努力	努力 している	まあ努力 している	べがた ないこと を考	重答・無	計
本県男子 人数	3	14	15	16	3	51
" 男子 %	5.9	27.5	29.4	31.3	5.9	100.0
" 二・三男人数	2	9	11	5	2	29
" 男子 %	6.9	31.0	38.0	17.2	6.9	100.0
" 女子 人数	3	18	32	22	14	89
" 女子 %	3.4	20.2	36.0	24.7	15.7	100.0
全国 男子 %	11.2	24.5	37.1	23.7	3.6	100.1
" 女子 %	7.5	22.6	35.7	29.0	5.1	99.9

資料 20

勉強の必要があるかないか……全国集計との比較

応 答	大い に あ る	や や あ る	あ ま り な い	ま っ た く な い	重 無 答 答	計
本県男子 人数	36	11	2	—	2	51
" 男子 %	70.6	21.6	3.9	—	3.9	100.0
" 二・三男人数	12	7	5	4	1	29
" 男子 %	41.5	24.1	17.2	13.8	3.4	100.0
" 女子 人数	45	22	14	2	6	89
" 女子 %	50.7	24.7	15.7	2.2	6.7	100.0
全国 男子 %	60.9	24.2	10.1	1.8	3.0	100.0
" 女子 %	47.4	29.0	17.4	1.7	4.5	100.0

資料 21

勉強する機会や条件について……全国集計との比較

応 答	め ぐ ま れ	て い る	め て う ぐ い ま る れ ほ	め て ほ ぐ い う ま な れ い	ま め て つ ぐ な い た ま い く れ	重 無 答 答	計
本県男子 人数	3	19	23	2	4	51	
" 男子 %	5.9	37.3	45.1	3.9	7.8	100.0	
" 二・三男人数	3	14	8	3	1	29	
" 男子 %	10.3	48.4	27.6	10.3	3.4	100.0	
" 女子 人数	7	37	36	2	7	89	
" 女子 %	7.9	41.6	40.4	2.2	7.9	100.0	
全国 男子 %	13.1	41.4	37.4	5.8	3.2	100.9	
" 女子 %	10.4	39.4	39.3	6.0	4.8	99.9	

## あ　と　が　き

勤労青少年の生活意識調査はこれまでも各方面でなされ、その実績も大きなものがある。今回の共同研究調査は、そうした今までの実績に照して重複を避け、特に労働と学習を全生活領域や意識の中で青年たちが、どのように位置づけているかに焦点を合わせて、彼らの生活意識を構造的に究明するよう意図され、昭和32年からはじめられた共同研究に一応終止符をうつこととなった。これらの研究をとおして反省させられることは、勤労青少年が日陰者として忘れられたような存在であったのが、ここ数年にわたって脚光をあび、その教育施策が現実のものとしてとりあげられ、実施に移されているということである。これは単に勤労青少年のみの幸福でなく国家全体の将来を明るくするものとして喜びに堪えない。そうした意味からもこの小論が何等かの寄与をなしうるならば幸いである。

共同研究の一環であるこの研究では、本県における通勤青年、住込み青年、農業青年をそれぞれの生活類型において分析解釈を進めてきたわけであるが、調査人員や抽出方法等最初にも述べたとおり、必ずしも本県を代表するものではなく、またその研究において多分に一方的解釈に陥った部分がないかとおもわれている。そうした解釈について異論をもたれる方々もあり、とくに教育上の課題について異なった観点から、より具体性と現実性をもった体験や方法をおもちの方もあると思われる。それらについて忘たんない御意見、御教示をいただけるなら幸いである。

最後にこの調査を実施するについて、全面的に御援助と御協力をくださった調査対象市町村当局、ならびに教育委員会事務局、および調査票の配布、回収に御配慮、御支援をおしめなかった対象市町村の関係中学校、公民館等に深く感謝の意を表するものである。

なおこの調査研究の企画は主として前所員中浜新四郎（現県教育庁社会教育課勤務）があたり、所長楠佐小林正直、研究員栗賀貫次、羽鳥敬一の3名が共同推進をはかるとともに、全研究員が調査にあたった。そしてこの紀要の原稿を執筆したのは栗賀貫次である。